

絶えず祈れ (上巻)

ゴットホルド・ベック 著

絶えず祈れ

(上巻)

ゴットホルド・ベック 著

…キリスト・イエスにあつて神があなたがたに望んでおられることです。(1テサロニケ5・18)



わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、
あなたの知らない、理解を越えた大いなる事を、あなたに
告げよう。



イエス様を信じている
ひとびとだけでなく、どなたにもお読みいただきたい
と心から願っています。

著者 ゴットホルド・ベック





みななの折りに支えられ、
沖繩キヤンパ活動員として参加し救われた祖慶さん。



孫娘さんの折りにつてイエス様を信じ、
バプテスマの証しをする原田さん。



高知医科大学の医者である近藤さん一家、折りの日々。

絶えず祈れ (上巻)

…キリスト・イエスにあつて神があなたがたに望んでおられることです。(1テサロニケ 5・18)

ゴットホルド・ベック 著

はじめに

ゴットホルド・ベック

ここに「絶えず祈れ」の上巻を、本のかたちに見なさまにお届けできることは、大いなる主の恵みであり、感謝です。この本がなぜ刊行されたのか、はじめにちょっとだけその理由をあらわかにしておきたいと思います。

私たちのキリスト集会では、イエス様を信じて救われたかたがたの証し集として、「光よあれ」を刊行しつづけていますが、その一集から六集までには、じつに三百人近いかたがたがイエス様の救いのすばらしさについて、ご自分の体験を感動的な文章でしるしてくださいました。

このかたがたは、ひとりひとり、おかれていた環境も、いままですごしてきた生活の歴史も、まったくちがったかたがたですが、イエス様を知ることによって、あらゆる思いわずらいから解放され、その生活に考えられないような変化が起こったことを、具体的な体験をとおして告白し、証ししてくださったのです。私たちの周囲では、「光よあれ」にのっているかたがた以外にも、多くのかたがたがイエス様を信じることによってすばらしい体験をなさっていますが、このようなイエス様の救いのみわざについては、人間の頭ではとうていそのすべてを理解することができませんし、またほんとうの意味でそれらを説明することもできません。それらの証しがあきらかにしていることは、どのようにしてイエス様に会って、どのようにして信じたか、どのようにして救われたか、そしてその結果、どのように思いわずらいから解放され、平安をいただいたか、幸せをいただいたかということですが、それらをもたらししたイエス様による「救い」とは、いつ

はじめに

たいどういうものであるかについては、「光よあれ」をお読みになっただけでは十分にご理解いただくことができなかったのではないかと思います。

この欠けたところを補うために「神の愛」の上下巻が刊行されました。この「神の愛」上下巻は、聖書の「ローマ人への手紙」によって、神の愛とはなんであるか、救いとはなんであるかをごいっしょに学ぶための本でした。私たちは、イエス様の愛がどれほど大きくまたすばらしいものであるか、また死も、いのちも、いまあるものも、のちに来るものも、そのほかのどんな被造物も、決して主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引きはなすことはできないことをはじめ、じつに多くの啓示と恵みを「ローマ人への手紙」をとおしていただくことができました。

しかし、イエス様が提供してくださっているすばらしい救いをいただくための道は、なににもましてたいせつです。救いにいたる道とは、この世のなかで一般に考えられているように、キリスト教という組織にはいることでは決してありませんし、教会の会員になることでもありません。また、聖書を勉強することも、洗礼を受けることも要求されていません。まず、なによりもたいせつなのは、「主のみ名を呼び求めること」です。主のみ名を呼び求める者は、かならず救われます。そして、主のみ名を呼び求めることとは、つまり「祈る」ことです。

有名な詩人のハインリッヒ・ハイネは、かつては神を否定し、神をあざけたひとでしたが、あるとき、主なる神の啓示を受けて回心し、後悔とともに“O Herr, vergib mir meine Lieder!”（主よ、私の作った詩をお赦しくださいー）と祈り、神を否定する詩をすべて焼き捨てたのです。そして救われてのち、かれは、イエス様を熱心に伝えるようになったのです。

祈りのほんとうのたいせつさをよく知ることができれば、まだ救われていないかたがたはイエス様のもとに導かれ、また、すでに救われているかたがたは、いまよりもさらにさらに何倍も何倍もイエス様に祈るようになるにちがいません。

主なる神は私たちが祈ることを望んでおられます。なぜなら主なる神はあふれるばかりの祝福を私たちにそそぐとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえにそそがれるとびらをあけるのです。

そして、私たちが主に祈るためのはげましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、近く刊行される下巻です。この上巻には、「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」の七つのメッセージがおさめられています。

イエス様は、私たちの祈りにかならず答えてくださいます。そして私たちの祈りがかならず聞きとどけられるというなよりの実証が、このほどできた西軽井沢国際福音センターです。ですからこの「絶えず祈れ」の上巻には、私たちが主に祈り求めた結果として主が私たちにくださった西軽井沢国際福音センターが完成したようすを、カラーページのアルバムにして、またそれにつづいて、一九九二年五月三日に行なわれた献堂式でのメッセージや、多くのかたがたによって語られた証しの一部をこの本の後半部分に収録しました。この本をとおして、「祈る」ことがいかにたいせつであり、その結果どれだけ大きなことをイエス様がなしてくださるおかたであるかを、ひとりでも多くのかたがたに知っていただければ、これ以上の喜びはありません。

目次

はじめに	ゴットホルド・ベック	9
絶えず祈れ	上巻	15
絶えず祈れ	下巻	15
まことの祈り		43
祈りへのまねき		69
真剣な祈り		97
祭司としての奉仕		126
イエスのみ名によって祈る		147
祈りのかぎりない可能性		171

写真特集

完成した西軽井沢国際福音センターの献堂式と、

第一回バイブルキャンプのフォト・スケッチ 193

西軽井沢国際福音センターの献堂式にあたって ゴットホルド・ベック 209

主は奇蹟をなしてくださった！ 江藤善清 224

私の助けは、天地を造られた主から来る 羽石真二 229

主はあなたを見放さず、あなたを見捨てない 高橋艶子 236

必要を満たしてくださる主 佐々木サチ子 248

基礎的なみことば 253

「実を結ぶ命」のおすすめ 255
「光よあれ」のおすすめ 256

「神の愛」(上)(下)のおすすめ 258

全国のキリスト集会のご案内 260



▲がんで香川県三豊総合病院に入院中の故金田福一牧師とベックさん。折りともことばの奉仕。



▲夏のバイブル・キャンプで折り会の後に。上村さん(左)と高橋さん。

▼全国に広がる福音。ベックさんと江草先生を囲む清和学園の学生さんほか。



絶えず
祈れ

絶えず祈りなさい。

(1テサロニケ 5・17)

いつでも祈るべきであり、失望してはならない。

(ルカ 18・1)

「絶えず祈りなさい」という聖書のみことはこそが、この本ぜんたいをとおしての大きな、そして基本的なテーマです。まことの祈りと悔い改めがどれほどたいせつなものであるか、それはいくら強調しても強調しすぎることはありません。そのことを私たちは、この本の全編をとおして聖書からごいっしょに学んでみたいと思います。

あるとき、イエス様を信じているひとびとが集まってお祈りをする「祈り会」で、八十歳をこしている男のかたがとつぜん立ちあがって、話しはじめました。

「みなさん、私が最近体験したすばらしい喜びを聞いてください。いまから六十五年まえのことですが、クリスチャンだった私の母は、臨終の床で私に言いました。『おまえは家族のなかでたったひとり、イエス様を信じています。おまえには弟や妹たちが救われることについて、大きな責任があるのですよ。弟や妹たちがひとりのこらずイエス様を知り、そして信じるようになるまで、絶えず祈りつづけなさい』。そして母は亡くなりました。それからというもの、私はこの母の言葉に従って祈りつづけました。その結果、私の弟や妹がつぎつぎに信仰に導かれていきました。そしてけさ、私は弟のひとりから手紙をもらいました。その手紙には、かれもまたイエス様を信じる者とされたと書いてあったのです!」

このかたは、なんと六十五年もの長いあいだ、弟や妹たち全員が救われることを根気よく祈りつづけたのです。私たちの周囲にも、まだイエス様のことを知らない家族や親戚、友人のかたがたがおおぜいおられるはずです。しかし、私たちはほんとうにそういうかたがたのことを、真剣に考えているのでしょうか。そのかたがたのために、真剣に「祈りつづけ」ているのでしょうか。これらのかたがたのことをほんとうに愛しているなら、私たちはこのかたがたが救われないでいることに無関心ではいられないはずです。私たちはとうぜんのことながら、これらのかたがたがみんなイエス様を知り、信じる者になるまで根気よく祈りつづけなければなりません。

いまのときこそ、イエス様のすばらしさ、その救いのみわざ、福音が宣べ伝えられなければならないときです。というのは、主がすべてのかたがたが救われて真理を知ることになることを望んでおられるからです。そしてそのために、主は私たちひとりひとりを役立て、もちいたいと願っておられます。あなたをとおしてひとりでも多くのかたがイエス様を知り、救われなければならぬのです。

では、私たちはどうすればいいのでしょうか。どのように祈ればいいのでしょうか。その答えは旧約聖書のゼカリヤ書に見いだすことができます。

「権力によらず、能力によらず、わたし（主）の霊によって。」（ゼカリヤ 4・6）

この聖句は私たちに、たいせつなただひとつのことを示しています。つまり、第一に祈り、第二にも祈り、第三にも祈り、ただひたすら「祈る」ということの重要性です。つぎに、これらの

祈りの重要性についてもっとくわしく、ごいっしょに考えてみましょう。もっともたいせつなこととは、つぎの三項目です。

主は祈るひとを必要としておられます。

主はお約束をお与えになつておられます。

主は私たちに願つておられます。

1 主は祈るひとを必要としておられます

それではまず、「主は祈るひとを必要としておられる」ということについて、ごいっしょに聖書から見えていきましょう。

私たちは聖書によつて、全世界のどこにでも存在しておられる全知全能の神Ⅱ主について、たくさんを知ることができます。私たちは、主なる神がなにもかもすべてをござんじであることを確信しています。主なる神は、私たちの心の奥底も、私たちの隠された思いも、私たちの行動の動機も、すべてをよくござんじであり、主なる神のまえではなにひとつ隠しおおせるものはありません。主は、どこにでも臨在しておられ、きょう、この瞬間にも私たちのそば近くにおられ、私たちに直接語りかけたいと願つておられるのです。私たちの主は全能のおかたであり、なんでもできるおかたです。主のご命令によつて、いままですら存在しなかったものが存在するようになることなど、いともたやすいことなのです。主なる神は無限の力を自由にふるうことがおできになるかたです。

私たちはまた、聖書のなかで、この主が「驚かれるかた」であることも知ることができます。
主は人のいないのを見、とりなす者のいないのに驚かれた。
(イザヤ 59・16)

主なる神は、とりなす者のいないのに「驚かれた」……。私たちは、イザヤの時代にはたしかにそのとおりであったことを知っています。というのは、イザヤの時代はまだイエス様がこの地上に來られるまえであり、聖霊がそがれるまえの時代だったからです。聖霊こそが私たちに祈ることを教えてくださるのであり、私たちの弱さを助けることがおできになり、私たちのためにとりなしをしてくださるのです。しかしイザヤ書が書かれたそのころは、イエス様がくださった、祈りについてのすばらしいお約束が私たちに与えられるまえの時代だったのです。

私たちはここで真剣に、ひとつの質問を自分自身につきつけてみる必要があります。

「イエス様がきょう、私たちをご覧になるとき、『驚かれる』のではないだろうか? イザヤの時代、まだイエス様がこの地上に來られるまえの、つまり聖霊がそがれ、すばらしい祈りのお約束が与えられるいぜんの時代とおなじように、イエス様は私たちの不信仰な状態に『驚かれる』のではないだろうか? 私たちはほんとうの『祈りの生活』を、はたして知り、おкупっているのだろうか?」
という質問です。

ここで問題になっている「祈りの生活」とは、私たちが「ときどき祈るかどうか」などということではありません。「ほんとうに祈りの生活をおくっているかどうか」がたいせつなのです。

「朝晩かるく祈る」というようなことではないのです。「私たちの全生涯が祈りによって動かされているかどうか」が重要なのです。自分の生活のなかで「祈り」がいちばんたいせつなことからなっていない信者は、主にもちいられません。

もちろんあらゆるキリスト者は、主なる神を信じ、自分の罪が赦されており、主イエス様によって永遠のいのちをいただいているということを知っています。またあらゆるキリスト者は「祈りの必要性」をも知っています。しかし残念なことには、あらゆるキリスト者がつねに「祈りの力」を信じているというわけではありません。

ここで私は、ただひとつの事実だけを強調したいと思います。それは、「すべてのことがただ祈りにかかっている」という事実です。

現在、なぜ、非常に多くのキリスト者たちが打ちのめされているのでしょうか？

なぜなら、そのひとびとはほとんど「祈らない」か、ほんのわずかし「祈らない」からです。なぜ、多くのキリスト者たちががい敗北を経験するのでしょうか？

なぜなら、そのひとびとは、ほとんど「祈らない」か、祈ったとしてもほんのわずかし「祈らない」からです。

なぜ、多くの努力にもかかわらず、私たちをとおしてほんのわずかなひとびとしか、暗闇から主イエスにある光のなかに導かれないのでしょうか？

なぜなら、私たちはほとんど「祈らない」か、あるいは祈ったとしてもその「祈りがすくなくさる」からです。

イエス様は、むかしもいまも、変わることなく全能のおかたです。そしてそのむかし、聖書が書かれた時代とおなじように、またそれ以上に、いまも「苦しんでいる、弱っている、あえいでいる多くのひとびとをひとりのこらず救いたい」と願っておられるのです。しかしまた、聖書はつぎのようにも述べています。

見よ。主の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。

(イザヤ 59・1、2)

主のみ手がみじかすぎて私たちを救えないではありません。主が期待されるように私たちが「祈らない」ので、主はお働きになることができないのです。つまり、すべての失敗の原因は、「私たちの不十分な祈りの生活」にあるのです。

イザヤの時代に、主はほんとうに祈るひとがひとりもいなかったので「驚かれ」ました。

主イエス様がこの地上におられた時代には、主イエス様は大きな奇蹟を行なうことをさまたげた、ひとびとの不信仰に「驚かれ」ました。

それで、そこでは何一つ力あるわざを行なうことができず、少数の病人に手を置いていやされただけであった。イエスは彼らの不信仰に驚かれた。

(マルコ 6・5、6)

主イエス様が、きょう、私たちの状態、私たちの心の状態をご覧になるとき、やはりおなじよ

うにその不信仰に「驚かれ」、深く悲しまれるのではないでしょうか。

しかし、あなたの御名を呼ぶ者もなく、奮い立って、あなたにすがる者もいません。

(イザヤ 64・7)

キリスト者がぜんぜん祈らなかったり、わずかしかならないことほど、主を「驚かせる」ことはありません。私たちはほんとうに祈りの力を信じているでしょうか。愛するみなさん、私たちはいま、終末の時代に生きているのです。イエス様はまもなくおいでになります。のんびりした生活をおくっているときではありません。いまなにより必要なのは、「祈りのひと」なのです。祈りは、この地上でもっとも大きな力です。祈りは、宇宙さえも動かされる主のみ手を動かすのです。正しく祈らない者は、正しく生活することができず、正しく主に仕えることができません。イエス様は私たちにはつきりとしたお約束を与えてくださっています。

イエスは答えて言われた。「まことに、あなたがたに告げます。もし、あなたがたが、信仰を持ち、疑うことがなければ、いちじくの木になされたようなことができるだけでなく、たとい、この山に向かって、『動いて、海にはいれ。』と言っても、そのとおりになります。あなたがたが信じて祈り求めるものなら、何でも与えられます。」

(マタイ 21・21、22)

このお約束によると、主の奇蹟を体験する前提は、「信仰と祈り」です。私たちが「信じて祈

り求める」なら、なんでも与えられるのです。またヨハネの手紙第一にはこう書いてあります。

愛する者たち。もし自分の心に責められなければ、大胆に神の御前に出ることができ、また求めるものは何でも神からいただくことができます。
(Ⅰヨハネ 3・21、22)

ここに書かれていることにくらべて、私たちはなんとわずかしか、主のお約束を信じていず、お約束を自分のものとしていないことでしょうか。私たちはなんとわずかしか、ほんとうに信じることをしていないことでしょうか。だからこそ主は、きょうも私たちの不信仰に「驚かれる」のです。なんの奇蹟も起こらないのは私たち自身の責任です。私たちは、いまののんびりした状態から、いつときもはやく目を覚まそうではありませんか。

いっぽう、悪魔は私たちをめぐらしようとしています。悪魔はなによりも「祈り」を憎みます。悪魔は私たちが主のために働きたいと思うことはさまたげようとしませんが、「祈りの生活」だけは、必死になってさまたげようとしているのです。悪魔は私たちが聖書を読んだり学んだりすることについてはじゃまをしようとしませんが、「ほんとうの祈り」だけは、なんとしてもじゃまをしようと一生懸命になるのです。悪魔は私たちの努力を笑い、私たちの知恵をあざけります。が、私たちの「まことの祈り」のまえには、なすすべを失って恐れおののくのです。

私たちは、主のため、またひとのために、私たちにできるもつとも大きなことは「祈り」であることを、ぜったいに忘れてはなりません。「祈り」によって、主のためのいわゆるご奉仕によるよりも、はるかに大きなことがなされるのです。「祈り」によって、私たちは神の全能なる力

を目のあたりに体験することができなのです。それは私たちが祈るとき、全能のかたである主が奇蹟を行なってくださるからです。あとに残る実、成果は、いつも真剣な祈りの結果です。

2 主はお約束をお与えになっておられます

さてつぎに、「主はお約束をお与えになっておられる」ということについて、聖書から学んでみましょう。

やがて主のみもとで大きな栄光に包まれるようになったとき、私たちは自分自身がこの地上でいかに祈りのとぼしい者であったかにわれながら驚くことでしょう。ほんとうのとりなしをするために、ほんのわずかの時間しか使わなかった自分自身のことを、信じられない思いでふりかえることでしょう。そのとき、主ではなく私たち自身が自分の不信仰に驚くことになるのです。

私たちのイエス様は、十字架につけられるまえに、すばらしく大きなお約束をしてくださいました。このお約束の内容は、疑問のよちなく明快です。このイエス様が死の直前に与えてくださったお約束について、ヨハネの福音書から順をおって見ていきましょう。

「またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましょう。父が子によって栄光をお受けになるためです。あなたがたが、わたしの名によって何かをわたしに求めるなら、わたしはそれをしましょう。」
(ヨハネ 14・13、14)

主イエス様は、ここです、**「あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それを**

しましょう」。そしてもう一回、「あなたがたが、わたしの名によって何かをわたしに求めるなら、わたしはそれをしましょう」と、二度、くりかえしておっしゃっておられます。これはじつにすばらしいお約束です。このお約束よりも大きな約束がありうるでしょうか。そしてまた、いままでにいったいだが、このような約束をなしたでしょうか。

イエス様がこのお約束をなさったとき、弟子たちはだれひとりとしてその意味が理解できず、ひとつのなごのまに立たされたのでした。そのときにはまだ、かれらは自分たちに与えられたお約束がどのようなものであるかを理解することができませんでした。そしてあとになってはじめて、かれらはイエス様がご自身の約束を守られたことをつぶさに体験したのです。「わたしの名によって何かをわたしに求めるなら、わたしはそれをしましょう」。このすばらしいお約束は、当時の弟子たちばかりでなく、もちろん私たちにも与えられているのです。

イエス様は、このときいちだけではなく、このすぐあとにもなんどもくりかえして約束をお与えになっています。

「あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことがあなたがたにとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます。あなたがたが多くの実を結び、わたしの弟子となることによって、わたしの父は栄光をお受けになるのです。」

(ヨハネ 15・7、8)

イエス様はいつも弟子たちに、くりかえしくりかえし「願い求めなさい」という命令をお与え

になりました。またイエス様は、イエス様と私たちが友としてつながっていることのしるしは、私たちがイエス様の命令、つまりみ心に従い、イエス様が望んでおられるとおりに行動することであるとされました。ヨハネの福音書にはこうあります。

「わたしがあなたがたに命じることがあなたが行なうなら、あなたがたはわたしの友です。」
(ヨハネ 15・14)

つづいてイエス様は、ご自分が求めておられることについてつぎのように言われました。

「あなたがたがわたしを選んだではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えになるためです。」
(ヨハネ 15・16)

イエス様は「私たちに祈ることを望んでいる」ことを、このみことばによってはっきりと示されたのです。「わたしはあなたがたの祈りを必要としている。あなたがたが祈らないならば、なにも得られない」と、イエス様ご自身が言われたのです。そしてさらにもういちど、イエス様はほとんどおなじことをつぎのように言っておられます。

「その日には、あなたがたはもはや、わたしに何も尋ねません。まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが父に求めることは何でも、父は、わたしの名によって

それをあなたがたにお与えになります。あなたがたは今まで、何もわたしの名によって求めたことはありません。求めなさい。そうすれば受けるのです。それはあなたがたの喜びが満ち満ちたものとなるためです。」

(ヨハネ 16・23、24)

このときほど、イエス様がお約束、つまり祈りの必要性を強調なさったことはありませんでした。六回も、イエス様は「何でもあなたがたのほしいものを求めなさい」と言われました。これこそ、人間に与えられた祈りのお約束のうち、もっとも大きなお約束です。

エペソ人への手紙三章にはこう書いてあります。

どうか、私たちのうちに働く力によって、私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて豊かに施すことのできる方に……栄光がありますように。(エペソ 3・20、21)

しかし、たいいていのキリスト者が、このイエス様のお約束にとくに注意をはらうこともなく、とおりすぎてしまうのはどうしたことでしょうか。イエス様は、十字架に釘づけられるまえに、さらにもういちどおっしゃいました。

「その日には、あなたがたはわたしの名によって求めるのです。わたしはあなたがたに代わって父に願ってあげようとは言いません。……父ご自身があなたがたを愛しておられるからです。」

(ヨハネ 16・26、27)

みなさんもごぞんじのように、イエス様は十字架のうえで七つのことばを叫びました。この七つのことばについては、多くのひとびとが考え、本を書き、説教し、また作曲してきました。しかし、いままでごいっしょに見てきた、ヨハネによる福音書十四章から十六章にしろされている七つの祈りへのまねきのみことばについてはどうでしょうか。私たちはそれらのだいいじなまねきのみことばについて、ほんのわずかな時間でも考えてみたことがあるでしょうか。

イエス様は、きょうもすべてのうえに君臨しておられます。イエス様はすべての力を持っておられます。そしてイエス様は、私たちがいただいているいろいろな願いごとをイエス様にすべて申しあげることを望んでおられ、豊かな栄光のうちに私たちに答えたいと思っておられるのです。イエス様は、「私たちの強さと喜びは、私たちの祈りの生活にかかっている」と、はっきり言われました。もういちど、ヨハネによる福音書の十六章を思いだしてみてください。そこにはこう書かれています。

「あなたがたは今まで、何もわたしの名によって求めたことはありません。求めなさい。そうすれば受けるのです。それはあなたがたの喜びが満ち満ちたものとなるためです。」

(ヨハネ 16・24)

しかし、実際にはどうでしょうか。悪魔は私たちをほとんどまいにち、誘惑してきます。私たちは日常生活において、しばしばつぎのように考えたり行動したりしているのではないのでしょうか。「イエス様に祈るよりも、人間の力や努力に頼るほうが大きなことができる」、または「イエ

ス様に祈り、語りあうよりも、人間どうしがつきあい、語りあうほうがもっと大きな成果が得られる」と。もちろんこのようなことを口にだして言うクリスチャンはいません。しかししたいいのクリスチャンの日常生活を見ると、言わず語らずのうちにこのことがたいどにあらわれているのではないでしようか。

真剣に祈ることなくして、主に仕えることは不可能です。あるかたは「私はまだいちども祈りがきかれたためしがありません」と告白しました。実際、私は多くのばあいがそうなのではないかと心配しています。いったい、どうしてでしようか。いったい、どこに責任があるのでしょうか。主なる神はうそつきなののでしょうか。イエス様は信頼できないかたなののでしょうか。イエス様のお約束はあてにできないのでしょうか。イエス様はご自分が約束なさったことを、ほんとうはしようと考えておられないのでしょうか。

主のためになにかをしたいと思うなら、私たちはまず祈らなければなりません。そして私たち^が祈っても聞きとどけられないとき、その責任は決して決して主にあるのではなく、私たち自身にあるのです。主は私たちの祈りに答えるお気持ちがないどころか、主にとって祈りに答えることは最大の喜びなのです。主は私たちが主に祈り求めることを、それもたくさん^のことを祈り求めることを望んでおられます。なぜならば、そのことによって主は誉れと栄光をお受けになるからです。

もちろん私たちのうちのだれひとりとして「イエス様のお約束がうそである」などと言うひとはいません。しかしそれならどうして、私たちはもっとと祈ろうとしないのでしょうか。

私たちはたとえすこしでも、イエス様の愛を疑うことができるでしょうか。できるはずがありません。私たちにはとてもそんなことはできません。というのは、イエス様は私たちのためにご自身のいのちをささげてくださったことによって、イエス様ご自身が私たちを深く愛しておられることをあきらかにしてくださったからです。

私たちはたとえすこしでも、父なる神の愛を疑うことができるでしょうか。そんなことはできません。というのは、主イエス様ご自身がこう言われているからです。「父なる神があなたがたを愛しておられる」。イエス様が、はっきりとそう言っておられるのです。

それでは私たちはたとえすこしでも、主の力を疑うことができるでしょうか。いいえ、決してそんなことはできません。というのは、私たちはすべての力が、天上においても地上においても、イエス様に与えられていることをよく知っているからです。

それでは私たちはすこしでも主の知恵と導きを疑うことができるでしょうか。いいえ、決してそんなことはできません。たしかに私たちには理解できない多くのことがあります。しかし私たちは主の導きが完全であり、主の知恵は測り知れないことをよく知っているからです。

クリスチャンなら、だれひとり、つぎのように言うひとはいいないでしょう。「祈ることなど、たいしたことではない。祈ることよりもたいせつなことがある」。しかし、たとえ口にだして言わなくても、たいいていのクリスチャンの実際の生活は、このことをもの語っているのです。

主はまた、ご自身がお約束を守られるかどうか、言われたとおりのことをほんとうにしようと考えておられるかどうか、私たちに「ためしみるがよい」と力強く語りかけておられます。

「十分の一をことごとく、宝物倉に携えて来て、わたしの家の食物とせよ。こうしてわたしをためしてみよ。——万軍の主は仰せられる。——わたしがあなたがたのために、天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうかをためしてみよ。」

(マラキ 3・10)

このような大きな確信をいただいた以上、私たちは、主なる神がお約束をお与えになるとき、パウロのように大胆に言おうではありませんか。

ですから、皆さん。元氣を出しなさい。すべて私に告げられたとおりにすると、私は神によって信じています。

(使徒 27・25)

愛するみなさん、このように見てきたからには、私たちはいますぐにでも祈りの生活をはじめたいと思わないでしょうか。いまほど恵まれた時代はありません。いま、すぐにはじめてください。主は私たちが祈ることを望んでおられます。すべてのことは、私たちの祈りにかかっているのです。あふれるばかりの主の祝福が、約束されています。ただ祈ることをしないために、私たちはこの祝福を受けることができないでいるのです。

「あなたは一日のうちどれくらい祈りますか」とたずねられたあるご婦人は、すぐにこう答えました。「三回祈ります。朝、昼、晩の三回祈りますが、でもそのあいだにも祈りつづけます」。このご婦人は絶えず祈らざるをえなかったのです。私たちにとって祈りとはなんでしょうか。義務

でしょうか、必要でしょうか、特権でしょうか、楽しみでしょうか、喜びでしょうか。

主の心にかなう祈りをするためには、私たちは開かれた心の目を持つことが必要です。では「開かれた心の目を持つ」とはどういうことでしょうか。それはつまり、私たちのすばらしい主にたいして、また主が私たちに与えたいと思っておられる測り知れない豊かさにたいして、開かれた目を持つ、ということですから。そしてまた、主はこの世の悩みにたいしても私たちの心の目を開いてくださいます。その結果はどうなるでしょうか。主イエス様と主の豊かさをを見ると、私たちは自然に主を礼拝せざるをえなくなります。またこの世の悩みを見ると、私たちは心からとりなしの祈りをせざるをえなくなります。

私たちの周囲にはいたるところに悩みがあります。家族や親戚、友人のなかにも、また未信者ばかりでなくクリスチャンのあいだにさえ多くの悩みがあります。また世界中には、まだイエス様の福音を聞いたことがないひとびとが何億人もいるのです。これらの悩みは私たちをかりたてて祈りへと導くはずで、主は真剣な祈りにはかならずお答えをくださいます。主は祈りにたいする答えとして奇蹟を行なってください。祈らない者は、もはやどのようないのがれをすることもゆるされません。なぜなら祈りの助け手として聖霊が私たちに与えられているからです。

御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈つたらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてください。人間の心を探り窮める方は、御霊の思いが何かをよく知っておられます。なぜなら、御霊は、神のみこころに従って、聖徒のためにとりな

しをしてくださるからです。

(ローマ 8・26、27)

そして聖霊の導きのもとに、初代教会の主イエス様の弟子たちはつぎのような決心をしました。
私たちは、もっぱら祈りとみことばの奉仕に励むことにします。
(使徒 6・4)

この聖句のなかの「祈り」と「みことばの奉仕」の順番に注目してみてください。「私たちは、もっぱら祈りとみことばの奉仕に励むことにする」。まず「祈り」、それから「みことばの奉仕」の順番です。第一にたいせつなことは「祈り」です。そしてこの「祈り」は、だれにも見えず、だれにも気づかれません。「みことばの奉仕」つまり世のなかに福音を告げ知らせることは、そのあとなのです。

主のために、朝から晩まで働くかたがたがいます。かれらは聖書を研究するためにたくさん時間を使い、すばらしい説教をします。もちろんこのようなことは正しくつばなことです。けれどもそのかたがたが祈りを忘れ、かれらの生活のなかで祈りが第一のものになっていないならば、まことにわざわいです。すこししか祈らないということはすこししか実を結ばないということとを意味しています。いっぽう、たくさん祈るということは、大きな影響力を持つことを意味し、そのことによって多くのかたがたが主のもとに引き寄せられるのです。イエス様のすばらしさを目を見ひらくという霊的な目覚めは、多くの祈りの結果なのです。またあらゆる回心もおなじように真剣な祈りの結果です。祈らないことは罪です。この罪が告白されないと主との交わりが不

可能となり、主との交わりがなければとうぜんながら実を結ぶことはありません。

愛するみなさん、私たちはいますぐ、祈りの生活をはじめようではありませんか。クリスチャンのなかには、朝、学校や仕事に行くまえに聖書を読んで主が語られるお声に耳をすますることがなく、祈りによって主のまえにまごころをそそぎだすことをしないかたが多いのです。それらのかたがたにはなんの成長も祝福も見られず、また実を結ぶことも見られないのはとうぜんで、なんら驚くにあたりません。私たちの主イエス様は、一晩中祈られたことがありました。イエス様は完全なかたであつたにもかかわらず、イエス様にとって祈りはどうしても必要なことだったので。ましてや私たちは、意識して主により頼み、主との交わりをたもつべきではありませんか。イエス様は父なる神のみ心を行ないたいという心からの願いをいつも持っておられました。だからこそ、主に祈られたのです。私たち自身はどうでしょうか。私たちにとつても、主のみ心を行なうことはなによりもたいせつなことであるはずで。私たちはほんとうに自分自身を百パーセント主にあげわたしたのでしょうか。自分自身を百パーセント主にあげわたすことこそが、聖霊が私たちのなかで祈られることができる前提なのです。私たちには、はたしてその用意ができているのでしょうか。

3 主は私たちに願っておられます

最後に、「主は私たちに願い求めておられる」ということについて、ごいっしょに聖書から見てみることにしましょう。

「わたしに求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与え、地をその果て果てまで、あなたの所有として与える。」

(詩篇 2・8)

主なる神は、私たちが主に「求める」ことを願っておられます。というのは、主は「与えたい、おくりものをしたい、幸せにしたい、ご自身を現わしたい」と願っておられるからです。主なる神は私たちが主に祈り、願い求めることを、それもたくさん祈り、たくさん願い求めることを望んでおられます。わずかな実しか結ばない者はわずかしき祈りません。わずかしき祈らないにもかかわらず多くの実を結ぶことがあるなら、それは隠れたところで多くのひとびとが祈りつづけていてくれるからなのです。天国では、この地上でいちばんよく説教をしたひとではなく、いちばんよく祈ったひとこそがいちばん報われるのです。あらゆる回心はキリスト者の祈りに答えてくださる聖霊のすばらしいみわざです。

さきほどの聖句のなかで、主は「わたしに求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与え、地をその果て果てまで、あなたの所有として与える」と、約束しておられます。これは主の願いであると同時に、主の啓示です。私たちははたしてこの主の願いどおりに祈り、求めているのでしょうか。私たちははたしてこの主の啓示によく従っているのでしょうか。パウロは、「私はこの天からの啓示にそむかなかった」と言うことができました。くりかえして言いますが、私たちが天国に行ったとき、なにか後悔することがあるとするなら、それはきつと、自分がこの地上で祈りをおろそかにしたことでしょう。主は「わたしに求めよ。わたしは与える」と言ってお

られます。しかししたいのキリスト者は、自分自身の日常生活のなかで、悩みや問題を主にうちあけようとしません。そしてキリスト者の十人のうち九人までは、まだ福音を聞いたことがないほかの国々の何億というひとびとのためにぜんぜん祈らないのです。主にとっては「地の果て果て」までが重要なのです。私たちの祈りによって、「地の果て果て」にまで大きなことが起こらなければなりません。私たちは主のこの「祈り」へのまねきに喜んで応じる用意があるのでしようか。イエス様は、ご自身がこの地上におられるあいだになさったことよりもっと大きなみわざを、私たちキリスト者にしてください、と約束してくださいました。そしてこの大きなみわざこそが、まことの祈りにたいする答えです。

私たちの人生の目標はなんでしょうか。それは権力でも名誉でも地位でもなく、「いつまでも残る実を結ぶこと」にあります。そして、ぶどうの木であるイエス様に結びついているときにのみ、この実を結ぶことができるのです。イエス様と結びついていなければ、そして祈りの生活がなければ、決していつまでも残る実を結ぶことはできないのです。あなたが祈ったならば、いつまでも残る実が与えられ、祈らなかつたならば、すべての行為も努力も、けっきょくはむなしなものになってしまうのです。

あるとき聖霊は、ある女性のクリスチャンに、もっと祈りなさいという主の願いをあきらかにされました。長いあいだためらったあと、彼女はこの主の願いに従ったのです。するとどうでしょう、数週間のうちに多くのかたがたが信仰に導かれ、またそれだけではなく、この地方のひとびとのすべてがイエス様のみことばにたいして耳と目をひらき、真剣に福音を求める気持ちを持

つようになつたのです。

なぜ、私たちのまだ救われていない家族の多くは、イエス様のみことばをもっと聞きたいという求める気持ちを持たないのでしょうか。なぜなら、私たちが祈ろうとしないからです。

インドで、千数百人の児童がいる学校がありました。この子どもたちのなかに、イエス様を信じていて祈りが大きな力を持っていることをよく知っている数人の子どもたちがいました。ある日この子どもたちは宣教師のところにやってきて、宣教師の仕事のために祈ってよいかどうかたずねました。しかし宣教師は、そのことをあまり喜びませんでした。宣教師は、子どもたちにとっては祈ることよりも勉強することのほうがだいじだと考えたのでした。けれども最後にはしかたなく祈ることをゆるしました。子どもたちは祈りはじめました。するとその日のうちに、ひとりのクリスチャンが自分の罪を告白するためにその宣教師のところにやってきました。またそのすぐあとで、こんどは教会の長老が罪を告白するためにやってきました。そしてこのようにことがつぎつぎに起こって、すべてのひとびとが自分の罪を認めるようになったのです。このようにして主からはなれていたひとたちが回復され、信者たちも靈的に成長し、多くのひとびとが生き生きしたまことの信仰に導かれたのです。これはただ二、三人の子どもたちが心から祈ったことによつて起こつたのです。子どもたちのうちのひとり、五百人もの名まえがしるされている祈りの名簿を持って、夜、ローソクの光のなかで何時間も祈りつづけたのです。これらの子どもたちが祈り求めたときには、いつでもどこでも奇蹟が起こつたのです。

神のまえでは、人間の外見などたいせつではありません。子どもであろうがおとなであろうが、

男だろうが女だろうが、金持ちだろうが貧乏人だろうが、教養があろうがなかろうが、そういったことはまったくたいせつではありません。ただ主なる神が示される条件が満たされるとき、神は答えてくださるのです。

イギリスのウェールズという地方で、あるとき霊的な覚醒が起こり、何千人ものひとびとが救われたとき、そのことを聞いたインドで働いている宣教師たちは、インドでもおおぜいのひとびとが救われるように自分たちのためにも祈ってほしいという手紙をウェールズのひとびとに出しました。それからというもの、ウェールズに住んでいる鉱山労働者たちは、毎朝仕事をはじめまに三十分間、インドのひとびとのために祈りました。するとまもなくインドから、主の祝福がインドにも起こったという知らせがウェールズにとどいたのです。

私たちの祈りによってほかの国々にいるクリスチャンたちが祝福され、また多くの未信者たちが救われるのです。私たちは、インドやアフリカや中国にいる何億人もの、まだ福音を聞いたことがないひとたちのことを考える必要があります。この何億人ものひとびとを見て、主はつぎのように言っておられるのです。「わたしに求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与え、地をその果て果てまで、あなたの所有として与える」。

主なる神は私たちが祈ることを望んでおられます。なぜなら主なる神はあふれるばかりの祝福を、私たちにそそぐとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえにそそがれるとびらをあけるのです。

愛するみなさん、私たちはいま、ひとつのわかれ道のまえに立っています。すべての失敗、す

べての敗北、すべての実りのなさは、祈らないことにその原因があるのです。それらの問題は、私たちの生活のなかで祈りが最優先となるとき、いますぐにでも解決するのです。純粹に、心から信じつつ祈ることは奇蹟をもたらします。

マタイの福音書には、つぎのように書かれています。

イエスがカペナウムにはいられると、ひとりの百人隊長がみもとに来て、懇願して、言つた。「主よ。私のしもべが中風やみで、家に寝ていて、ひどく苦しんでおります。」イエスは彼に言われた。「行つて、直してあげよう。」しかし、百人隊長は答えて言つた。「主よ。あなたを私の屋根の下にお入れする資格は、私にはありません。ただ、おことばをいただかせてください。そうすれば、私のしもべは直りますから。と申しますのは、私も權威の下にある者ですが、私自身の下にも兵士たちがいまして、そのひとりに『行け。』と言えば行きますし、別の者に『来い。』と言えば来ます。また、しもべに『これをせよ。』と言え、そのとおりにいたします。」イエスは、これを聞いて驚かれ、ついて来た人たちにこう言われた。「まことに、あなたがたに告げます。わたしはイスラエルのうちのだれにも、このような信仰を見たことはありません。あなたがたに言いますが、たくさんの人が東からも西からも来て、天の御国で、アブラハム、イサク、ヤコブといっしょに食卓に着きます。しかし、御国の子らは外の暗やみに放り出され、そこで泣いて歯ざしりするのです。」それから、イエスは百人隊長に言われた。「さあ行きなさい。あなたの信じたとおりになるように。」すると、ちょうどその時、そのしもべはいやされた。

このローマの百人隊長はみ心になう純粋な心を持っていました。だからイエス様はかれが話したことを聞いて「驚かれた」のです。イエス様はおっしゃいました。「まことに、あなたがたに告げます。わたしはイスラエルのうちのだれにも、このような信仰を見たことがありません」。そしてそのあとで、イエス様は言っておられます。「たくさんの人が東からも西からも来て、天の御国で、アブラハム、イサク、ヤコブといっしょに食卓に着きます」。東からも西からも来て……とイエス様は言われましたが、この「東」のなかには、とうぜん日本も含まれているのです。イエス様はこの百人隊長の信仰の告白を聞いたとき驚かれ、そしてたいへん喜ばれて、「あなたの信じたとおりになる」と言われました。私たちもこの百人隊長とおなじように、信仰告白ができればほんとうに幸せだと思います。

最後にもういちど、たいせつな聖書のなかのイエス様のお約束をまとめてしるしておきます。

「わたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましう。」

(ヨハネ 14・13)

「あなたがたが、わたしの名によって何かをわたしに求めるなら、わたしはそれをしましう。」

(ヨハネ 14・14)

「何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれが
かなえられます。」
(ヨハネ 15・7)

「あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えに
なるためです。」
(ヨハネ 15・16)

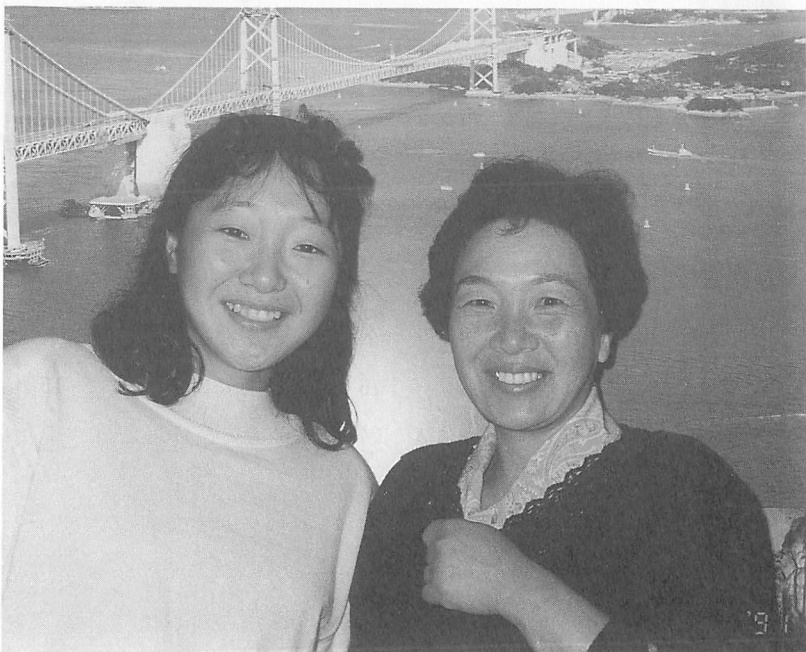
「あなたがたが父に求めることは何でも、父は、わたしの名によってそれをあなたがたに
お与えになります。」
(ヨハネ 16・23)

「求めなさい。そうすれば受けるのです。」
(ヨハネ 16・24)



▲祈り求めて主に祝福され、喜びの武蔵野日赤の小児科医辻洋一郎さんと純さん。

▼貴美さんの祈りによって母親の水恵さんも救われ、喜ぶ久保田さん親娘。



まことの祈り

「祈り」は、私たちが主のため、またひとびとのためにすることができるとも大きなことです。祈りをおして、主のためにご奉仕をするよりもはるかに大きなことがなされます。私たちが祈るとき、全能なる主は奇蹟を行なうことがおできになり、永遠に残る実を結ぶことがおできになるのです。

私たちは、ただ救われるためだけに救われたものではありません。私たちをおして、ほかのひとびともまたイエス様のもとに導かれなければなりません。あなた自身をおして、さらに福音が宣べ伝えられなければなりません。福音が宣べ伝えられることは、主の大きな目的なのです。では、福音が宣べ伝えられ、多くのひとびとが主のもとに導かれ、まことの実を結ぶためには、私たちはどうしたらいいのでしょうか。その答えは、一にも二にも祈ることであり、まことの祈りの生活をおくることです。この章では、「絶えず祈れ」というテーマをさらに一歩すすめて、より深く、つぎのふたつのことについて考えてみましょう。

「しるし」を求めて祈ることはゆるされているか。

「まことの祈り」とはなにか。

多くのひとびとは、「祈りははたして聞かれるのでしょうか」とたずねます。また口にこそださないけれど、「祈りには意味があるのだろうか」とひそかに考えているひとびともいます。しかし、このように祈りたいとして懷疑的な考えを持っているかたがたでも、ひとたびほんとうの苦しみや危機に直面したときには、ためらうことなく神に助けを呼び求めます。このようなひとびとも、心の底では神が存在していることを知っており、神が私たちを助けてくださるかたであ

り、神には奇蹟を行なう力があることをよく知っているのです。

「しるし」を求めて祈ることはゆるされているか

1 私たちは祈りによってためされる

あるキリスト者は、「私たちはしるしを求めて祈ったり、神様をためしてみることがゆるされているのか」とたずねます。そこでまず「神様をためしてみることがゆるされているか」という問いについて考えてみましょう。聖書はこの問いに肯定の返事を与えています。しかし実際には「私たちが神をためす」のではなく、「私たちが神にためされる」というほうが正しいのです。それはどういう意味かというと、私たちが祈っても主が答えてくださらないとき、それは主の責任ではなく、私たちの責任だということです。私たちが祈り求める動機が不純だから、または私たちが光のうちを歩んでいないから、主は答えてくださらないのです。ここでよく注意しなければならぬのは、私たちの生活のなかに罪や不信や不従順があるばあい、すべての祈りがなんの価値も持たず、どんなに祈ってもむなしい結果に終わってしまうということです。ですから、私たちは祈りによって、神をためすというより自分自身がためされるのです。私たちの祈りをおして、あとに残る実がなにひとつもたらされないときは、神にたいする私たちの関係が正しい状態ではないのです。

私たちは、祈りをおして主と私たちとの関係が正しい状態かどうかを知ることができます。私たちが主に願っているものを主が与えてくださるときは、私たちがただ主のご栄光のみが

現わされるようにと願い、自分自身のことをなにひとつ求めていないときです。そして私たちが祈ってもかなえられないとき、私たちはダビデのように、主につきぎのように願い求めるべきではないでしょうか。

神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。

(詩篇 139・23、24)

主よ。私を調べ、私を試みてください。私の思いと私の心をためしてください。

(詩篇 26・2)

それではつぎに、「しるしのために祈ること」はゆるされるのでしょうか。聖書によると、これもまたゆるされています。私たちは聖書のなかにいくつかの実例を見ることができます。たとえばギデオンのばあいも、そのよい例です。

ギデオンは神に申し上げた。「もしあなたが仰せられたように、私の手でイスラエルを救おうとされるなら、今、私は打ち場に刈り取った一頭分の羊の毛を置きます。もしその羊の毛の上だけに露が降りていて、土全体がかわいていたら、あなたがおことばのとおり私の手でイスラエルを救われることが、私にわかります。」すると、そのようになった。ギデオンが翌日、朝早く、その羊の毛を押しつけて、その羊の毛から露を絞ると、鉢いっ

ばいになるほど水が出た。ギデオンは神に言った。「私に向かって御怒りを燃やさないでください。私にもう一言言わせてください。どうぞ、この羊の毛でもう一回だけ試みさせてください。今度はこの羊の毛だけがかわいていて、土全体には露が降りるようにしてください。」それで、神はその夜、そのようにされた。すなわち、その羊の毛の上だけがかわいていて、土全体には露が降りていた。

(士師 6・36-40)

ギデオンははっきりとした約束を与えられていました。それは「主はかならず助けてくださる」という約束であり、また「主はつねにギデオンとともにいてくださり、ギデオンをとおしてイスラエルを救われる」という約束でした。しかしギデオンにとってはこの約束だけでは十分ではなく、かれはさらにこのことについての証明、すなわち「しるし」がほしいと思いました。そして主は二回もギデオンのこの願いをかなえてくださったのです。

このように、ためらっているひとが全能なる神に願い求めたとき、全能なる神はギデオンの願ったとおりのことをしてくださいました。このときギデオンはきつと、「自分もこの羊の毛とおなじような者だ」と考えたことでしょう。なぜなら、このみことばのなかにでてくる「水でいっぱいになった羊の毛」は、神の霊でいっぱいになり満たされている状態を意味しているからです。主なる神の霊が満ちるとき、なにひとつ不可能なことはなくなり、イスラエルは救われるのです。そしてギデオンはこの「神の霊に満たされる」ことを身をもって体験したのです。

主の霊がギデオンをおったので……。

(士師 6・34)

聖書のこの部分は、日本語の訳では「主の霊がギデオンをおおった」となっていますが、原語を見ると「主の霊がギデオンを着た」または「まとった」として使われています。ギデオンという人間を着られた「主の霊」こそが中心であり、人間はたんに主の霊に「着られた」にすぎないのです。このことから「たいせつなのはギデオンではなく、かれは器にすぎない」こと、そして「ギデオンという器のなかに住む主の聖霊こそがたいせつである」ことがわかります。

それではふたつめのしるし、「羊の毛はかわいていたのにそのまわりの土はぬれていた」ことはなにを意味するのでしょうか。ここで「かわいた羊の毛」は私たちの状態を、また「ぬれているまわりの土」は主のすばらしいみわざを現わしています。それはどういう意味かというと、たとえ私たちがまったくからっぽの状態で、なんの喜びも力も感じず、自分自身が無価値なものと思われようなときでも、主は、私たちのまわりの滅びに向かっているおおぜいのひとびとが真剣に主を求める気持ちを持つように、またみことばによって生かされるようにすることがおできになり、そして主の民を解放することがおできになるということです。ただし、この「みことばによって生かされるようになること」は、未信者のあいだではなく、眠っている信者のあいだでなされることなのです。

イスラエルは主の民であり、主の救いにあずかったものでした。信者の群れでした。しかしギデオンの時代にはかれらは自由ではなかったのです。かれらはなんの証しにもならず、神のご栄光のために役立つ者ではありませんでした。というのは、当時イスラエルはとりこになっていて

自由がなく、主のためにもちいられない者になっていたからです。それで主は、まずギデオンがみことばによって生かされるようにされ、ついでギデオンを解放されました。そしてギデオンとおして、主の民ぜんたいも生かされる者となったのです。

私たちはときにはなんの喜びも感じなかったり、また聖霊の満たしをぜんぜん感じないことがあるかもしれません。しかしたいせつなのは私たちの感情ではありません。約束を与えてくださり、その約束をかならず成就してくださる主こそがたいせつなのです。主は決していつわりません。この主なる神の約束を信頼する者はほんとうにさいわいです。そのひとは奇蹟を体験します。ところがギデオンは、主を百パーセント信頼しなかったので、ふたつのしるしを求めました。聖書のべつのところには、つぎのように書かれています。

ただし、少しも疑わずに、信じて願いなさい。疑う人は、風に吹かれて揺れ動く、海の大波のようです。そういう人は、主から何かをいただけると思っではなりません。

(ヤコブ 1・6、7)

少しも疑わずに、信じて願いなさい……。しかし主は、ギデオンが主を「ためす」ことをおゆるしになりました。またギデオンだけではなく、主はペテロにも、主をためすことをおゆるしになったのです。

夜中の三時ごろ、イエスは湖の上を歩いて、彼らのところに行かれた。弟子たちは、イエスが湖の上を歩いておられるのを見て、「あれは幽霊だ。」と言って、おびえてしまい、

恐ろしさのあまり、叫び声を上げた。しかし、イエスはすぐに彼らに話しかけ、「しつかりしなさい。わたしだ。恐れることはない。」と言われた。すると、ペテロが答えて言った。「主よ。もし、あなたでしたら、私に、水の上を歩いてここまで来い、とお命じになってください。」イエスは「来なさい。」と言われた。そこで、ペテロは舟から出て、水の上を歩いてイエスのほうに行った。

(マタイ 14・25～29)

イエス様はご自身を現わしてくださり、弟子たちみんなに「わたしである」と言われました。しかしペテロはイエス様のみことばを百パーセント信じることをせず、「もしあなたならば」と言ってしまったのです。その結果、ペテロは波のなかに沈んでいました。

ところが、風を見て、こわくなり、沈みかけたので叫び出し、「主よ。助けてください。」と言った。そこで、イエスはすぐに手を伸ばして、彼をつかんで言われた。「信仰の薄い人だな。なぜ疑うのか。」

(マタイ 14・30、31)

「信仰の薄い人だな。なぜ疑うのか」。イエス様はそう言われました。「薄い信仰」はすぐに疑いとなり、疑う者はイエス様からなにも得られないのです。

疑う人は、……主から何かをいただけると思っではなりません。(ヤコブ 1・6、7)

けれどもイエス様は、ペテロに「なぜあなたは来たのか、舟のなかにとどまっていたほうがよ

かったのに」とはおっしゃいませんでした。むしろイエス様はペテロのしたことを喜ばれたのです。なぜならペテロはイエス様のことばに従ったからです。イエス様は「なぜあなたは小舟からおりてきたのか」ともおっしゃらず、ただ「なぜあなたは疑ったのか」と言われたのです。

こんにち、しるしを願うことは、主にたいして完全に信頼していることをあらわす最上の証しにはなりません。なぜなら私たちは、主からたくさんの約束を与えられていて、主は決していつわらないと知っているからです。ですから私たちは、いま、目に見えるしるしを見なくても、主に信頼することができるはずです。まえの章で学んだマラキ書の聖句をもういちど思いだしてみてください。

「十分の一をことごとく、宝物倉に携えて来て、わたしの家の食物とせよ。こうしてわたしをためしてみよ。——万軍の主は仰せられる。——わたしがあなたがたのために、天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうかをためしてみよ。」

(マラキ 3・10)

このみことばのなかに二回も「わたしをためしなさい」とあります。「わたしをためしなさい」。たしかにこれは主なる神のみ心です。しかしつきつめてみれば、主が答えてくださるまえに、まず私たち自身がためされることに気がつきます。

私たちは主に属するものを完全に主におわたししているのでしょうか。私たちの所有物、時間や力、そして子どもたちなど、すべてのものはただ主からゆだねられているにすぎません。これ

らすべてのものはほんとうは私たちのものではなく、すべて主のものなのです。主はご自身のものであるそれらすべてをみ心のままに自由におできになるのでしょうか。そうであるならば、またそうであるときにだけ、あふれるばかりの祝福が約束されているのです。なんの祝福もないとしたら、主のせいではなく私たちのせいです。私たちが自分のことばかり考えたり、自分のためにいろいろなものをはしがることによって、主のみ手がしばられることになってしまふのです。

あなたはいつ主にはっきりとしたしを求めましたか。あなたはいつ非常にはっきりとしたものを主に呼び求めましたか。多くの信者はただばくぜんと祝福を求めるのですが、求めること自体がはっきりとしていないことが多いのです。多くの信者にとって、祈りはたんなるひとつの形式にすぎず、たぐさんのひとつとびとの名まえが、ただ機械的にあげられるだけといったぐあいになってしまっています。はっきりとした具体的な目的、目標のもとに祈り求められていないなら、その祈りが聞きとどけられないことはなんら驚くにあたりません。

2 祈りが聞きとどけられていることを確信すべきです

ここにひとつの重要な質問があります。「あなたは祈ったあとで自分の祈りがすでに聞きとどけられたということを確信しているでしょうか?」あなたが祈ったあと、たとえそれまでおなじようになにも目に見える変化やしるしがあらわれなくても、たとえば夫の救いを祈ったあとで、あなたの夫がまえとおなじように主に逆らっているとしても、あなたは自分の祈りがすでに聞きとどけられたということを確信しているでしょうか。たいせつなのは、どんな状態であつて

も、祈ったあとで「私の祈りと願いは聞きとどけられている」と確信することです。

この確信があれば心から主に感謝することができます。私たちの主イエス様は絶えずこの確信を持っておられました。

イエス様は神であられたのに、人間の姿をとってこの地上に来てくださいました。そしてイエス様はこの地上での全生涯をとおして、絶えず聖霊により頼んだ生活をなさったのです。

あるときイエス様はラザロの墓のまえでつぎのように叫ばれました。

そこで、彼らは石を取りのけた。イエスは目を上げて、言われた。「父よ。わたしの願いを聞いてくださったことを感謝いたします。わたしは、あなたがいつもわたしの願いを聞いてくださることを知っておりました。しかしわたしは、回りにいる群衆のために、この人々が、あなたがわたしをお遣わしになったことを信じるようになるために、こう申したのです。」

(ヨハネ 11・41、42)

このとき、イエス様はどうしてみんなのまえで、みんなに聞こえるように主に感謝なさったのでしょうか。その理由を、このみことばのなかでイエス様ご自身があきらかにしておられます。「この人々が、あなたがわたしをお遣わしになったことを信じるようになるため」であると。

愛するみなさん。キリスト者としての私たちの最大の課題は、祈ることです。ユダの手紙には、

しかし、愛する人々よ。あなたがたは、自分の持つている最も聖い信仰の上に自分自身を築き上げ、聖霊によって祈り、

(ユダ 20)

としるされています。私たちには聖霊が与えられています。私たちは聖霊の宮です。そして聖霊は、なによりもまず、私たちが祈りの生活にはいるように、祈りの助け手として与えられているのです。イエス様がなさったように、私たちも聖霊によって祈りましょう。そのとき、まわりのひとびとは、私たちは主によって遣わされた者であり、私たちの祈りが聞かれていることに気がつくのです。

聖書のみことばにもとづいて、主のみ心がなんであるかを知るとき、私たちは大胆に祈ることができます。主が、「私の祈りは聞きとどけられている」という確信を与えてくださるまで祈りつづけるべきです。「私の祈りは聞きとどけられている」と確信したときから、もう、ああしてほしい、こうしてほしいと祈る必要はなくなります。そのときには、私たちは、まもなく奇蹟を体験することができると信じているので、ただ感謝し、喜ぶことができますのです。

主は私たちにつきのような約束を与えてくださっています。

「だからあなたがたに言うのです。祈って求めるものは何でも、すでに受けたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります。」
(マルコ 11・24)

これはつまり、「あなたの信じたとおりになる」ということです。私たちは、主によって遣わされた者として、祈りが聞かれていることを確信すべきです。イエス様がつぎのようにおっしゃっておられるのですから。

「あなたがわたしを世に遣わされたように、わたしも彼らを世に遣わしました。」

(ヨハネ 17・18)

3 確信の結果

私たちのまわりにいるひとびとは、いつ、主の呼びかけに目が覚めるのでしょうか。いつ、真剣にイエス様のことを考えるようになるのでしょうか。いつ、救われたいと思うようになるのでしょうか。

「もしあなたがたの互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」

(ヨハネ 13・35)

注意して聖書のこの部分を読んでください。「もし……なら」という条件がついています。「もしあなたがたの互いの間に愛があるなら」、「それによって、あなたがたがわたしの弟子であることとを、すべての人が認める」とはつきり約束されています。このことからよくわかるのですが、私たちがたがいに愛しあうこと、たがいに信頼しあうことは、決してどうでもよいことではありません。それどころか、私たちが愛しあい、信頼しあうことは、多くのひとびとがイエス様のみにとて来て救われるようになる秘訣です。

では、ひとはいつ、イエス様を真剣に求める気持ちになるのでしょうか。

私たちのまわりのひとびとが私たちをおして、イエス様が祈りをほんとうに聞いてくださる

という実例をその目で見るとき、そのひとびとはイエス様を心から信じます。ですから、私たちが祈るかどうかが、そして私たちが、祈りが聞かれることを実際に体験するかどうかは、たいへんたいせつなことです。たくさんひとびとが私たちの祈りをおとして救われるべきなのですから。イエス様もまた祈られました。「父よ。わたしの願いを聞いてくださったことを感謝いたします。わたしは、あなたがいつもわたしの願いを聞いてくださることを知っておりました。しかしわたしは、回りにいる群衆のために、この人々が、あなたがわたしをお遣わしになったことを信じるようになるために、こう申したのです」。

あるとき、有名な伝道者のジョージ・ミューラーは、近くせまった航海のために、特別な椅子を注文しました。かれは、「その椅子を持つていくことを、主は望んでおられる」と確信していたのです。やがて出航の日がきましたが、椅子はまだ届きませんでした。船が出る時間がどんどん近づいても、まだ椅子は届きません。それでひとびとはかれに、いそいでべつの椅子を買うようにと忠告しました。しかしジョージ・ミューラーは「椅子がくることを私は確信しています」と答えました。出航がいよいよよせまて、乗客全員はとくに船に乗りこんでいました。そのとき、とつぜん一台の車が疾走してきました。椅子を届けにきたのです。みんなは口々に「これは奇蹟だ」と語りあいました。しかしジョージ・ミューラーにとっては椅子がまにあうことはあたりまえだったのです。主はかれに確信を与えてくださいました。かれはかならずそのとおりになると、一瞬たりとも疑わなかったのです。

かれはまた何千人という孤児たちを、ただ主に祈り求めることだけによって養育することをと

おして、祈りはかならず聞きとどけられるということを証したひとでもあります。

私たちがイエス様を信頼せず、祈らないなら、イエス様は私たちのために奇蹟を行なってくれることができません。

何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。私たちの願う事を神が聞いてくださると知れば、神に願ったその事は、すでにかなえられたと知るのです。(Iヨハネ 5・14、15)

ほんとうにすばらしいみことばですね。「何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です」。私たちはこの確信を持っているのでしょうか。もし持っていないのなら、それはなぜでしょうか。

4 主のお約束を信じ、支配権を主にあけわたす

私たちが「主が私たちの祈りを聞きとどけてくださるとは、なんとすばらしいことか」と言うとき、それはある意味で私たちの不信仰のあらわれともいえるのです。というのは、主にとって、私たちの祈りを聞きとどけることはあたりまえのことだからです。

なるほど私たちはたしかに主を信じています。しかし、本気になって主のお約束を自分のものにしようとしているでしょうか。もし私たちが本気になって、主のお約束のとおりになるようにと祈りつづけていないなら、私たちは主をほんとうに愛してはいないのです。「だれでもわたし

を愛する人は、わたしのことを守ります。」(ヨハネ 14・23)とイエス様は言っておられます。そしてイエス様のいましめは「絶えず祈れ」ということです。

主を愛する者は、自然に祈りの生活を行ないはじめます。ほんとうに主のお約束を信じる者は、祈らないではいられません。祈りの生活を行なわない者は、主がみことばとおして言われることを、ほんとうの意味では信じていないのです。主のみことばをほんとうに信じ、その信仰を祈りのかたちであらわす者は、奇蹟を体験します。

主なる神を信じるということは、主なる神のお約束を百パーセント信頼することです。アブラハムは、そのたいへんよい例です。新約聖書のなかで三回、ほとんどおなじようなことばでアブラハムについて書かれています。

聖書は何と言っていますか。「それでアブラハムは神を信じた。それが彼の義とみなされた。」とあります。
(ローマ 4・3)

「聖書は何と言っていますか」。これはほんとうにすばらしい表現ですね。どんなばあいでも、ほかのひとがなんと言っているか、自分はどう思っているかはまったくたいせつではないのです。「聖書はなんと言っているか」がすべてなのです。主はなんと言われるのか、主のお約束はどういうものであるかがたいせつなのです。

また、アブラハムについて、ほかのところでもつぎのように書かれています。

アブラハムは神を信じ、それが彼の義とみなされました。
(ガラテヤ 3・6)

そして、「アブラハムは神を信じ、その信仰が彼の義とみなされた。」という聖書のことばが実現し、彼は神の友と呼ばれたのです。

(ヤコブ 2・23)

主を信じるということは、たとえ現実とまったく矛盾するように思えても、徹頭徹尾、すこしも疑わないで神のお約束を信じることです。そして、目に見えるしがなくても、主がお約束のとおりにしてくださったと、感謝することです。

主を愛する者は、主のご栄光が現わされることをめざさなければなりません。そして私たちがすなおに主に信頼し、大きなものを主に待ち望み、主に期待するときに、主の栄光がもたらされます。私たちは主に信頼することによって、また主に支配権をあげわたすことによって、主を「ためす」べきです。そしてそのばあい、主こそが第一のものとしなければいけないのは言うまでもありません。

「だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。」

(マタイ 6・24)

このように、主こそが第一とならなければなりません。主イエスを第一とし、すべてを主にあげわたす者は、祈りが聞きとどけられることを経験します。「求めなさい。そうすれば与えら

れます」。「わたしを呼べ。そうすれば、わたしはあなたに答えよう」。「わたしをためしなさい」というみことばは決してむなしいお約束ではありません。まことの信仰とは、「神にとつて不可能なことはない」と信じるだけのものではありません。「神にはできる」ということだけではなく、「主はかならずわたしの祈りを聞きとどけてくださる」ということを信じることです。

主は、ある人たちがおそいと思つているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。

(Ⅱ ペテロ 3・9)

主はご自分の約束を遅らせたりしないおかたです。だから私たちは、主のお約束を自分のものにして、大きなものを期待しようではありませんか。

多くのキリスト者が祈りが聞きとどけられることを体験します。しかしその反面、祈りが聞きとどけられることを体験しないキリスト者もいます。これはどうしてでしょうか。主なる神は、あるひとだけを特別に愛して、そのひとの祈りにはとくに耳を傾けられるのでしょうか。決してそんなことはありません。ただ、いっぼうのひとは祈り、もういっぼうのひとは祈らないできとうにやっているので、なにも得られないのです。

さあ、いまからさっそく祈りの生活をはじめようではありませんか。主のお約束を信じ、自分のものとしようではありませんか。

ここで二種類の信者について考えてみましょう。ある信者は、主が祈りの生活へと導くことができます。その結果、そういう信者は主によつてもちいられます。もう一種類の信者は、主によつ

て、苦しみや悩み、問題や病氣をとおして「祈りの生活へと強制」されなければならないのです。というのは、主が、そういった信者が実を結ばないままに終わってしまうことのないように、ひとりひとりに心をくだいてとりはからってくださるからです。祈らなければ実を結ぶことができないので、主は、そのひとびとを「祈りの生活へと強制」せざるをえないのです。

私たちは、信者としての自分の生活をふりかえるとき、祈りが欠けていることに恥ずかしくなります。それと同時に、私たちは、私たちにたいする主のご真実と忍耐がいかに大きなものであるかを知ることができます。私たちはしばしば主のご配慮とお導きを疑ったのに、主は私たちをお捨てになりませんでした。そしてなんどもなんども、くりかえしくりかえし、いつも赦してくださいました。

主は私たちを祝福しようと心から望んでおられます。

主のお約束は、いままなお有効なのです。

「あなたがたが、わたしの名によって何かをわたしに求めるなら、わたしはそれをしましう。」
(ヨハネ 14・14)

まことの祈りとはなにか

1 主ご自身との交わりを持つこと

まことの祈りとはなんでしょう。

多くのひとびとは「祈りとは、主にになかを願うことである」と言います。しかしほん

とうは祈りはそれ以上のものです。祈りとは、主ご自身との交わりを持つことなのです。そして主との交わりを持つ者は、その交わりのなかに自分が必要とするすべてのものを見いだすのです。

主よ。私のたましいは、あなたを仰いでいます。わが神。私は、あなたに信頼いたします。

(詩篇 25・1、2)

ダビデは祈りについてこう言っています。このような心で主に近づくなら、主は私たちに自身を現わしてください、み心をあきらかにしてください。そしてそういうときにこそ、主は私たちを器としておもちいになることができます。私たちは祈ることによってのみ、主の奇蹟を体験することができます。

祈りとは、私たちがほしいものを主に強制しようとするものではありません。祈りとは、私たちが主のみ心を知り、私たち自身を主にあけわたし、主のみ心が成就することです。自分自身のわがままな意思をおしとおしたいと思う者は、いつもそんをします。たとえば聖書のなかのイスラエルの民の歩みからもそのことがわかります。イスラエルの民が荒野でわがままな祈りをしたとき、たしかにその祈りは聞きとどけられました。しかし、結果は祝福ではなく呪いにほかなりませんでした。

そこで、主は彼らにその願うところを与え、また彼らに病を送ってやせ衰えさせた。

(詩篇 106・15)

多くのひとは、祈りとはただ苦しいときだけのものだと思っています。たとえば危険に直面したときとか、重病にかかっているときとか、困難におちいったときとか、まったく望みのない状態にいるとき、そのようなときにだけ祈りが必要だと思っています。しかし祈りはそれ以上のものです。祈りとは主により頼むこと、主からはなれたらなにもできないと知ること、そして主に信頼することを意味しています。祈りとは主との交わりです。つまり祈りとは、主にたいして一方的に語ることではなく、主とともに語る、つまり主と語りあうことなのです。この交わりをとおして、ひとは主をよりよく知ることができます。そしてこれが祈りの大きな目的なのです。パウロは祈って、「主を体験した」、つまり主を見た、と聖書に書かれています。

こうして私がエルサレムに帰り、宮で祈っていますと、夢ごちちになり、主を見たのです。主は言われました。……
(使徒 22・17、18)

またイザヤについてもおなじように、イザヤは祈った、そして「主の栄光を見た」、と書かれています。

ウジャヤ王が死んだ年に、私は、高くあげられた王座に座しておられる主を見た。

(イザヤ 6・1)

祈る者は「主を体験」します。そして主を体験しない者は、失われていくたましいにたいして責任を感じず、とりなしの祈りをしないという罪を主にたいして犯しているのです。

「主はここにおられる」。この意識とこの確信こそが「祈り」なのです。ひとりのひとがその友と語りあうように主と語りあうことこそが「祈り」なのです。

2 主の栄光を見ること

まことの祈りは、「賜物を得たい」と願うよりも、まず第一に「主との交わりをとおして、賜物をくださるかたをよりよく知りたい」と願います。

ここでたいせつなことは主の栄光と主の恵みをはっきりと認識することです。私たちはいったいだれにたいして祈っているのでしょうか。私たちが祈っているおかたは「主の主」「王の王」です。私たちは王様のなかの王様のところに行くのですから、大きな期待を持ていいのであり、また多くのことを願求めています。というのは、主は無限の力と測り知れない富を持っておられるおからだからです。

望遠鏡や顕微鏡は、私たちに自然界における創造主のみわざの偉大さ、すばらしさを教えてくれます。私たちはこの偉大なる創造主のみわざに驚嘆しないではいられません。私たちはこの主の偉大さを認識したとたん、どうしても自分自身を主にささげないではいられなくなるのです。驚嘆に満ちて主を礼拝しないではいられなくなるのです。

マリヤはつぎのように祈りました。

わがたましいは主をあがめ、わが霊は、わが救い主なる神を喜びたたえます。

(ルカ 1・46、47)

またダビデはつぎのように祈りました。

わがたましいよ。主をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。
(詩篇 103・1)

わがたましいよ。主をほめたたえよ。わが神、主よ。あなたはまことに偉大な方。あなたは尊厳と威光を身にまといておられます。
(詩篇 104・1)

そして、まえにも読みましたように、イエス様はつぎのように祈られたのです。

「父よ。わたしの願いを聞いてくださったことを感謝いたします。わたしは、あなたがいつもわたしの願いを聞いてくださることを知っておりました。」(ヨハネ 11・41、42)

感謝することと賛美することは、私たちに豊かな祝福がそがれる道です。

私たちは祈るまえに、だれに祈るかははっきり知らなければなりません。私たちが祈っているそのおきたこそは、栄光の主です。パウロはつぎのように書いています。

「というのは、すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至るからです。どうか、この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。」
(ローマ 11・36)

主は、私たちが主の栄光にあずかる者となることを望んでおられます。そして私たちは、祈る

ことによって主の栄光にあずかることができます。モーセはつぎのように祈りました。

どうか、あなたの栄光を私に見せてください。

(出エジプト 33・18)

この願いは満たされたのです。モーセは神の栄光を見、神の栄光にあずかりました。しかも、かれの顔はひかりかがやきました。それは、神の栄光がモーセをとおして現われたからです。

それから、モーセはシナイ山から降りて来た。モーセが山を降りて来たとき、その手に二枚のあかしの石の板を持っていた。彼は、主と話したので自分の顔のはだが光を放ったのを知らなかった。

(出エジプト 34・29)

またイエス様の弟子たちはイエス様との交わりを持ち、そしてつぎのように言いました。「私たちは主の栄光を見た」。かれらは教養のない漁師でした。しかし、まもなくみんなは、かれらがイエス様とともにいたことを、つまり神の栄光を見たことを認識せざるをえなかったのです。彼らはペテロとヨハネとの大胆さを見、またふたりが無学な、普通の人であるのを知って驚いたが、ふたりがイエスとともにいたのだ、ということがわかって来た。

(使徒 4・13)

かれらがイエス様とともにいたということは、かれらは神の栄光を見たということです。

私たちが祈り、ヨハネが証したように「私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリ

ストとの交わりです。」（Ⅰヨハネ1・3）ということを経験するとき、私たちのまわりのひとびとは、私たちが主なる神とともにいることを知るのです。イエス様のみまえにまごころをそそぎだし、イエス様との交わりを持つ者は、変えられます。そしてまわりのひとびともそのことに気づくようになります。このことは決して隠しておくことができないのです。イエス様が高い山で祈られたとき、そのみ顔は変えられ、太陽のようにかがやきました。私たちもまた、おなじことを体験しなければなりません。ほんとうの祈りの生活を知って、それを行なうとき、私たちはいままでとは根本的に変えられていくのです。

自分自身のいまの霊的な状態に満足してしまっている者は、祈らなくてもいいのです。

自分の未信者の家族が救われなくてもいいと思う者は、祈らなくてもいいのです。

しかし、イエス様に従っていきたいと思う者、イエス様とおなじようになりたいと思う者、みことばによって生かされるようになりたいと思う者は、主の霊が十二分にお働きになれるよう、祈りによって自分のすべてを主にあげわたさなければなりません。

「主なる神の霊が、私たちのうちで、私たちをおして、祈ることができる」。このことこそが、なによりもたいせつなのです。

むすび

「まことの祈り」とはなんでしょう。それは「霊的ないのちの現われ」です。ほんとうに祈るとき、主はご自身を現わしてくださいます。

私たちはみな、聖書のなかの放蕩息子の話を知っています。かれは自分かつてな道を行き、かれのわがままは聞きとどけられました。しかしこのわがままが聞きとどけられたことは、かれに苦しみだけをもたらしたのです。

まことの祈りの生活を見ると、私たちはみな、放蕩息子のようなものではないでしょうか。つまり私たちは、わがままばかりを願ひ、ほんとうの意味で祈ることをもつともおろそかにしているのではないのでしょうか。そのことに気がついたなら、私たちも放蕩息子とおなじように、つぎのように言おうではありませんか。

「立って、父のところに行つて、こう言おう。『おとうさん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。』」

(ルカ 15・18)

放蕩息子はこう呼びかけています。「おとうさん」。父なる神に呼びかけ、父なる神のところにいくことこそが、祈りなのです。主は私たちが、いま、あらたにこのようにはじめることを望んでおられます。私たちは自分の罪を告白しうではありませんか。「私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました」と。そして私たちもいま、当時のイエス様の弟子とおなじように、つぎのように言おうではありませんか。

主よ。……私たちにも祈りを教えてください。

(ルカ 11・1)

祈りへのまねき

▼日航の stewardesses ではありません。日航提供のエプロンを着て祈りとご奉仕に励むキリスト集会の婦人がた。



私たちのキリスト集会では、福音のメッセージや証しが録音されているカセットテープをたくさん作っていますが、何年かまえ、そのカセットレーベルを新しくしました。そこには「祈れ！」ということばが印刷されています。これはたんなる標語などではなく、まさに主なる神のご命令そのものをここにはっきりとしたものです。またそのレーベルには、一条の明るい光がうえからさしこんでいるさまがデザインされています。私たちが祈るとき、主からの明るい光が私たちの心や私たちの周囲にさしこんでできます。そしてその結果、問題があかるみにだされ、また傷があかるみにだされるだけでなく、それらがいやされるのです。

主は、全国のキリスト集会が「祈りの集会」となることを心から望んでおられます。祈りほどたいせつなものはありません。そして祈りほど必要なものはありません。ですから、「絶えず祈れ」というテーマについて、さらによく考えてみましょう。

いったい「祈り」とはなにを意味するのでしょうか。「祈り」とは、ひとことで言えば「主イエス様のもとに行くこと」です。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」

(マタイ 11・28)

このみことばは祈りへのまねきです。

まことの祈りをおして、私たちは主から多くのおくりものをいただくのです。「わたしは与えよう」。これはイエス様の願望です。

「あなたがたの父である神は、喜んであなたがたに御国をお与えになるからです。」

(ルカ 12・32)

たくさんひとびとがイエス様を信じ、救いの確信を持ち、喜びにあふれて生活しています。「私の罪と債務は赦された!」ということが、このひとびとの喜びのみなもとになっています。いっぱい、このすばらしい喜びをまったく知らないひとびともまた、おおぜいいるのです。「祈れ!」、つまり「イエス様のみもとに行きなさい」という要求は、イエス様を信じているひとにも信じていないひとにも、これらすべてのひとびとに向けられているのです。

私たちはなぜ、イエス様のみもとに行くのか。なぜなら、イエス様は罪を赦してくださいだからです。イエス様はどのような困難な状態から、のがれでることのできる道をごぞんじだからです。そしてイエス様は、私たちを完全に満たしてください、決して私たちを失望させないおからだからです。

イエス様は約束しておられます。

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。

(Iヨハネ 1・9)

「わたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。」

(ヨハネ 6・37)

「わたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましょう。父が子によって栄光をお受けになるためです。あなたがたが、わたしの名によって何かをわたしに求めるなら、わたしはそれをしましょう。」

(ヨハネ 14・13、14)

「あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます。」

(ヨハネ 15・7)

「わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えになるためです。」

(ヨハネ 15・16)

「その日には、あなたがたはもはや、わたしに何も尋ねません。まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが父に求めることは何でも、父は、わたしの名によってそれをあなたがたにお与えになります。あなたがたは今まで、何もわたしの名によって求めたことはありません。求めなさい。そうすれば受けるのです。それはあなたがたの喜びが満ち満ちたものとなるためです。」

(ヨハネ 16・23、24)

「その日には、あなたがたはわたしの名によって求めるのです。」（ヨハネ 16・26）

ここに書かれているとおり、私たちは無制限の祈りのお約束をいただいているのです。「求めなさい。そうすれば与えられるのです」。これこそ全知全能の神が私たちに提供してくださるものです。このすばらしいお約束によって、私たちはいつも、主に多くのことを願ひ求めるようにはげまされるのです。ではつづいて、「祈りが聞かれる条件」について考えてみましょう。

1 ただイエス様の栄光が現われることを願うこと

まえに引用したみことばのなかには「わたしの名によって」ということばが六回もでています。またさらにもういちど、おなじことをべつの表現で「あなたがたがわたしにとどまるなら」とも書かれています。

これこそが、「祈りが聞かれる条件」なのです。

私たちはまず、「イエスの名によって祈る」ということがなにを意味しているかを正しく知らなければなりません。なぜなら、これこそが祈りが聞きとどけられる条件であり秘訣だからです。ではいったい「イエスの名によって祈る」とはどういうことなのでしょう。

「イエスの名によって祈る」とは、「主イエス様との交わりのうちにとどまる」ことです。それは、イエス様にすべてより頼むことであり、自己中心の思いや欲望、つまり自己支配や自己決定

などとは正反対のものです。したがってそれはまた、主のうちに生き、主のうちにとどまることをも意味します。

イエス様はまたつぎのようにもおっしゃっておられます。

「わたしの名を名のる者が大ぜい現われ、『私こそキリストだ。』と言って多くの人を惑わすでしょう。」
(マタイ 24・5)

多くのひとびとは、自分では「私はイエスの名によって、主なる神に祈っている」と思いこんでいます。しかし、かれらはまどわされていることが多いのであり、自分自身をあざむいていることが多いのです。

「イエスの名によって祈る」とは、祈りの最後に「イエスの名によって」とつけくわえるという意味ではありません。多くのひとは自分のことだけしか考えていません。そういうひとたちの祈りは、ぜんたいがただ自己中心な思いや望みを言いあらわしているにすぎず、たとえ祈りの最後に「イエスのみ名によって」とつけくわえたとしても、そのような祈りは聞かれないのです。

悪い動機で願うこともできる、と聖書は言っています。

願っても受けられないのは、自分の快樂のために使おうとして、悪い動機で願うからです。
(ヤコブ 4・3)

くりかえしますが、祈りの最後に「イエスのみ名によって」ということはが使われるかどうか

がたいせつなわけではありません。たいせつなのは私たちの心の状態です。「主イエス様だけがすべてにまさって栄光をお受けになっていただきたい」という思いが、私たちの心を支配しているかどうかがたいせつなのです。

イエス様は「父が子によって栄光をお受けになるため」であれば私たちの祈りが聞かれると言っておられます。

「わたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましょう。
父が子によって栄光をお受けになるためです。」
(ヨハネ 14・13)

私たちの祈りが、自分の富とか健康とか、または成功とか快樂とか、さらには奉仕についてだけを目的としているようではないけません。ただ主イエス様の栄光が現わされることだけが、私たちの祈りのほんとうの目的であるべきです。

2 流された血潮によってまことの神に近づくこと

キリスト者は、イエス様が十字架のうえで私たちの身代わりとなって流された血潮によってあがなわれ、罪を赦され、主のまえに義と認められています。そしてイエス様の血潮の赦す力を体験した者だけが「イエスの名によって祈る」ことができるのです。

あるひとは「神は信じるが、イエスは必要ない」と言います。ある非常に頭のいい裁判官もそのようなひとのひとりでした。かれの妻はキリスト者だったので、ムーディーという有名な伝道

者のところに行き、夫と話してくれるように頼みました。しかしムーディーは断りました。いくら話しあっても、議論しても、むだだと知っていたからです。それからムーディーはその裁判官のために祈りはじめました。その結果、その裁判官はそれからまもなく救われたのです。

裁判官が救われたときのようなすはこんなふうでした。

祈りの答えとして、裁判官は心に不安と動揺を感じようになりました。ある晩、妻が祈り会に行っているあいだに、かれの心のなかにある動揺はおそろしく大きくなりました。そこでかれはすぐに寝ようと思いましたが、とうとう一晩中眠れませんでした。翌朝、朝食もとらずに事務所に行くと、事務員に休暇を与え、事務所を閉めました。そしてかれは祈りはじめたのです。「神よ。私の罪を赦してください」。しかしかれの祈りはまったく価値がないように思われました。最後にかれは絶望的になって、とつぜん大声で叫びました。「主よ！ イエスの名によって、イエスのゆえに、私を赦してください」。その瞬間、平安がかれの心を満たしたのです。このようにして裁判官は救われました。

主イエス様こそ、生けるまことの神を知るためのただひとつの道です。私たちは、十字架のうででイエス様が流された血潮のゆえにのみ、生けるまことの神に近づくことができるのです。

「イエスのみ名によって祈る」ことは、流された血潮によって、生けるまことの神に近づくことを意味するのです。

3 み心を知り、み心だけなることを願うこと

「イエスのみ名によって祈る」とはどういうことでしょうか。現代人にもよくわかるように、たとえ話で考えてみましょう。

「イエスのみ名によって祈る」とは、サイン入りだが金額欄になにも書かれていない小切手を銀行に持って行って現金に換えるようなものです。たとえば私が三菱銀行に預金口座を持っていれば、そこに小切手を持って行って現金にすることが出来ます。またその小切手に私の署名があれば、私以外のだれでも、それを持って行って現金に換えることが出来ます。しかし私の署名がなければ、私の子どもであってもお金をもらうことはできません。祈りとはこのように、金額の記載されていない署名入りの小切手のようなものです。イエス様は言っておられます。「なんでもほしいものがあれば、その無記入の小切手に記入して、わたしに願い求めなさい。そうすれば、わたしはあなたの願ったものを与えましょう。ただし、わたしの名によって与えましょう」。

また、たとえば私が富士銀行になんの預金口座も持っていないなら、富士銀行からはなにももらうことができません。おなじように、イエス様により頼んだ生活をしていないなら、またイエス様と結びついていないなら、私たちは天国になんの口座も持っていないのです。そういうとき、私たちの願いは満たされず、また私たちの祈りは聞かれないのです。

しかし、イエス様のみ名によって祈る者の祈りは聞きとどけられます。イエス様の豊かさは尽きることがありません。イエス様の天国の口座は、私たちがいくら引き出しても、いつもいっぱい

いなのです。だから私たちは、いくらでも願い求めるようにイエス様から命じられているのです。主は私たちにたくさんのものを与えたいと望んでおられます。しかし、イエス様の名がそこなわれず、すべての誉れが主に帰されるときにだけ、主は私たちに与えてくださることがおできになるのです。また私たち自身もそこなわれなきにだけ、主は祈りを聞きとどけてくださるのです。

「イエス様の名名によって祈る」ということは、主のみ心を知ること、そして主のみ心だけになるようにと願うことです。このような心のそなえがあれば、どんなばあいでもその祈りはかならず聞きとどけられるのです。

主なる神は私たちひとりひとりのために、それぞれの道をそなえておられます。ですから私たちは祈るまえに、私たち自身のために主がそなえられた道、つまり「主のみ心」がなんであるかを正しく知ることがたいせつです。主のみ心を知るならば、私たちは自由に祈ることができます。そしてひとつの願いだけを、つまり「主のみ名があがめられる」ことだけを、心から望むようになるのです。

何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。

(Iヨハネ 5・14)

私たちはつぎのことに十分気をつけましょう。「イエスの名によって祈る」ということは、主のみ心を知ることであり、主のみ心にもとづいて祈り、主のみ心を自分のものとすることです。

ですから、主なる神のみ心を知らない者は、イエスの名によつて祈ることができません。

「イエスの名によつて祈る」とは、「自分の名まえによつて」ではなく、「イエス様の名まえによつて」なにかを願ひ求めることです。

この世のなかには、だれかの保証人になったり、実印をついて自分の名まえを使うことを許してしまったことを、たいそう後悔しているひとがたくさんいます。なぜならそのひとたちはだまされてしまったからです。信用できないひとに「自分の名まえを使う権利」を与えることはできません。聖書のなかにもそういう例がでてきます。預言者エリシャのしもべであるゲハジがそうでした。ゲハジはエリシャの名まえを使いましたが、それは主の栄光が現われるためではありませんでした。かれは自分だけのことを考えて、金持ちになりたいと思つていたのです。たしかにかれは金持ちにはなりました。しかし主の祝福がなくなつてしまいました。そして呪われたことのしるしとして、かれはらい病におかされてしまったのです。

そのとき、神の人エリシャに仕える若い者ゲハジはこう考えた。「なんとしたことか。

私の主人は、あのアラム人ナアマンが持つて来た物を受け取ろうとはしなかった。主は生きておられる。私は彼のあとを追いかけて行き、必ず何かをもらつて来よう。」ゲハジはナアマンのあとを追つて行つた。ナアマンは、うしろから駆けて来る者を見つけると、戦車から降りて、彼を迎え、「何か変わったことでも。」と尋ねた。そこで、ゲハジは言つた。「変わったことはありませんが、私の主人は私にこう言つてよこしました。『たつた今、エフライムの山地から、預言者のともがらのふたりの若い者が私のところにやつて来ました

から、どうぞ、彼らに銀一タラントと、晴れ着二着をやってください。』するとナアマンは、『どうぞ。思い切って二タラントを取ってください。』と言って、しきりに勧め、二つの袋に入れた銀二タラントと、晴れ着二着を、自分のふたりの若い者に渡した。それで彼らはそれを背負ってゲハジの先に立って進んだ。ゲハジは丘に着くと、それを彼らから受け取って家の中にしまい込み、ふたりの者を帰らせたので、彼らは去って行った。彼が家にはいつて主人の前に立つと、エリシャは彼に言った。『ゲハジ。あなたはどこへ行つて来たのか。』彼は答えた。『しもべはどこへ行きませんでした。』エリシャは彼に言った。『あの人があなたを迎えに戦車から降りて来たとき、私の心もあなたといっしょに行つていたではないか。今は銀を受け、着物を受け、オリブ畑やぶどう畑、羊や牛、男女の奴隷を受ける時だろうか。ナアマンのらい病は、いつまでもあなたとあなたの子孫とにまといつく。』彼は、エリシャの前から、らい病にかかつて雪のように白くなって、出て来た。

(Ⅱ列王 5・20-27)

4 自分自身を主にゆだねてただ主の栄光だけを願うこと

ここで、いままで見てきたことをまとめてみましょう。

「イエスのみ名によって祈る」ということは、聖霊により頼みながら、み心になった祈りをすることです。

「イエスのみ名によって祈る」ということは、主が望まれることを望み、主が願われることを願

うことです。

「イエスのみ名によって祈る」ということは、聖霊が持つておられるのとおなじ目的を持つ、つまりどんなことがあってもただ主の栄光だけを求めることです。

主なる神のみ心が私たちの願いとならなければなりません。そして、すこしも妥協しないで、自分自身をすべて主にあげわたしたときにだけ、私たちは「主のみ心になることだけ」を願うことができのです。私たちの心がまえが正しければ、私たちは「主のみ名によって祈る」ことができるのです。

「あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます。」
(ヨハネ 15・7)

求めるものは何でも神からいただくことができます。なぜなら、私たちが神の命令を守り、神に喜ばれることを行なっているからです。
(Iヨハネ 3・22)

私たちが主のお望みになることを行なうなら、主は私たちが望むことを行なってくださいます。どうか主の声を聞いてください。そうすれば、主はあなたの声を聞いてくださるのです。

測り知れないほどの富が、私たちに提供されています。しかしそれにはたったひとつだけ条件があります。その条件とは、「主のうちにとどまる」ことであり、「イエスの名によって祈る」こ

とです。そしてこのことは、私たちが主のみ心を知るときにだけ可能なのです。だからこそ、私たちは日々、「主のみ心、主の願い、主のお考えを知りたい」と、心から求めるのです。

私たちはみな、神のみ心こそ私たちにとって最高のものであると知っています。また私たちは主が私たちを祝福したいと望んでおられることを知っています。そして私たちは、主は私たちをおもちになりたいということも知っています。さらに私たちはみな、自分の意思に従えば、自分自身だけでなく、ほかのひとにも害になることをよく知っています。主のみ心を求めないならば、私たちの生活はまさに悲劇そのものです。ですから私たちは自分の欲望を追求することをやめて、自分自身を主にゆだねようではありませんか。

私たちが祈ってもなんの答えも得られないときには、それは主の責任ではありません。かえって、まちがった心がまえで主に向かっている私たちのほうに責任があるのだということを知る必要があります。私たちが祈ってもなんの答えも得られないのは、主のお約束が信頼できないからではなく、私たちが不信仰だから、あるいは不従順だからなのです。

私たちが祈ってもなんの答えも得られないとき、それは私たちの最善だけを願っておられる主が、私たちを悔い改めと徹底的な献身へとまねいておられるときなのです。

5 み心を知るためのそなえ

「私たちはどうしても主のみ心を知らなければなりません」。これはいままでに、なんどもくりかえし強調してきたいせつなことです。

しかし、ほんとうに「主のみ心を知る」ことはできるのでしょうか。

神のみことばである聖書は、はっきりと「み心を知ることはできる」と答えています。

私たちには、キリストの心があるのです。
(Ⅰコリント 2・16)

主はご自身を恐れる者と親しくされ、ご自身の契約を彼らにお知らせになる。

(詩篇 25・14)

あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。
(ピリピ 2・5)

私たちがほんとうに主のみ心を知りたいと願い、み心を行ないたいという心のそなえができているときにだけ、主はみ心をあきらかにされます。このことはとてもたいせつです。つまり「神のみ心を知る」と「神のみ心を行なう」ことは切りはなすことができないのです。だからもし、「私はまず神のみ心を知りたい。み心を行ないたいかどうかは、そのあとで考える」と思っているひとがいるなら、そのひとの一生はみじめな敗北に終わります。

「だれでも神のみこころを行なおうと願うなら、その人には、この教えが神から出たものか、わたしが自分から語っているのがわかります。」
(ヨハネ 7・17)

神のみ心は、聖書のなかにあきらかに示されています。イエス様がみことばのなかで約束しておられることは、「主のみ心の現われ」です。たとえば、私たちは知恵をいただきたいという期待をもって祈り求めることができます。なぜなら私たちにはそのためのはっきりしたお約束が与えられているからです。

あなたがたの中に知恵の欠けた人がいるなら、その人は、だれにでも惜しげなく、とがめることなくお与えになる神に願いなさい。そうすればきつと与えられます。

(ヤコブ 1・5)

み心にかなう祈りびとになりたいと心から望むひとは、主のみ心を知るために聖書を読まなければなりません。キリスト者はだれでも聖霊を持っているという事実は、大きなはげましです。聖霊は「祈りの助け手」として与えられているのです。

御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます。人間の心を探り窮める方は、御霊の思いが何かをよく知っておられます。なぜなら、御霊は、神のみこころに従って、聖徒のためにとりなしをしてくださるからです。

(ローマ 8・26、27)

このみことばからつぎのようなことがわかります。

つまり、私たちがなにを祈るべきかわからず、望みのない状態におかれているなら、それは大きなさいわいです。そのようなときこそ、聖霊が私たちを導いてくださるからです。

しかし、祈ろうとしない者は、主にたいしてなんのいいわけもできません。「絶えず祈りなさい」。これは、私たちを愛していただく神のご命令です。しかし私たちはただだんに「祈らなければならぬ」だけではなく、「祈ることができぬ」のです。なぜならば「祈りの助け手」として、聖霊が与えられているからです。

中途はんばなキリスト者であることは、なんの価値もありません。意識してイエス様に従わない者は、主のためにも人間のためにも、実際には価値がないのです。日常生活のなかで「たったひとつの罪ぐらいはたいしたことはない」、と考えているような信者を、主はおもちいになることができません。そんな信者からは、主はあらゆる喜びや希望を取りさり、私たちの祈りは実りのないものとなってしまふのです。

たいせつなのは、私たちがパウロとおなじように「主よ、私はなにをなすべきでしょうか」とたずねつづけることです。それだけでなく、主のお力によって、主の心を行なう心のそなえができていることもまたたいせつです。パウロは主にたずねました。そしてかれは明確な答えを得ることができました。パウロが得た答えは、私たちにもあてはまります。

それゆえ、神に選ばれた者、聖なる、愛されている者として、あなたがたは深い同情心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。互いに忍び合い、だれかがほかの人に不満を

抱くことがあっても、互いに赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださいように、あなたがたもそうしなさい。そして、これらすべての上に、愛を着けなさい。愛は結びの帯として完全なものです。キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい。そのためにこそあなたがたも召されて一体となったのです。また、感謝の心を持つ人になりなさい。キリストのことを、あなたがたのうちに豊かに住まわせ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌により、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。あなたがたのすることは、ことばによると行ないによるとを問わず、すべて主イエスの名によってなし、主によって父なる神に感謝しなさい。

(コロサイ 3・12-17)

6 私たちの主は「祈るキリスト」

つぎに、私たちが信じ、愛し、仕えたいと思っているイエス・キリストは、「祈るキリスト」である、ということをよく考えてみましょう。

私たちの主、イエス様は「祈るキリスト」なのですから、イエス様の名名によって祈りたいと願う者もまた、「祈りの生活」を知らなければなりません。この地上におられたとき、イエス様にとって、祈りはいちばんたいせつなものでありました。そしていまも、天におられるイエス様にとって、祈りはいちばんたいせつなもののなのです。だから、私たちにあって、祈りがいちばんたいせつなものになっていないならば、私たちはまちがった状態にいるのです。イエス様は、ひ

との姿をとってこの地上にいらっしゃるあいだ、絶えず祈っておられました。つまりイエス様は、絶えず父なる神と祈りによって結びついておられ、決してご自身でかってやわがまをしようとはなさらなかったのです。

イエスは、朝早くまだ暗いうちに起きて、寂しい所へ出て行き、そこで祈っておられた。

(マルコ 1・35)

それから、(イエスは) 群衆に別れ、祈るために、そこを去って山のほうに向かわれた。

(マルコ 6・46)

イエスは祈るために山に行き、神に祈りながら夜を明かされた。

(ルカ 6・12)

群衆を帰したあとで、(イエスは) 祈るために、ひとりで山に登られた。

(マタイ 14・23)

この地上でのイエス様の生涯は、祈りの生涯でした。つまり、完全に主なる神により頼んだ生涯、信頼の生涯、そして献身の生涯だったのです。

パウロはつぎのように証しています。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キ

リストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

(ガラテヤ 2・20)

イエス様は、聖霊によってすべての信者のなかに生きておられます。それだけではありません。イエス様は、ただ私たちのうちに生きておられるだけでなく、私たちをおして働きたいと願っておられます。そして、私たちの生涯の特徴が「主により頼むこと」になるときにだけ、イエス様は私たちをおして働くことがおできになります。つまり、私たちの生涯は、主により頼むこと、信頼すること、そして献身することによって特徴づけられる必要があるのです。これこそまことの祈りの生活です。そして、このようなまことの祈りの生活は、イエス様の栄光のための生活であり、まことの満たしにあずかる生活であり、そして実を結ぶ生活なのです。

「祈るキリスト」は、いつも痛切な願いを持っておられます。それは、父である主の栄光が現われることと、人間が救われることです。

この「祈るキリスト」は、イエス様のからだである教会に、そのかしらとして与えられています。かしらであるイエス様と結びついている者だけが、祈りの生活をおくることができるのです。現代の多くのキリスト者は、残念なことに、一種の分裂症的な状態にあるようです。すべての信者のかしらはキリストです。そしてこのキリストは、さきほどからなんどもくりかえしているとおり、「祈るキリスト」です。イエス様はかしらであり、私たちはイエス様のからだです。そ

してかしらであるイエス様の生活の特徴は、祈ることであり、願い求めることであり、またとりなしをなさることにあります。ですから、もし私たちの生活の特徴が、祈り、願い求め、とりなしの祈りをするものでないならば、私たちはかしらであるイエス様との一致がなく、まさに分裂的な状態にあるのです。

このように、イエス様に祝福していただきたいと願う者は、「とりなしのご奉仕」にはいられないままです。「とりなしのご奉仕」とは、祝福され、その祝福をひとりでも多くのかたがたにわかち与える道、主によって定められた道です。イエス様のみ名は、このご奉仕を行なうために、私たちに与えられているのです。

私たちはこれまで、まず自分で考え、計画し、働いて、そのあとで「主よ。祝福してください」と願い求めているのではないのでしょうか。しかし、ほんとうは、私たちはなによりもさきに、主のみ心を知らなければなりません。それから、私たちが自己追求的なすべてのものを犠牲にして、すべてを主にささげると、主はまったく自動的に私たちを祝福してくださるのです。そして私たちが祝福されると、その祝福は自動的にほかのかたがたにもおよんでいくのです。

「私にとどまりなさい」。これはイエス様の心からの願いです。イエス様は、「とりなしびとであるわたしとの交わりのうちにとどまりなさい。そうすればあなたがたはわたしの名によって祈る力を与えられ、わたしはあなたがたがわたしの名によって願い求めることを行なおう」とおっしゃってくださっているのです。

7 イエス様の權威によつて

イエス様のみ名によつて祈るということは、イエス様の權威を行なう力を持つことを意味します。使徒たちは実際にそれを行ないました。そのため、足の悪いひとがイエス様のみ名によつて一瞬にしていやされるといったことが起こりました。そしてそのあとで使徒たちは、パリサイ人、聖書学者たちにつきのようにたずねられたのです。

あなたがたは何の權威によつて、また、だれの名によつてこんなことをしたのか。

(使徒 4・7)

使徒たちはイエス様の名によつて、つまりイエス様の權威によつて行動しました。イエスのみ名によつて祈るということは、イエス様の權威を行使することを意味します。

名まえそれ自体は力ではありませんが、名まえがおよぼす影響は、偉大な力です。

十字架における犠牲の死のあと、イエス様にはすべての名にまさる名が与えられた、と聖書は言っています。それは「イエス」という名まえです。この名まえは、すでにお生まれになったときからイエス様に与えられていました。しかし十字架の死によつて、また高く引き上げられたことによつて、その名はひとつの変化を経験しました。つまり、イエスの名によつてすべてのひざがかがめられるようになったのです。

イエスの名はすべての名にまさっています。イエスはすべてにまさって高く引き上げられまし

た。すべての力は主のみ手のうちにあります。そしてこのイエスの名を、私たちは自由にもちいることができ、またもちいることをゆるされているのです。私たちは実際に、主なる神の全能にあずからなければなりません。

偉大な主なる神は、ご自分の力を、私たちが自由に使うことができるように提供しておられます。つまり主なる神は私たちを信用しておられるのです。イエス様ご自身が私たちに託されているのですから、私たちは主なる神の權威を自由にもちいることがゆるされています。

豊かな友人が実印と預金通帳と小切手帳を私たちにくれるなら、私たちはそれでほしだけのお金を引き出すことができます。またそれによってその友人は私たちにたいして大きな信頼を示していることになります。それとおなじように、私たちは、イエス様の名を託されていることによって測り知れないほど大きなものを主からゆだねられているのです。

8 なぜイエスの名がゆだねられているか

イエスの名によって祈られることは、かならず成就します。主なる神ご自身がその責任をとってくださるからです。

現代の特徴は、全能なる主が、主のからだである教会をもちいたいと思っておられるということです。主はご自身が行動されることなく、主のからだである教会をもちいたいと思っておられます。主はご自身で奇蹟を行なうことなく、主のからだである教会とおして奇蹟を現わしたいと思っておられます。

ですから、まだイエス様を知らず、救われていないひとびとは、すでに救われているひとびとをとおしてイエス様のもとに導かれなければなりません。イエス様を信じている者はだれでも、イエス様のみ手のうちにある器となり管とならなければなりません。主イエス様は、信者をとおして、またからだなる教会をとおして活動したいと望んでおられます。そのためにこそ私たちに「イエスの名」がゆだねられているのであり、イエス様のみ力が私たちに託されているのです。「イエスの名によって語る」ということは、「イエス様ご自身が語りたいと思われることを語る」ということです。「イエスの名によって行なう」ということは、「イエス様がなさりたいと思われることを行なう」ことです。

主のからだである教会は、主の代わりに「イエスの名」によって、また主の權威によって語り、行動する權威を持っています。主なる神はそれによって、私たちが理解できないほど大きな責任をとってくださるのです。

9 イエスの名は十字架と結びついている

イエスの名をもちい、神の全能の力をもちいるための「土台」とは、なんでしょう。それは、私たちがほんとうに打ち砕かれていること、ほんとうにより頼んでいること、徹頭徹尾献身していることです。パウロはイエスの名をもちいました。その「土台」とはどういうものだったのでしょうか。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キ

リストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

(ガラテヤ 2・20)

イエスの名によって、罪人の罪は赦されると約束されています。

「その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。」

(ルカ 24・47)

イエスについては、預言者たちもみな、この方を信じる者はだれでも、その名によって罪の赦しを受けられる、とあかししています。

(使徒 10・43)

主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。

(Iコリント 6・11)

主のからだである教会とは、なんでしょうか。主のからだである教会とは、「イエスの名とイエスの権威がゆだねられているひとびとの群れ」のことです。私たちは、イエスの名によって、悔い改める罪人に罪の赦しを告げることがゆるされています。

また、イエスの名は、悪霊を追い出すためにも私たちに与えられている、と聖書ははっきりと

言っています。

「信じる人々には次のようなしるしが伴います。すなわち、わたしの名によって悪霊を追い出し、新しいことばを語り、」
(マルコ 16・17)

幾日もこんなことをするので、困り果てたパウロは、振り返ってその霊に、「イエス・キリストの御名によって命じる。この女から出て行け。」と言った。すると即座に、霊は出て行った。
(使徒 16・18)

「確かに、わたしは、あなたがたに、蛇やさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を授けたのです。」
(ルカ 10・19)

主イエスの名によって、私たちには悪魔の支配や力にうち勝つ権威が与えられているのです。私たちは祈ります。「主よ。私は弱く、頼りにならず、役に立たないものです。しかし私はイエス様のみ名によってみまえに近づきます」。そうすれば、私たちの祈りは聞かれるのです。

「もっとりっぱな信者になって、罪を犯すことがすくなくなれば、自分の祈りが聞かれるだろう」と思っているひとがいます。しかしこの考えはまちがっています。なぜなら私たちは、自分を正しいとする「義」にもとづいてではなく、主イエス様の流された「血潮」にもとづいて主のみまえに近づくからです。私たちは、自分の「義」にもとづいてはなにもできないのです。私た

ちは自分自身の名まえによってではなく、「イエスの名によって」近づくのです。私たちは、自分の持っているものにとづいてではなく、「主イエス様ご自身のものにとづいて」はじめて、まったく信頼して權威をもって祈ることがゆるされるのです。

つぎのことをぜひ覚えていただきたいと思います。「イエスの名、つまりイエス様の權威は、十字架と結びついている」ということです。ですから、私たちが自分自身を否定し、聖霊に支配していただけるように自分自身のすべてをあげわたすときにだけ、私たちはほんとうに主のみ名によって祈ることができ、奇蹟を体験することができるのです。

どうか主が、このことにたいして、私たちの心の目を開いてくださいますように。そして、どうか私たちが新しく自分の使命を知り、ほんとうに主の名によって祈ることができますように。そのためにまず、私たちが中途はんばに妥協することなく、すべてを主にあげわたすことができますように。

最後に、はじめに見たヨハネの福音書の箇所をもういちど思いだしてみしましょう。

「わたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましょう。父が子によって栄光をお受けになるためです。あなたがたが、わたしの名によって何かをわたしに求めるなら、わたしはそれをしましょう。」
(ヨハネ 14・13、14)

「あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことがあなたがたにとどまるなら、何でも

あなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます。」
(ヨハネ 15・7)

「わたしがあながたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があながたにお与えになるためです。」(ヨハネ 15・16)

「その日には、あなたがたはもはや、わたしに何も尋ねません。まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが父に求めることは何でも、父は、わたしの名によってそれをあなたがたにお与えになります。あなたがたは今まで、何もわたしの名によって求めたことはありません。求めなさい。そうすれば受けるのです。それはあなたがたの喜びが満ち満ちたものとなるためです。」
(ヨハネ 16・23、24)

「その日には、あなたがたはわたしの名によって求めるのです。」 (ヨハネ 16・26)

真剣な祈り



◀ 祈りに支えられて。
同じ日に主人を天に召された谷山さん(左)と佐藤さん。



◀ 病床にあっても祈りと恵みのすばらしさを証する桑野節子さん。

祈りとはいったいなんでしょうか。祈りとは、私たちと生けるまことの神との「結びつきのあらわれ」です。祈りのなかで、私たちは主の愛と恵みを心から感謝します。祈りのなかで、私たちは幼子のようにすなおに自分の願いを主にうちあけます。したがって「祈りとは、たましいの呼吸である」ということができます。

呼吸ができないと、ひとは死にます。おなじように、キリスト者でありながら祈らないなら、つまりたましいの呼吸をしないなら、そのひとはかならずまちがった状態におちいります。

前章において学んだとおり、祈りによって、宇宙を支配しておられるおかたのみ手が動かされます。祈りによって、私たちには驚くべき主の力が提供されるのです。「主なる神は私の祈りを聞きとけてくださる」。この幼子のような信頼が私たちの特徴となるべきです。

主の恵みによって自分のほんとうの状態に目が開かれ、自分のわがままや罪を認め、救われたいと願う者は、だれもが「祈りの力」を体験します。「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい」というすすめに応じてイエス様のみもとにくる者は、イエス様が罪の赦し、心の平安、そしてほんとうの喜びを与えてくださることを体験します。

まえの章では、「主イエスのみ名によって祈るとはどういうことか」を考えました。「主イエス様のみ名によって祈る」ということは、「ひとは自分のでがらや功績によってではなく、ただイエス様がご自身の死をとおしてなしとげてくださった救いのみわざによってのみ、主なる神のみもとに行くことができる」ということです。

私たちにとってなによりたいせつなのは、信じて疑わず、イエス様に大きなことを期待する、

というたいどです。

聖霊のはたらきによる祈りはすべて聞きとどけられます。つまり、自分の利益のためではなく、ただイエス様の栄光のためだけを願う祈りは、すべて聞かれるのです。いっぽう、み心にならないう祈りは、たとえ聞かれることがあつたとしても、それはけつきよくそのひとの益にはならず、むしろ害になります。不純な動機で祈つたり、許したくないという気持ちで祈つたりするひと、また深く考えないで軽率に祈るひとは、なにも得ることができません。

1 真剣な祈りの必要性

それでは「絶えず祈れ」ということについて、「真剣な祈りの必要性」という観点からごいっしょに考えてみましょう。「真剣な祈りの必要性」は、言いかえると「祈りにおける戦い」です。「真剣な祈り」とは、祈りの時間的な長さが問題なのではありません。たいせつなのは祈りの長さではなく、私たちが、祈っていることをほんとうにそのとおりだと確信しているかどうかということなのです。

ジョン・ハイドは、インドにおいてもちいられ、大いに主に祝福された宣教師でした。かれはなによりも祈りを第一にしたひとでした。かれにとっては祈りこそが信頼できるなによりもたいせつなものだったのです。祈りを第一にしたその結果、かれは祈りの答えとして、多くの奇蹟を体験することができました。

ジョン・ハイドのように真剣に祈るひとは、あまりいません。それどころか多くの信者は、

「ほんとうに私たちもジョン・ハイドとおなじように祈らなければいけないのだろうか」と考えることでしよう。この疑問にたいして私たちは、まずつぎのことを知る必要があります。寝食を忘れて長いあいだ熱心に祈りつづけるひとは、自分でそのように決心してやっているのではないのです。自分の思いではなく、聖霊がそのようにさせたからこそ祈っているのです。つまりそのひとは、聖霊がそのように導かれたために、熱心に祈りつづけないではいられなかったのです。私たちは主のためにをなすべきでしょうか。どうしたら未信者が救われるでしょうか。私たちはどれほど長い時間祈りつづけるべきでしょうか。こういったことはたしかにたいせつな問題ではあります。しかしなによりもたいせつなことは、私たちが主のみ心を知ることです。主のみ心のまんなかにあるこそが、いちばんたいせつなことです。主に仕えたい、主のためになにかをしたいという願いはたいせつです。しかしそれよりもっとたいせつなのは、「主なる神のみ心だけが私たちを動かしている」という状態です。もし、まいにち千人ものひとが私たちをとおして救われることがあれば、それはたいへんなことでしよう。しかしそれよりもっとたいせつなのは、私たちをとおして神のみ心だけが実現されることです。「主よ。あなたはなにを望んでおられるのでしょうか。私がなすべきことはなんでしょうか。どうか私を導いてください」。これこそなによりもたいせつなことなのです。そのことを正しく知るなら、私たちは祈りはじめ、主が私たちに語りかけてくださり、そして主のみ心が私たちをとおして実現されるのです。

2 真剣な祈りへのまねき

「絶えず祈れ」と、主は私たちに呼びかけておられます。主がこのように言われるのは、私たちに重荷を負わせようとしたり、私たちを束縛しようと思っておられるからではありません。私たちが喜びに満たされ、神の力に満たされることを望んでおられるから、主は呼びかけておられるのです。主は私たちが祈りをおしてあわれみを受け、恵みをいただき、おりにかなった助けを受けることを望んでおられるのです。

ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。 (ヘブル 4・16)

祈りについて語られると、たいていのキリスト者は良心のやましさを覚えます。だれもが「私はずっと祈らなければ……」という思いをいだくにちがいありません。たしかにそのとおりでしょう。しかし、もし私たちが良心のやましさを感じた結果、恐れをいだくようになり、天にいらっしゃる私たちの父である主のみもとに行かなくなってしまうならば、それこそたいへん悲しいことです。親はひとりのこらず、愛するわが子の幸せを考えます。もし子どもがなにかのハンディを負っていれば、親はたいそう心をいためます。そしてその子の幸せのためなら、すべてを犠牲にするでしょう。これこそ愛にほかなりません。人間の親でさえそうなのです。ましてや天にいらっしゃる父である主は、どれほど私たちのことを考えていくださり、私たちのほんとうの幸

せを願っておられることでしょうか。

私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうしても、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくだらないことがありません。

(ローマ 8・32)

現代は「忙しすぎる」時代です。しかし、たとえひまな時間があったとしても、私たちはきつと祈らないで、べつのことをしてしまおうでしょう。

人間は、なにをどのように祈ったらいのか自分ではわかりません。だからこそ「祈りの助け手」として、聖霊があらゆる時代のあらゆる信者に与えられているのです。

そこでつぎのことをよく考えてみましょう。

私たちはいろいろなひととかかわりを持っています。むかしからの知りあいもおおぜいいることでしょう。そして、これらのひとびとと知りあったことも、決して偶然ではありません。すべてが聖霊の導きによるのです。ですから私たちは、キリスト者として、そのようなひとたちが救われることにたいして責任があるのです。なによりもまず、そのひとたちに福音が宣べ伝えられなければなりません。

サムエルという預言者はつぎのように告白しました。

私もまた、あなたがたのために祈るのをやめて主に罪を犯すことなど、とてもできない。

(Iサムエル 12・23)

このみことばによると、私たちにかかわりのあるひとびとの永遠の救いについて真剣に心配しないのは、主にたいして罪を犯すことであり、主のはたらきをさまたげることにはかなりません。またいっぽうでは、仕事に追われ、心身ともに疲れはててしまい、主に申しわけないと感じているキリスト者もいます。しかし、主なる神は私たちの父なのです。黙示録のなかで、主はくつかえしくりかえし言っておられます。「私は知っている」「私は知っている」と。主は肉体的な状態や仕事はもちろん、私たちのすべてをごぞんじなのです。ですから、重荷となっていること、自分を圧迫していること、なんでもすべてを主にうちあけようではありませんか。

3 祈りによる勝利の生活

ここでちょっとパウロのことを考えてみましょう。パウロは主のみ心になう祈りびとでした。かれは、ひとりで祈ろうとしてもひとりでは祈ることができないような状態におかれていました。というのは、パウロはしばしば牢獄に入れられていて、昼も夜もひとりのローマ兵に監視されていたからです。このようにパウロは、ひとりになることもできない苦しい状態にありました。しかしそれにもかかわらず、かれはその牢獄のなかでも、各地の教会にあててすばらしい手紙を書きつづけました。それらの手紙には、パウロの祈りも書きこまれています。そしてそれは、ただ手紙のなかのことだけではなく、パウロが実際に祈っていた祈りにほかならないのです。

主は決して私たちにむりな要求をなさいません。主は私たちが眠りや栄養を無視して、からだ

をこわすようなことをするのを望んではおられません。とはいふものの、キリスト者のなかには朝はやく起きて長い時間聖書を読んで祈るひとがいます。そしてそのようなひとのなかには、主が驚くほど豊かな力を与え、はげましてくださることを体験したひととすくなくありません。

ドイツで豊かにもちいられたあるキリスト者は、よくつぎのように言っていました。

「朝、神のみことばと祈りなしにはじめた一日は、完全な敗北の一日である」と。

勝利の生活の条件は、朝はやく起きることです。主よりも自分を愛する者は朝寝坊です。自分よりも主を愛する者は早起きです。主に祝福され、もちいられるキリスト者は朝はやく起きます。夜はやく休むからこそはやく起きられるのです。私たちのからだは聖霊の宮です。だから朝はやく起きることにたいしても、またからだが十分な睡眠と栄養をとることにたいしても、私たちに責任があるのです。

4 祈りながら働く

いつでも祈るべきであり、失望してはならない。

(ルカ 18・1)

「絶えず祈れ」と聖書は言っています。しかしこれは、いつもひざまずいて祈ってばかりいなさいという意味ではありません。私たちは与えられた仕事を良心的にしなければなりません。「祈らなければならぬから、仕事をおろそかにする」というひとは、まちがった祈りをします。そして正しく祈る者は、よりよく、よりたくさん働きます。

勤勉で怠らず、霊に燃え、主に仕えなさい。

(ローマ 12・11)

また、私たちが命じたように、落ち着いた生活をすることを志し、自分の仕事に身を投入し、自分の手で働きなさい。外の人々に対してもりっぱにふるまうことができ、また乏しいことがないようにするためです。

(Ⅰテサロニケ 4・11、12)

私たちは、あなたがたのところにいたときにも、働きたくない者は食べるなど命じました。

(Ⅱテサロニケ 3・10)

パウロはこのようにはっきりと書いています。

与えられた仕事は、主のまえに、また主のために身を入れてしなければなりません。与えられた仕事は、自分の責任を自覚し、祈りのたいどをもつてしなければなりません。つまり私たちは「主よ。私は自分自身により頼むことはできません。私はあなたを信頼します。どうか私に必要な知恵、力、喜び、そして平安を与えてください」と祈りながら、与えられた仕事をするべきです。そして、祈るとき、つぎのことをたいせつにしましょう。すべてをごぞんじである主は、私たちのすぐそばにおられます。

いつも主にあつて喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。あなたがたの寛容な心を、すべての人に知らせなさい。主は近いのです。何も思い煩わないで、あらゆるばあい

に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。

(ピリピ 4・4-7)

ここには「主は近いのです」と書かれています。主は近い。主は私のそばにおられる。この聖句は、主の再臨が近いという意味だけでなく、きょうも、いまも、主は私たちの近く、つまり「ここにおられる」という意味でもあります。主は弟子たちに「わたしはいつもあなたがたとともにいる」と約束されたのです。

またこの聖句から、つぎのようなことがわかります。それは、私たちは心配するか、祈るかのどちらかだということです。祈りとは、すべての心配を主にゆだねることです。だから私たちは、祈ることにより主の平安に満たされるか、それとも心配のあまり疲れはて、羊飼いのいないばらの迷った羊のような状態になるかのどちらかなのです。

5 祈りの土台

ここでもういちど「祈りとはなにか」を考えてみましょう。

祈りとは、イエス様のみもとに行くことであり、イエス様に私たちの願いを申しあげることです。「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」(マタイ 11・28) というイエス様の呼びかけは、祈りへのまねきです。

子どもが母親にしがみついて自分の願いをうちあけるのとおなじように、私たちはイエス様のみにとに行き、すべてを主にうちあけることがゆるされています。

私たちは、祈るとき、自分のほしいものがなんであるかをはっきりとイエス様に申しあげなければなりません。つまり私たちの祈りは、はっきりとしたものでなければなりません。というのは、いろいろな悩みや苦しみ、困難に追われ、私たちがイエス様を見あげるまなざしがぼやけてしまうことこそ、悪魔が望んでいることだからです。

約束された方は真実な方ですから、私たちは動揺しないで、しっかりと希望を告白しようではありませんか。

(ヘブル 10・23)

「約束された方は真実な方です」とあります。愛するみなさん。このことばをこそ、私たちは、どんなことがあっても確信しとおさなければなりません。なぜなら、これこそ私たちの祈りの土台だからです。

私たちのイエス様は、くりかえしくりかえし、「わたしである」「わたしである」「わたしである」と言われました。聖書にはつぎのような箇所がくりかえしでできます。

「わたしは道そのものである」。

「わたしは真理そのものである」。

「わたしはいのちそのものである」。

「わたしはいのちのパンそのものである」。

「わたしはいのちの水そのものである」。

「わたしは天国に行く道の門そのものである」。

「わたしはよみがえりそのものである」。

「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです」。

(ヨハネ 14・6)

「わたしがいのちのパンです」。

(ヨハネ 6・35)

「わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渴くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます」。(ヨハネ 4・14)

「わたしは門です。だれでも、わたしを通つてはいるなら、救われます」。

(ヨハネ 10・9)

「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです」。

(ヨハネ 11・25)

主はこれらのことばをとおして、ご自身を現わされたのです。

祈りのなかで、私たちは「主よ。あなたこそすべてにまさる主です」と告白するべきです。

すべてがうまくいかず、八方ふさがりで、のがれ道さえも見えなくなったときには、あなたの

願いを主に申しあげるだけではなく、「主よ。あなたこそすべてにまざる主、王の王、主の主です」と告白しましょう。

主イエス様の名は、すべての名にまさる名です。すべての力は主イエス様に与えられています。そして、まず、これらの事実が祈りのなかで言いあらわされなければなりません。そうしてはじめて、私たちは、自分の問題や悩みを心から言いあらわすことができるのです。

「あなたがたの父なる神は、あなたがたがお願いする先に、あなたがたに必要なものを知っておられるからです。」
(マタイ 6・8)

イエス様は、私たちがなにごとかを願うよりもさきに知っておられます。それでもやはり、祈りは必要です。しかし、それはイエス様になにかを教えてさしあげるためではありません。なぜならイエス様は、すべてのことをとくにごぞんじだからです。ですから私たちの祈りは、まず私たちがイエス様と結びついていることをあらわす告白であるべきです。そして祈りは、イエス様が偉大なおかたであり、すべての權威をもっておられることを確信している告白であり、私たちの信頼の証でもあるべきです。

6 イエス様の祈りから学ぶ

イエス様は、ご自分の地上でのご生涯をとおして、真剣な祈りの必要性を私たちに示してくださいました。

このころ、イエスは祈るために山に行き、神に祈りながら夜を明かされた。

(ルカ 6・12)

さて、イエスは、朝早くまだ暗いうちに起きて、寂しい所へ出て行き、そこで祈っておられた。

(マルコ 1・35)

私たちの主、イエス様は完全なおかたでした。しかしそれにもかかわらず、イエス様は多くの時間を祈るために使われました。忙しすぎることは祈る時間がない理由にはなりません。イエス様は一日中、おおぜいのひとの相手をなさいました。ですから自分のことを考えておられる時間などなかったのです。いつも多くのひとびとがでいりしていたので、休む時間もないありさまでした。

群衆を帰したあとで、(イエスは)祈るために、ひとりで山に登られた。夕方になったが、まだそこに、ひとりでおられた。

(マタイ 14・23)

イエス様に助けていただきたいひとびとはたくさんいましたから、そのひとびとのためにしなければいけないことはいっぱいありました。しかしイエス様にとっていちばんたいせつなことは祈りでした。

しかし、イエスのうわさは、ますます広まり、多くの人の群れが、話を聞きに、また、

病気を直してもらいに集まって来た。しかし、イエスご自身は、よく荒野に退いて祈っておられた。

(ルカ 5・15、16)

なぜイエス様は、集まってくるひとびとをよそに、荒野で祈っておられたのでしょうか。

祈りこそ、すべてにまさってたいせつなことだからです。そしていちばんたいせつなことのために、まず時間が使われなければならないのです。

祈る者は、なにも失わないのです。祈る時間がないと考えているひとびとは、まちがっています。私たちの主、イエス様は、忙しければ忙しいほどますます祈られたのでした。

そこでイエスは彼らに、「さあ、あなたがただけで、寂しい所へ行つて、しばらく休みなさい。」と言われた。人々の出入りが多くて、ゆっくり食事する時間さえなかったからである。

(マルコ 6・31)

イエス様はいそがしくて、食事をする時間もないほどでした。しかしイエス様は祈りのためにはなにをおいても時間をおつくりになり、それもしばしば長い時間祈られました。私たちがもし「真剣な祈りがなくてもなんとかやっていける」と考えているようなら、イエス様は私たちをおもちいになることができます。

7 主のお約束を信じて祈りつつける

祈ることをとおして、私たちは主ご自身に近づくのです。私たちは主ご自身が私たちに与えてくださった約束によって、主に近づくのです。「主よ。あなたが約束してくださいましたことに感謝いたします。あなたはかならず約束を守ってくださいるから感謝いたします」。これこそが私たちが祈るときに心がまえでなければなりません。

小切手を持つて銀行に行くとき、私たちはとうぜんそれとひきかえにお金がもらえるものと期待します。それとおなじように、私たちは期待をもって祈らなければなりません。主はかならず答えてくださいます。「私は祈り願ったものを、かならずいただける」。この確信こそ、私たちの信仰生活の特徴となるべきです。

聖書にはまた、「祈りがさまたげられる可能性」についても書かれています。

それは、あなたがたの祈りが妨げられないためです。

(Ⅰペテロ 3・7)

また聖書には、ひとびとの心にまかれたものを悪魔がきて奪っていくことも書かれています。「御国のことばを聞いても悟らないと、悪い者が来て、その人の心に蒔かれたものを奪って行きます。」

(マタイ 13・19)

さらに、ダニエル書のなかには、悪魔のはたらきによって、ダニエルの祈りに三週間ものあい

だ答えがなかったことがしるされています。

彼は私（ダニエル）に言った。「恐れるな。ダニエル。あなたが心を定めて悟ろうとし、あなたの神の前でへりくだろうと決めたその初めの日から、あなたのことばは聞かれていたからだ。私が来たのは、あなたのことばのためだ。ペルシャの国の君が二十一日間、私に向かって立っていたが、そこに、第一の君のひとり、ミカエルが私を助けに来てくれたので、私は彼をペルシャの王たちのところに残しておき、……」（ダニエル 10・12、13）

悪魔は私たちの祈りをさまたげようと死にもものぐるいになっています。なんとかして、私たちが本気になって主のお約束に頼りきることを妨害しようとする一生懸命なのです。ですから、悪魔に妨害する機会を与えないためにも、私たちはくりかえしくりかえし、私たちの願いを主に申しあげ、真剣に祈ることがたいせつです。

8 祈りつづけることのたいせつさ

主が罪人の死を望んでおられないことは、聖書のなかにはつきりと書かれています。しかし、だからといって、私たちは自分の家族の救いのために、たったいちどだけ祈ればいいということにはなりません。祈りが聞きとどけられるまで、ずっと祈りつづけることがたいせつです。たとえばジョージ・ミュラーというひとは、ある友人の救いのために、六十年以上も祈りつづけました。また「祈りつづけることのたいせつさ」を、イエス様はふたつの例をとおしてはつきり示し

ておられます。

また、イエスはこう言われた。「あなたがたのうち、だれかに友だちがいるとして、真夜中にその人のところに行き、『君。パンを三つ貸してくれ。友人が旅の途中、私のうちへ来たのだが、出してやるものがないのだ。』』と言ったとします。すると、彼は家の中からこう答えます。『めんどろをかけないでくれ。もう戸締まりもしてしまつたし、子どもたちも私も寝ている。起きて、何かをやることはできない。』あなたがたに言いますが、彼は友だちだからということでききて何かを与えることはしないにしても、あくまで頼み続けるなら、そのためには起き上がって、必要な物を与えるでしょう。』

(ルカ 11・5―8)

けつきよくこのひとは、友人からパンをもらうことができました。なぜでしょうか。ここには、「あくまで頼み続けるなら」、つまりあきらめないでなりふりかまわずくりかえしくりかえし頼みつづけるなら、「そのためには」、つまりその執拗な願いには、ついに「起き上がって、必要な物を与える」と、はつきりとしるされているのです。

もうひとつの例を見てみましょう。

いつでも祈るべきであり、失望してはならないことを教えるために、イエスは彼らにたとえを話された。「ある町に、神を恐れず、人を人とも思わない裁判官がいた。その町に、ひとりのやもめがいたが、彼のところにやって来ては、『私の相手をさばいて、私を守っ

てください。』と言っていた。彼は、しばらくは取り合わないでいたが、後には心ひそかに『私は神を恐れず人を人とも思わないが、どうも、このやもめは、うるさくてしかたがないから、この女のために裁判をしてやることにしよう。でないと、ひっきりなしにやって来てうるさくてしかたがない。』と言った。」主は言われた。「不正な裁判官の言っていることを聞きなさい。まして神は、夜昼神を呼び求めている選民のためにさばきをつけないで、いつまでもそのことを放っておかれることがあるでしょうか。」（ルカ 18・1-7）

このたとえのなかにでてくるやもめは、うるさいほどひっきりなしに頼みました。そしてその結果、彼女の願いどおりになりました。

またこのなかで主は、つぎのように言っておられます。「まして神は、夜昼神を呼び求めている選民のためにさばきをつけないで、いつまでもそのことを放っておかれることがあるでしょうか」。この「夜昼呼び求める」ということは、私たちに、いかに絶えず祈ること、真剣に祈ることがたいせつであることを示しています。

これらふたつの例のほかにも、マタイの福音書の十五章には、カナン人の女が、あきらめないで最後まで願いつづけたようすがしるされています。イエス様は「ああ、あなたの信仰はりっぱです。その願いどおりになるように。」と言われました。このことから、その女が最後まであきらめないで願い求めつづけたことを主が喜ばれたことがわかります。

ひとの祈りの真剣さは、あきらめずにくりかえしくりかえし祈りつづけることにあらわれます。

私たちの主、イエス様もそのように真剣に祈られました。聖書からその箇所を見てみましょう。

イエスは、またも彼らを置いて行かれ、もう一度同じことをくり返して三度目の祈りをされた。
(マタイ 26・44)

パウロもまた、自分の病気をとりさつてほしいと真剣に三度も祈りました。

このことについては、これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました。

(Ⅱコリント 12・8)

私たちもまた、あきらめないで真剣に祈りつづけるべきです。しかし、祈りの答えとして、いつでも私たちの願いどおりになるとはかぎりません。主は、私たちの願いをそのときすぐにはかなえてくださらないかもしれません。私たちには、まだ賜物を受けとるそなえができていないかもしれません。また、主は、私たちが願うものよりもっと良いものを与えるために、私たちの願いを聞きとけてくださらないこともあるのです。

9 私たちは祈りにおける戦いを知っているか

絶えず真剣に祈ることはなによりたいせつです。たとえばあなたの家族のだけれが、不当にも無実の罪で刑務所に入れられていて、いつ死刑になるかわからないとしたらどうか。そういうとき、あなたは「主よ。私のたいせつな家族を救ってください」とたった一回祈っただけ

ですませるでしょうか。まさかそんなことはないでしょう。あなたはきっと、絶えず主に求めつづけるにちがいありません。

ペテロが牢獄に入れられたときも、ちょうどそういう状況だったのです。

こうしてペテロは牢に閉じ込められていた。教会は彼のために、神に熱心に祈り続けていた。

(使徒 12・5)

「熱心に祈り続けていた」。この熱心な祈り、絶えざる祈りというのは、真剣な祈りという意味です。イエス様についてもつぎのように言われています。

イエスは、苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。

(ルカ 22・44)

このみことばのなかで「切に祈られた」と言われているのは、やはり熱心に、真剣に祈られたという意味です。これこそ祈りの戦いです。私たちはこの祈りの戦いを知っているのでしょうか。私たちの主、イエス様はそれを知っておられました。パウロも知っていました。自分のまわりのひとびとの救いをほんとうに心から考える者は、この戦いを知るでしょう。

モーセもこの戦い、つまり祈りの真剣さを知っていました。

今、もし、彼らの罪をお赦しくだされるものなら——。しかし、もしも、かないませんなら、どうか、あなたがお書きになったあなたの書物から、私の名を消し去ってください。

(出エジプト 32・32)

モーセはこのように真剣に祈りました。

パウロもまたこの戦い、つまり祈りにおける真剣さを知っていました。

私には大きな悲しみがあり、私の心には絶えず痛みがあります。もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離されて、のろわれた者となることさえ願いたいのです。

(ローマ 9・2、3)

私たちの主、イエス様ご自身もまたエルサレムのことを思って泣かれました。

キリストは、人としてこの世におられたとき、自分を死から救うことのできる方に向かって、大きな叫び声と涙とをもって祈りと願いをささげ、そしてその敬虔のゆえに聞き入れられました。

(ヘブル 5・7)

イエス様はこの地上におられたとき、「大きな叫び声と涙とをもって祈りと願いをささげてください」とあります。祈りにおけるこの懇願と戦い、失われたたましいの救いのため、またキリスト者の霊的成長のためになされる涙と戦いは、こんにちどうしても必要です。

10 祈りにおける格闘

どうして祈りにおける戦いが必要なのでしょう。主が私たちの祈りにお答えになりたくない

からではありません。そうではなくて、キリスト者の真剣な祈りが不可能を可能にするということを知って、悪魔が攻撃をしかけてくるからです。

私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。

(エペソ 6・12)

ここでは戦いは「格闘」と書かれています。愛するみなさん。この悪霊にたいする格闘は、まず第一に、祈りの格闘なのです。

私たちが、失われたたましいにたいして無関心でいるとき、それは悪魔のわなにおちいりやすい、いちばん危険な状態です。私たちにとって、自分の家族のなかにまだ救われていないひとがいるということが最大の悩みとなっていないなら、そのひとはたとえ救われているとしても、主とのほんとうのつながりを持っていないのです。なぜなら、主はひとつのたましいすら失われることがないようにと望んでおられるからです。

ほんとうにこのことを、深く心に刻んでいただきたいと思います。祈りの格闘なしには、失われたたましいをイエス様の救いのうちに入れることはできません。祈りの格闘なしには、キリスト者は決して霊的に成長しません。

パウロはつぎのように告白しています。

あなたがたのうちにキリストが形造られるまで、私は再びあなたがたのために産みの苦しみをしています。

(ガラテヤ 4・19)

このなかでパウロは「再び」ということばを使っています。なぜでしょうか。パウロはまず最初に、失われたたましいが新しく生まれかわるために祈りの戦いをしました。そしてさらに、このときには、救われたたましいが靈的に成長するために、「再び」祈りの戦いをしているのです。また、主にもちいられたネヘミヤというひとについて、聖書はつぎのように語っています。

私（ネヘミヤ）はこのことばを聞いたとき、すわって泣き、数日の間、喪に服し、断食して天の神の前に祈った。
（ネヘミヤ 1・4）

このことから、ネヘミヤもまた祈りの戦いの必要性を十分に知っていたこと、また実行したことがわかります。

パウロは「私のために、私とともに力を尽くして神に祈ってください。」（ローマ15・30）とっています。日本語で「力を尽くして」と訳されているところは、原語では「格闘」という表現が使われています。

あなたがたとラオデキヤの人たちと、そのほか直接私の顔を見たことのない人たちのためにも、私がどんなに苦闘しているか、知ってほしいと思います。（コロサイ 2・1）

このように、パウロは各地の教会にあてて書いた手紙のなかで、これらの信者のためのかれの祈りを「苦闘」であると言っています。

パウロの同労者であるエパfrasも、祈りの戦いにはげむひとでした。

あなたがたの仲間のひとり、キリスト・イエスのしもべエパfrasが、あなたがたによろしくと言っています。彼はいつも、あなたがたが完全な人となり、また神のすべてのみこころを十分に確信して立つことができるよう、あなたがたのために祈りに励んでいます。

(コロサイ 4・12)

このみことばのなかの「祈りに励んでいます」という部分は原語では「祈りのなかで格闘しています」というふうに書かれています。

みなさんが霊的に成長するためには、このように祈りのなかで格闘するかが必要なのです。私たちのなかのいっただれが、この「祈りにおける格闘」のために自分をささげる用意があるのでしょうか。

エパfrasは祈りのなかで格闘しました。おなじことばは私たちの主についても、もちいられています。

イエスは、苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。

(ルカ 22・44)

これはつまり祈りのなかで戦った、格闘されたということですね。

祈りとはキリスト者の習慣でもなければ一種の義務遂行でもなく、戦いであり、格闘なのです。

11 まことの祈りびとが求められている

すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によつて祈りなさい。そのためには、
絶えず目をさましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。

(エペソ 6・18)

祈りが聞きとどけられるまで祈りつづけるということは、祈りが戦いであることを意味しています。私たちのまわりには、山のような困難が、また多くの解決できない問題があります。だからこそ私たちは、主のまえに立ちつづけ、祈りつづける必要があるのです。

私たちはみな、祈りがいかに必要であるかをよく知っています。私たちはみな、私たちの主が祈りを聞きとどけてくださると確信しています。しかし実際には、ほんのすこししか祈りが聞きとどけられたという経験をしていないかたがたもまた多いのです。それはいったいなぜでしょうか。その理由は、祈りが戦いであることをよく知らないからなのです。

祈りとは戦いです。第一に、目に見えない世界や悪霊にたいする戦いです。第二に、目に見える世界、つまり自分の楽な生活にたいする戦いです。自分が楽をしたいという気持ちにたいして戦いを宣言し、自分かつてでわがままな気持ちを捨てようとしてはじめて、キリスト者は霊的に成長することができのです。

アブラハムは神のみ心になつた祈りびとでした。かれはソドムという町のために神に懇願し

ました。かれは七回も、くりかえし自分の願いを主のまえに申しあげたのです。かれは主のまえに立ちつづけました。このアブラハムの断固として変わらないたいど、べつの言葉で言えば熱心な執拗さを主は喜ばれたのです。そしてその結果アブラハムの甥のロトも救いに導かれました。

アブラハムは近づいて申し上げた。「あなたはほんとうに、正しい者を、悪い者といっしよに滅ぼし尽くされるのですか。もしや、その町の中に五十人の正しい者がいるかもしれませんか。ほんとうに滅ぼしてしまわれるのですか。その中にいる五十人の正しい者のために、その町をお赦しにはならないのですか。正しい者を悪い者といっしよに殺し、そのため、正しい者と悪い者と同じようになるというようなことを、あなたがなさるはずがありません。とてもありえないことです。全世界をさばくお方は、公義を行なうべきではありませんか。」主は答えられた。「もしソドムで、わたしが五十人の正しい者を町の中に見つけたら、その人たちのために、その町全部を赦そう。」アブラハムは答えて言った。「私はちりや灰にすぎませんが、あえて主に申し上げるのをお許しください。もしや五十人の正しい者に五人不足しているかもしれません。その五人のために、あなたは町の全部を滅ぼされるでしょうか。」主は仰せられた。「滅ぼすまい。もしそこにわたしが四十五人を見つけたら。」そこで、再び尋ねて申し上げた。「もしやそこに四十人見つかるかもしれません。」すると仰せられた。「滅ぼすまい。その四十人のために。」また彼は言った。「主よ。どうかお怒りにならないで、私に言わせてください。もしやそこに三十人見つかるかもしれません。」主は仰せられた。「滅ぼすまい。もしそこにわたしが三十人を見つけたら。」

彼は言った。「私があえて、主に申し上げるのをお許しください。もしやそこに二十人見つかるかもしれません。」すると仰せられた。「滅ぼすまい。その二十人のために。」彼はまた言った。「主よ。どうかお怒りにならないで、今一度だけ私に言わせてください。もしやそこに十人見つかるかもしれません。」すると主は仰せられた。「滅ぼすまい。その十人のために。」

（創世記 18・23～32）

現代、私たちが生きている世界は、聖書にあるソドムそのものです。この世は恐ろしいさばきの日まで、しばらくたもたれていくにすぎません。ですからこの世には、ヤコブがしたように「私はあなたを去らせません。私を祝福してくださいださらないければ。」（創世記 32・26）と懇願し、祈るひとびとがなにより必要なのです。「私の家族、友だち、知りあいのひとを救ってくださいさらないければ、私はあなたを去らせません」と懇願するひとびとが必要なのです。

エリヤという預言者は、主が雨を降らせてくださるということを知っていました。しかしかれは、そのためにくりかえし祈らなければなりませんでした。最初に祈ったとき、かれはつぎのよきな答えを聞かされました。「なんにも見えません」。しかしエリヤはあきらめませんでした。かれは召使に「もういちど行きなさい」と言いました。それだけではなく、七回もおなじことをくりかえました。すると雨が降りはじめたのです。

つぎのみことばを見ると、エリヤも、私たちとおなじようなひとであつたことがわかります。

エリヤは、私たちと同じような人でしたが、雨が降らないように祈ると、三年六か月の

間、地に雨が降りませんでした。そして、再び祈ると、天は雨を降らせ、地はその実を实
らせました。
(ヤコブ 5・17、18)

「エリヤは、私たちと同じような人でしたが……」、つまり、かれもなにをどのように祈ったらいいかわからなかったのです。しかしかれは聖霊の導きに従う用意がありました。その結果、かれは真剣に祈ったのです。エリヤは真剣に祈ることがいかにたいせつかをよく知っていただけではなく、実際にそうしたので、あふれるばかりの恵みの雨を降らせていただいたのです。

このあふれるばかりの恵みを体験するために、ヤコブは私たちに「おたがいに祈りあいなさい」とすすめているのです。

エリヤの主は私たちの主です。この主は、きょうも、あふれるばかりに豊かな恵みをふりそそぎたいと望んでおられます。しかしエリヤのように、祈りが聞きとどけられるまで祈りつづけるひとはどこにいますでしょうか。主は、私たちが主に多くのことを期待し、大いなることを求めることを望んでおられるのです。

祭司としての奉仕



クラーク博士は「Boys be ambitious. Christ!!」少年キリストにあつて大志を抱けと言った。
ところが大切な「Christ」が抜け落ちたまま伝わっている。
北海道パイブル・キヤンペ。

キリスト者はその生活のなかで、いつも「主はなにを望んでおられるのだろうか。主に喜ばれることはいったいなんだろうか。主がいちばんたいせつにしておられることはなんだろうか」という疑問に直面します。それをたずね求めるために、主は私たちに「絶えず祈れ」と呼びかけておられます。主の恵みによって「祈りのひと」になりましょう。そうすれば私たちは、まったくべつのひとに生まれ変わることができるのです。それを見て、私たちの家族や友だちも変わりますし、それだけでなく、私たちの周囲の環境すら変わってしまうのです。

きっとあなたは「そうなることが私の願いです。私も祈りのひとになりたい」と言うでしょう。ではいったいどうしたら、「祈りのひと」になることができるのでしょうか。

イエス様はあらゆる時代をとおして、もっとも偉大な「祈りのひと」でした。イエス様が十字架にかかられたとき、イエス様の横でやはりはりつけの刑に処されていた犯罪人のひとりはいこう言いました。

イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときには、私を思い出してください。

(ルカ 23・42)

みなさん、これこそが祈りです。このようにイエス様とともに語ることこそが祈りです。祈りとはイエス様と語りあうことです。

犯罪人は「イエスさま。私を思い出してください」と祈りました。そしてイエス様は、この祈りに答えて、つぎのように言われました。

「あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」

(ルカ 23・43)

「あなたは救われた」と、イエス様は言われたのです。なぜ犯罪人は救われたのでしょうか。

なぜなら犯罪人は「私は罪人だ。罪のために死ななければならぬ。私は滅びるのだ」ということを知っていたからです。それだけでなく、犯罪人は「イエス様は私の罪、私のわがままを赦し、私を救うことがおできになるからだ」ということも知っていたのです。だからこそ犯罪人はイエス様に祈ったのです。「イエスさま。私を思い出してください」と。

イエス様はこの犯罪人の祈りを心にとめられ、あわれにお思いになりました。そしてその祈りは聞かれ、犯罪人は恵みによって救われたのです。

私たちはみな、「私の罪は赦された」と確信しているでしょうか。もしまだ確信していないかたがおられたら、きょう、この犯罪人が祈ったように、イエス様に祈ってください。

「主よ。私を思いだしてください。私は罪人です」。

「主よ。私を思いだしてください。私は悩みのなかにいます」。

「主よ。私を思いだしてください。私はのがれ道を見つけることができません」。

「主よ。私を思いだしてください。私はあなたの喜びと満足を心から願っています」。

これらの祈りに、イエス様はかならず答えてくださいます。イエス様はまちがいなく答えてくださいます。イエス様はいままで何千万人、何億人ものひとびとに答えてくださったのですから、あなたにもかならず答えてくださいます。

また、あなたがすでにイエス様を受け入れているとしても、やっぱり祈ってください。

「主よ。私を思いだしてください。私にはほんとうの喜びがありません」。

「主よ。私を思いだしてください。私はまだ祈りのひとではありません」。

「主よ。私を思いだしてください。私をみ心のとおりに実を結ぶ者としてください」。

あなたが自分の計画や思いを捨てざるなら、イエス様はあなたに答えてくださいます。

イエス様はもつとも偉大な「祈りのひと」です。そのイエス様は、あなたのうちでみ心のままに自由に祈ってくださいることができるようか。あなたは、イエス様が自由に祈れるように、あなたの意思やあなたの計画をすべてイエス様にあけわたしているでしょうか。

あなたが祈らないなら、イエス様はどうしてあなたを祝福することがおできになるでしょうか。祈らないひとは、イエス様に祝福していただく機会を自分のほうから捨てさっているのです。

じつは、この原稿を書いているとき、ずいぶん昔に私が書いたメモができました。それは、のちにがんで天国に召されることになる娘のリンデが生まれたとき、いろいろなかたがたが送ってくださった手紙のなかから、私がぬき書きしたメモだったのです。それらの手紙には、みなさんがリンデのために祈ってくださいることが書かれていました。

リーベンセラ―宣教団の指導者、リンハルト・フラウム牧師は、つぎのように書いてくださいました。「私たちはこの子が主の名誉、あなたがたの喜び、ひとびとの祝福となることを心から祈っています」。アイドリンゲン・ムッターハウスのゲアトルート・ロロ姉妹はこう書いてくださいました。「主がこの子を祝福してください、主のために多くの豊かな実を結ぶひととしてく

ださいますように祈っています」。そしてウィースバーデンの伝道者エミール・ヘンスさんは、「この子が主の恵みによつてはやく救われますように。それから主のしもべとして、祝福された奉仕をなすことができますように祈ります」と書きおくってくださいました。

これらの多くのかたがたの祈りは、その後、すべて成就されました。この地上でのいのちの最後の瞬間まで、イエス様のために実を結ぶことはリンデの心からの願いでした。私はこれらの手紙の祈りのメモを読みかえしたとき、リンデのために主にあらためて感謝せずにはいられませんでした。心から主を礼拝せずにはいられませんでした。(編集注・リンデの生涯についてはG・ベック編・著「実を結ぶ命」をご参照ください)

よく「キリスト教も仏教も同じではないか」と言うかたがおられます。たしかに仏教でも祈ったり拝んだりします。しかしそれらは木や石を拝むのです。なんとむなしいことでしょうか。私たちの主は、生きておられる神です。これこそ私たちの大きな喜びです。

ではこれから、「祭司としての奉仕」について、出エジプト記を中心にこいっしよに考えてみましょう。聖書の「祭司」ということばは、日本ではこれにぴったりの概念がないので、すこしわかりにくいようですが、聖書にもとづいて、「祭司」としての奉仕をよく見てみましょう。主なる神は、「祭司としての民」、つまり「まことの祈りびとである民」を持つと思われ、まづイスラエルの民を選ばれました。

「今、もしあなたがたが、まことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら、あ

あなたがたはすべての国々の民の中にあつて、わたしの宝となる。全世界はわたしのものであるから。あなたがたはわたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。これが、イスラエル人にあなたの語るべきことばである。」
(出エジプト 19・5、6)

また聖書のつぎの部分では、主はイスラエルの民のなかでも、とくにアロンとかれの息子たちを「祭司として主に仕えさせるために」選びわけられたことがわかります。

「あなたは、イスラエル人の中から、あなたの兄弟アロンとその子、すなわち、アロンとその子のナダブとアビフ、エルアザルとイタマルを、あなたのそばに近づけ、祭司としてわたしに仕えさせよ。」
(出エジプト 28・1)

ここに書かれていることは、じつは現代のすべてのキリスト者にもあてはまるのです。

あなたがたも生ける石として、霊の家に築き上げられなさい。そして、聖なる祭司として、イエス・キリストを通して、神に喜ばれる霊のいけにえをささげなさい。

しかし、あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです。

(Ⅰペテロ 2・5、9)

また、「祭司」についての聖句としては、つぎの箇所もよく知られています。

また、私たちを王国とし、ご自分の父である神のために祭司としてくださった方である。
キリストに栄光と力とが、とこしえにあるように。アーメン。
(黙示 1・6)

ここには、「私たちを祭司としてくださった方であるキリスト、キリストに栄光と力とが、とこしえにあるように」とあります。また「祭司」についてつぎのようにも書かれています。

彼らは、新しい歌を歌って言った。「あなたは、巻き物を受け取って、その封印を解くのにふさわしい方です。あなたは、ほふられて、その血により、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から、神のために人々を贖い、私たちの神のために、この人々を王国とし、祭司とされました。彼らは地上を治めるのです。」
(黙示 5・9、10)

これらの聖句からもわかるように、「仕えるために救われる」というのが聖書の基本原則です。そして、主に喜ばれる奉仕とは、「祭司としての奉仕」なのです。キリスト者はだれでも「祭司」として、つまり「祈りびと」として主に仕えるために召しだされています。この「祭司としての奉仕」とはなんでしょうか。またどうしてそんなにたいせつなんでしょうか。それらについて、七つの項目をとおして考えていきましょう。

1 すべてのひとは主に出会い、主に結びつけられなければならない

すべての人間は、主なる神に結びつけられなければなりません。これこそが「祭司」のたいせつなつとめであり、「祭司」としての奉仕の第一番めです。神と人間のあいだには、橋わたしができないほどの深いみぞがよこたわっています。そして主は、その「破れ口を修理する者」、つまり多くのひとびとの身代わりとして主のまえに悔い改め、心から恵みを願い求める者、祭司を探しておられるのです。

エゼキエルの時代には、この「祭司」としてのつとめをする者はひとりもいませんでした。

「わたしがこの国を滅ぼさないように、わたしは、この国のために、わたしの前で石垣を築き、破れ口を修理する者を彼らの間に捜し求めたが、見つからなかった。」

(エゼキエル 22・30)

しかしモーセの時代にはモーセがこのつとめを行なっていたために、ひとびとは滅びからまぬがれることができました。

それゆえ、神は、「彼らを滅ぼす。」と言われた。もし、神に選ばれた人モーセが、滅ぼそうとする激しい憤りを避けるために、御前の破れに立たなかつたなら、どうなっていたか。

(詩篇 106・23)

すべてのひとは主に出会い、主に結びつけられなければなりません。このことこそがたいせつ

なのです。まだイエス様を知らないあなたの家族のひとりひとり、あなたの親戚、あなたの友だち。これらのひとびとは一日もはやく主に出会い、主と結びつく必要があります。では、そのためにはいったいどうしたらいいのでしょうか。

ただ主ご自身の奇蹟によってのみ、ひとは主に出会い、主と結びつくことができます。そして私たちがほんとうに祈り、犠牲をはらうときにだけ、主は奇蹟を行なってくださいます。愛するみなさん。私たちはこの犠牲をはらう用意ができていますので、祈るのでしょうか。

「祭司」としてのつとめは、まず、祈ることです。祈ることはどうしてそんなにたいせつなのでしょう。それはひとびとが神と結びつけられなければならないからです。

2 神のご臨在があきらかにされなければならない

このように、祭司としてのつとめ、つまり祈ることは、なによりもたいせつです。それは「すべてのひとは主に出会い、主に結びつけられなければならない」からです。そしてまた、祈りをおして「神のご臨在があきらかにされなければならないから」です。これが「祭司」としての奉仕のふたつめです。

真剣な祈りがなされるときにだけ、神のご臨在が啓示されます。主は奇蹟を行ないたいと思っておられ、ご自身をあきらかにしたいと願っておられます。またひとびとを助け、救い、解放したいと思っておられます。そして主は、真剣な祈りがなされるときにだけ、その答えとしてこれらのことをしてくださるのです。

あらゆる時代をとおして、主の願いと目標はつぎのようなものです。

そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってください。」（黙示 21・3、4）

ひととともにある。人間とともに住む。ご自身のご臨在があきらかになる。これこそが主の心からの願いです。

初代教会は、祈りの群れでした。そしてこの祈りの群れのなかに未信者がはいったとき、かれらは「主なる神がこのひとびとのまんなかにおられる」と言わずにはいられなかったのです。主はたして私たちのうちに、また私たちをとおして、ご自身を啓示なさることがおできになるのでしょうか。私たちのうちには、主が働かれるよちがあるのでしょいか。主が私たちの生活を支配しておられるのでしょうか。ひとびとは、あなたと出会うことをとおして主にふれているのでしょうか。

3 主イエス様が証しされなければならない

祭司としてのつとめはなぜたいせつなのでしょう。三つめの答えは「イエス様が証しされなければならないから」です。

イスラエルの民は、主に導かれてエジプトから旅立ちました。約束の地にいたるまでのその旅

のあいだじゅう、「契約の箱」を運ぶのはレビ人の役目でした。祭司とレビ人の奉仕は、この「契約の箱」と密接な関係がありました。この「契約の箱」をとおして、主はご自身の民であるイスラエルのひとびとに語られました。この箱はまた「あかしの箱」とも呼ばれました。そしてこの「契約の箱」は、主のご臨在を現わしていました。レビ人は主のご臨在を現わす箱を運んだのです。愛するみなさん、私たちの使命もまた「主のご臨在を運ぶ」ことです。

あるときペリシテ人がこの箱を奪ったことがありました。ところが主の怒りとろいがかれらのうえにのぞんだので、かれらはいそいでこの箱をイスラエルに返しました。

この「契約の箱」があるところには、いつもなにかが起りました。つまり主のご臨在が、あるいは恵みのかたちで、あるいはさばきのかたちで現われたのです。そしていまもイエス様が証しされる場所では、かならずなにかが起こります。そのときひとびとは光にたいして心を開き、悔い改めて主の救いを経験するか、それともますます心をかたくなにするかのどちらかです。

イエス様はこの地上におられたとき、隠れていることができませんでした。ですから悪霊は、はるか遠くからイエス様を見て悲鳴をあげました。「私たちを滅ぼさないでください。私たちを地獄に追いやらないでください」と。

ヨハネはイエス様の証しびとでした。かれは黙っていることができませんでした。このヨハネがさびしいバトモスという島に追放されたのは、まさにイエス様を証したからです。

主と結びついている信者ひとりひとりのまいにちの生活をとおして、イエス様が証しされます。

4 主は器を必要としておられる

祭司としての奉仕はどうしてそんなにたいせつなのでしょう。いままで見てきたことをまとめてみましょう。ひとつには「ひとびとが生けるまことの神と結びつかなければならぬから」です。また「神のご臨在があきらかにされなければならぬから」です。そして「主イエス様が証しされなければならないから」です。

それではこれから四つめの答えについて考えてみましょう。それは「主は器を必要としておられる」ということです。

まえにも書きましたとおり、神のご計画はイスラエルぜんたいを「祭司」の王国にしよう、ということでした。もういちどつぎの聖書の箇所を見てみましょう。

「今、もしあなたがたが、まことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら、あなたがたはすべての国々の民の中にあつて、わたしの宝となる。全世界はわたしのものがあるから。あなたがたはわたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。これが、イスラエル人にあなたの語るべきことばである。」
(出エジプト 19・5、6)

ところがイスラエルは国民としては挫折してしまいました。それでアロンとかれの家族だけが任命されたのです。しかしそのアロンもまたまどわされてしまい、その結果イスラエルの民をまどわしました。このことについては出エジプト記三十二章にくわしく書かれています。

民はモーセが山から降りて来るのに手間取っているのを見て、アロンのもとに集まり、

彼に言った。「さあ、私たちに先立って行く神を、造ってください。私たちをエジプトの地から連れ上ったあのモーセという者が、どうなったのか、私たちにはわからないから。」それで、アロンは彼らに言った。「あなたがたの妻や、息子、娘たちの耳にある金の耳輪をはずして、私のところに持って来なさい。」そこで、民はみな、その耳にある金の耳輪をはずして、アロンのところに持って来た。彼がそれを、彼らの手から受け取り、のみで型を造り、鑄物の子牛にした。彼らは、「イスラエルよ。これがあなたをエジプトの地から連れ上ったあなたの神だ。」と言った。アロンはこれを見て、その前に祭壇を築いた。そして、アロンは呼ばわって言った。「あすは主への祭りである。」そこで、翌日、朝早く彼らは全焼のいけにえをささげ、和解のいけにえを供えた。そして、民はすわっては、飲み食いし、立つては、戯れた。

モーセは向き直り、二枚のあかしの板を手にして山から降りた。板は両面から書いてあった。すなわち、表と裏に書いてあった。板はそれ自体神の作であった。その字は神の字であって、その板に刻まれていた。ヨシユアは民の叫ぶ大声を聞いて、モーセに言った。「宿営の中にいくさの聲がします。」するとモーセは言った。「それは勝利を叫ぶ声ではなく、敗北を嘆く声でもない。私の聞くのは、歌を歌う声である。」宿営に近づいて、子牛と踊りを見るなり、モーセの怒りは燃え上がった。そして手からあの板を投げ捨て、それを山のふもとで砕いてしまった。それから、彼らが造った子牛を取り、これを火で焼き、さらにそれを粉々に碎き、それを水の上にまき散らし、イスラエル人に飲ませた。モーセ

はアロンに言った。「この民はあなたに何をしたのですか。あなたが彼らにこんな大きな罪を犯させたのは。」アロンは言った。「わが主よ。どうか怒りを燃やさないでください。あなたが自身、民の悪いのを知っているでしょう。彼らは私に言いました。『私たちに先立って行く神を、造ってください。私たちをエジプトの地から連れ上ったあのモーセという者が、どうなったのか、私たちにはわからないから。』それで、私は彼らに、『だれでも、金を持っている者は私のために、それを取りはずせ。』と言いました。彼らはそれを私に渡したので、私がこれを火に投げ入れたところ、この子牛が出て来たのです。」モーセは、民が乱れており、アロンが彼らをほうっておいたので、敵の物笑いとなっているのを見た。そこでモーセは宿営の入口に立って「だれでも、主につく者は、私のところに。」と言った。するとレビ族がみな、彼のところに集まった。そこで、モーセは彼らに言った。「イスラエルの神、主はこう仰せられる。おのおの腰に剣を帯び、宿営の中を入口から入口へ行き巡って、おのおのその兄弟、その友、その隣人を殺せ。」レビ族は、モーセのことばどおりに行なった。その日、民のうち、おおよそ三千人が倒れた。そこで、モーセは言った。「あなたがたは、おのおのその子、その兄弟に逆らっても、きょう、主に身をささげよ。主が、きょう、あなたがたに祝福をお与えになるために。」

(出エジプト 32・1―6、15―29)

このなかで「だれでも、主につく者は、私のところに」というモーセの言葉に、「レビ族がみ

な、彼のところに集まった」と書かれています。このみことばのとおり、イスラエルの民ぜんたいが主の命じられたことにそむいたとき、主のがわに立ったのはレビ人たちでした。そしてこのとき、「おのおの腰に剣を帯び、宿営の中を入口から入口へ行き巡って、おのおのその兄弟、その友、その隣人を殺せ」という恐ろしい命令がレビ人たちに与えられました。

このようにイスラエルの民は、ぜんたいとしては挫折してしまったので、そのなかのレビ人だけが器としてもちいられたのです。かれらには自発的に主にもちいられるそなえがあつたのです。

「このとき、あなたがたは、わたしが、レビとのわたしの契約を保つために、あなたがたにこの命令を送つたことを知ろう。――万軍の主は仰せられる。――わたしの彼との契約は、いのちと平和であつて、わたしは、それらを彼に与えた。それは恐れであつたので、彼は、わたしを恐れ、わたしの名の前におののいた。彼の口には真理の教えがあり、彼のくちびるには不正がなかつた。平和と公正のうちに、彼はわたしとともに歩み、多くの者を罪から立ち返らせた。」

「見よ。わたしは、わたしの使者を遣わす。彼はわたしの前に道を整える。あなたがたが尋ね求めている主が、突然、その神殿に来る。あなたがたが望んでいる契約の使者が、見よ、来ている。」と万軍の主は仰せられる。だが、この方の来られる日に耐えられよう。だが、この方の現われるとき立つていられよう。まことに、この方は、精練する者の火、布をさらす者の灰汁のようだ。この方は、銀を精練し、これをきよめる者として座に着き、レビの子らをきよめ、彼らを金のように、銀のように純粹にする。彼らは、主に、義のさ

さげ物をささげる者となり、……

(マラキ 2・4―6、3・1―3)

イスラエルの民は、みな主の救いにあずかっていました。しかし妥協してしまったので、主はイスラエルを民ぜんたいとしては器としてもちいることができなくなってしまうわれたのです。

いまの時代の状態もこの時代とよく似ています。多くの信者がいます。しかし器として主にもちいられる者のかずはごくわずかです。なぜでしょうか。多くの信者は祭司としての奉仕をしなからです。主のまえに立ちつづけることも、祈りつづけることも、主がなさる大きなみわざに期待することも忘れてしまっているからであり、犠牲をはらいたくないと思っているからです。使徒パウロの時代にもやはりおなじような状態だったようです。というのはパウロは当時の信者たちのために、かれらが自分の使命に気がつき、召しにふさわしく歩むようにと心をつくして祈っているからです。もし当時の信者たちがみんな真剣な祈りびとであったなら、パウロはこんなにも真剣にかれらのために祈る必要はなかったでしょう。

愛するみなさん、いまの状態に満足などしないようにこころがけましょう。破壊と墮落のまっただなかにあつて、主はいまも、喜んでみ心になつた祈りびとなるひとびとを探し求めておられるのです。

5 祭司のつとめをとおして、いのちがわかちあわれる

祭司の奉仕はなげたいせつなんでしょうか。五つめの答えは、そのことをとおしていのちがわ

かちあわれるからです。

たいせつなのは聖書の知識ではありません。なによりもたいせつなのは、「イエス様のいのち」がひとびとの心をとらえることができるかどうか、ということです。祈りがなされると、ひとは回心を経験します。祈りがなされると、いのちの泉があふれます。祈りがなされると、ひとはイエス様をよりよく知るようになります。いのちがわかちあわれるようになります。

まごころから祈っていない教会は、みじめで実りがありません。まことの祈りがなされていない教会は、あいまいになり、いのちよりも形式をたいせつにするようになってしまします。まことの祈りがなされていない教会は、もはやイエス様によってもちいられる器となることができず、山のうえにある光でもなく、証しにもなりえないのです。

6 信者は戦いのなかに投げこまれた者である

祭司としての奉仕はどうしてそんなにたいせつなのでしょう。六つめの答えは「信者は戦いのなかに投げこまれた者だから」です。

イエス様と結びついている者は、この地上では異分子です。しかし、イエス様により頼む者は決して孤独ではありません。イエス様により頼む者は、ゆるぎない土台のうえに立っているからです。そのひとはまわりの状況にすこしも影響されない、ゆるぎない喜びを知っています。そのひとはあらゆる理性を超越した神の平和を経験しています。

私たちの戦いは、いろいろな思想や人間にたいするものではありません。私たちの戦いは、こ

の世をこえた力、悪霊の世界にたいして行なわれるのです。

私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。

(エペソ 6・12)

こんにち、信者でさえなんと無関心に、また怠慢になっていることでしょう。多くのひとが妥協してしまい、ほかのひとを主のみもとに導くどころではないことは驚きです。

モーセとパウロは、この戦いそのものを経験しました。かれらは断固として自分中心の行動をしませんでした。そしてそのことをとおして、まことの祈りびとになりました。

モーセはつぎのように祈りました。

今、もし、彼らの罪をお赦しくだされるものなら——。しかし、もしも、かないませんなら、どうか、あなたがお書きになったあなたの書物から、私の名を消し去ってください。

(出エジプト 32・32)

そしてパウロはつぎのように祈りました。

もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離されて、のろわれた者となることさえ願いたいのです。

(ローマ 9・3)

ここには自分のことをかえりみない献身、どんな犠牲でもはらう覚悟、徹底した奉仕があらわ

れています。つまりイエス様の霊は、モーセをとおして、またパウロをとおして祈ることができるのです。

では私たちはどうでしょうか。主なる神の霊は私たちのうちでいたいどれほどのよちをしめているのでしょうか。主は私たちをおもちいになることができるのでしょうか。

7 キリスト者の成長のためのただひとつの道

祭司としての奉仕はなげたいせつなのでしょうか。その七つめの答えは、「それがキリスト者の成長のためのただひとつの道だから」です。

「霊的なひと」とはどんなひとでしょうか。自分の力ではなにひとつできないひと、またしようと思わないひとです。かれらは徹頭徹尾イエス様により頼むしかないということをよく知っています。また「霊的なひと」は信仰によって歩み、目に見えるものによっては動かされません。

イスラエルの民は荒野を旅したとき、目に見えるものに頼って歩きました。かれらはなにか目に見えるものがほしかったのです。それでアロンはかれらのために金の子牛をつくりました。しかしモーセは「霊的なひと」でしたから、なにひとつ見たいとは思わなかったのです。

モーセについては聖書にこう書かれています。

信仰によって、彼は、王の怒りを恐れなくて、エジプトを立ち去りました。目に見えない方を見るようにして、忍び通したからです。

(ヘブル 11・27)

またペテロは信者たちにつきのよう書きおくらせています。

あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどつています。

(Ⅰペテロ 1・8)

目に見えるものにより頼んでいては、祭司としてもちいられることができません。

イスラエルの民は目に見えるものを求めました。そして「私たちに神々をつくってください」と叫びました。それがどういうことを意味するか、かれら自身は自覚していなかったでしょう。アロンは妥協してしまい、悪魔はこおどりに喜びました。

このとき、イスラエルの民はみな、自分たちが持っていた金の耳輪を提供しました。たしかにかれらも犠牲をはらいはしました。しかしそれは主のための犠牲ではありませんでした。かれらが提供した金の耳輪から金の子牛がつくられました。そしてイスラエルの民はこの金の子牛を崇拜しました。つまり神の民はもう主の証しびとではなくなってしまったのです。

モーセは、民が乱れており、アロンが彼らをほうっておいたので、敵の物笑いとなつているのを見た。

(出エジプト 32・25)

生けるまことの神の証しびとであったイスラエルの民は敵のものわらいとなつてしまったのです。金はほんとうは主の幕屋をつくるため、つまり主の住まいをつくるためにもちいるべきだつ

たのです。それなのにかれらはそれを使って偶像をつくってしまったのです。悪魔の策略によって金は偶像のために使われてしまいました。そして偶像崇拜とは悪魔崇拜にほかなりません。

そのときこの悪魔の策略を見ぬくことができたのはレビ人、つまり祈りびとだけでした。そしてかれらだけが妥協せずに主に従ったのです。まえにもすこしふれましたが、それはかれらにとつてかたんなことではありませんでした。というのは自分の家族にたいしてさえ戦いを宣言しなければならなかったからです。私たちはこのことをとおして、神がいかなる妥協をもみすごすことができないということを知ることができます。

剣があなたの心さえも刺し貫くでしょう。

(ルカ 2・35)

「自分のいのちを救おうと努める者はそれを失い、それを失う者はいのちを保ちます。」

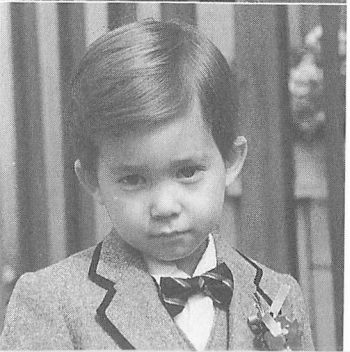
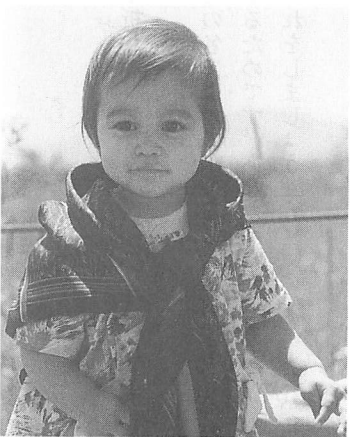
(ルカ 17・33)

主は祈りびとを探し求めておられます。喜んでこのご奉仕に従うそなえのあるひとはだれでしょう。か。犠牲をはらい、みずから犠牲になるそなえのあるひとはだれでしょう。

「主よ。私はここにいます。私をもちいてください」と言うことができるひとは、ほんとうにさ
いわいだと思います。



▲お父さんは一足先に天国へ。
主にあって喜ぶことができる近藤さんご一家。



イエスのみ名によつて祈る

イエス様の愛と恵みに育まれて。
▼由希ちゃん(上)と順ちゃん。

「絶えず祈れ」。「イエスのみ名によって祈れ」。これこそ、いま、キリスト者に与えられているもっともたいせつな主のご命令です。

「わたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましょう。父が子によって栄光をお受けになるためです。あなたがたが、わたしの名によって何かをわたしに求めるなら、わたしはそれをしましょう。」

(ヨハネ 14・13、14)

主は私たちの祈りを聞きとどけたいと思っておられます。たとえどんなに大きな願いでも、まだどんな小さな願いでも、「イエスのみ名によって祈る」なら、かならず聞きとどけられます。イエス様ご自身が、この聖句のなかでそのことをはっきりと約束してくださっているのです。

「イエスのみ名によって祈る」ということは、祈りのおわりに決まり文句として「イエスのみ名によって」とつけ加えることではありません。「イエスのみ名によって祈る」とは主の栄光のために祈ることです。それは私たちに提供されている主なる神の豊かさをくみとることであり、イエス様の代理人として祈ることです。そしてまた、さらにそれ以上の意味でさえあります。パウロは当時の信者たちにつきぎのようになっています。

私は祈っています。あなたがたの愛が真の知識とあらゆる識別力によって、いよいよ豊かになり、あなたがたが、真にすぐれたものを見分けることができるようになりますように。またあなたがたが、キリストの日には純真で非難されるところがなく、イエス・キリストによって与えられる義の実に満たされている者となり、神の御栄えと誉れが現わされ

ますように。

(ピリピ 1・9～11)

これはパウロの証しであると同時に、かれの祈りでもありました。パウロは当時の救われてゐるひとびとのために、このように心をつくして祈りつづけたのです。

「イエスのみ名によって」という表現は、聖書のなかになんどもなんどもでてきます。そのひとつにつきの箇所があります。ここにはペテロとヨハネが「イエスのみ名によって」どのように行動したか、その実例がでています。

ペテロとヨハネは午後三時の祈りの時間に宮に上つて行つた。すると、生まれつき足のきかない男が運ばれて来た。この男は、宮にはいる人たちから施しを求めるために、毎日「美しの門」という名の宮の門に置いてもらつていた。彼は、ペテロとヨハネが宮にはいるうとするのを見て、施しを求めた。ペテロは、ヨハネとともに、その男を見つめて、「私たちを見なさい。」と言つた。男は何かもらえらると思つて、ふたりに目を注いだ。すると、ペテロは、「金銀は私にはない。しかし、私にあるものを上げよう。ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい。」と言つて、彼の右手を取つて立たせた。するとたちまち、彼の足とくるぶしが強くなり、おどりが上がつてまっすぐに立ち、歩きだした。そして歩いたり、はねたりしながら、神を賛美しつつ、ふたりといっしょに宮にはいつて行つた。

(使徒 3・1～8)

ペテロとヨハネはこのように「イエスのみ名によって」、つまり主イエス様の力により頼んで行動したと書いてあります。

「イエスのみ名によって祈る」ためには、なによりもつぎの七つのことがたいせつです。

主のうちにとどまること。

主の支配下にいること。

主の勝利をあきらかにすること。

すべての信者のために祈ること。

十字架につけられること。

聖霊に満たされること。

絶えず祈ること。

この七つの項目について、順をおって考えていきましょう。

1 主のうちにとどまること

「イエスのみ名によって祈る」とは、いったいなにを意味するのでしょうか。

まず第一に、「主のうちにとどまること」が、「イエスのみ名によって祈る」ことの前提です。イエス様のからだの一部となっている者、イエス様と生き生きとつながっている者だけが、「イエス様のみ名によって祈る」ことができるのです。

ひとは罪人としてイエス様のもとに來ると、イエス様のお約束によって自分は受け入れられ

救われていると知ります。そのひとは高められたイエス様と結びついているのです。

パウロはつぎのように書いています。

しかし、主と交われれば、一つ霊となるのです。

(Ⅰコリント 6・17)

私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです。

(Ⅰコリント 12・13)

また、神は、いっさいのものをキリストの足の下に従わせ、いっさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えになりました。教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。

(エペソ 1・22、23)

このように、イエス様に受け入れられている者の罪は赦されています。そのひとはイエス様のからだの一部です。そしてイエス様のみ名はただかしらであるイエス様おひとりだけのものではなく、イエス様のからだの一部であるひとりひとり、からだぜんたいにも属しているのです。このように、かしらと多くの部分とがひとつになって、キリストを構成します。もういちどつぎの聖句を見てください。とてもたいせつなところです。

私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです。

(Ⅰコリント 12・13)

だからこそ、イエス様と生き生きと結びついていることが、イエス様の名によって祈る前提なのです。イエス様はこのことをぶどうの木とその枝というたとえを使って説明されました。「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。」(ヨハネ15・5)とイエス様は言われました。つまり「あなたがたはわたしと結びついている者です」と言われたのです。

キリスト者はイエス様のうちに存在しています。キリスト者はイエス様と結びついています。ちようどぶどうの枝がぶどうの木と結びついているのとおなじように、またからだの部分がかしらと結びついているのとおなじように、そのようにキリスト者はイエス様と結びついているのです。だからイエス様はつぎのように約束してくださったのです。

「あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことがあなたがたにとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます。」

(ヨハネ 15・7)

このように、イエス様のうちにとどまることは主のみ名によって祈るためのたいせつな前提です。私たちはイエス様のからだの一部として祈り、イエス様に属し、結びついている者として祈

なのです。私たちは主のからだの一部、主のからだなる教会の一部であることをゆるされています。そして主のからだなる教会とは、主の満ちておられるところです。ですから私たちは主にたいするおそれと主を崇拝する心をもって祈りましょう。

どうか主があらたに私たちの心の目を開いてくださり、「私たちはイエス様に属している」ということをわからせてくださいますように。

つぎることのない富が、イエス様をおして私たちに提供されています。私たちがイエス様のみに名によって祈るとき、その富は私たちのものとなるのです。

2 主の支配下にいること

「イエスのみ名によって祈る」ことの第二の前提は、「主の支配下にいること」です。

イエス様のみ名による祈りの第一の前提は主のうちにとどまることでした。そして主のうちにとどまるということは、つまり「主の支配下にいる」ということでもあります。

意識してかしらであるイエス様の一部として祈るとき、私たちは「主の支配下にある」者として祈っています。主のご支配を認めるとは、つぎのようなことをとることです。「主よ。私はなにをしたらいいのでしょうか。どうか私に教えてください。私はあなたに従いたいです」。

「自分のことは自分で決めたい、自分の思ったとおりにしたい」と思っているかぎり、私たちは主のうちにとどまってはけません。そういうとき、「イエスのみ名によって祈る」ことは不可能です。そのようなときには、祈りはむなしい形式にすぎなくなってしまうのです。

どんなときにもイエス様が第一とならなければなりません。まいにちまいにち、イエス様のご支配を認め、イエス様を第一として生活することこそがたいせつです。それはつまり、「私たちはもう自分ではなにもできない」ということです。私たちはつぎのように思うべきです。「私は自分ではなにもできない。だからなにがなんでもかしらであるイエス様により頼みたい」。

イエス様の支配下にあるひとびとは、もう自分かつてな願いを祈ることができません。主が望んでおられることしか祈ることができないのです。主の支配下にいるひとびとにとって、イエス様はすべてを超越したおかたなのですから。

つぎの聖句はキリスト者にとって非常にたいせつです。後半はさきほど見たところとかさなっています、もういちど見てみましょう。

また、神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのような偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができますように。神は、その全能の力をキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上においてご自分の右の座に着かせて、すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世ばかりでなく、次に来る世においてもとなえられる、すべての名の上に高く置かれました。また、神は、いっさいのものをキリストの足の下に従わせ、いっさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えになりました。教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。

すべてのもののうえにあるかしらとして主を見上げるとき、私たちはつぎのことを知ることができます。主にとって不可能なことはなにひとつありません。だから、主はかならず私たちの祈りを聞きとどけてくださるのです。私たちが主の支配下にいるとき、私たちの願いは聞きとけられます。私たちのためではなく、主イエス様のために聞きとけられるのです。

イエス様が私たちのうちに内住しておられるだけでは十分ではありません。イエス様が私たちの支配者になられるとき、私たちははじめて「イエスのみ名によって祈る」ことができるのです。

3 主の勝利をあきらかにすること

イエス様のみ名による祈りは、「主の勝利」、また「主の支配」をあきらかにします。というのは、イエス様は私たちのかしら、あらゆる信者のかしらであるばかりでなく、いつさいのもののうえに立つかしらだからです。

また、神は、いつさいのものをキリストの足の下に従わせ、いつさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えになりました。

(エペソ 1・22)

「キリスト」という名まえは、もとは「支配するために油そそがれた者」という意味です。私たちはこのキリストとひとつにされています。そしてかしらにとってからだがたいせつであるように、キリストにとって私たちはたいせつなのです。イエス様はご自身をわかち与え、啓示するために私たちを必要としておられます。イエス様はご自身を啓示する器として、からだを必要とし

ておられるのです。なんとすばらしいことではありませんか。イエス様はご自分おひとりだけで王座につきたい、支配したいと思つてはおられません。イエス様は私たちをご自身の近くにおらせたいと願つておられます。私たちとともに支配したいと思つておられます。

もしひとりの人の違反により、ひとりによつて死が支配するようになったとすれば、なおさらのこと、恵みと義の賜物とを豊かに受けている人々は、ひとりの人イエス・キリストにより、いのちにあつて支配するのです。

(ローマ 5・17)

「イエス・キリストにより、いのちにあつて支配すべきである」。これが主の望んでおられることです。もちろんイエス様は罪人を救いたいと願つておられます。そして罪の赦し、永遠のいのち、神との平和を提供しておられます。けれどもそれだけではないのです。救われた罪人は、イエス様のいのちにあつて、イエス様とともに支配することになるのです。

あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです。

(Ⅰペテロ 2・9)

ここで私たちは、選ばれた種族、つまり主のいのちにあつて「王である祭司」とされている、つまり支配する者であると書かれています。

(イエス・キリストは) また、私たちを王国とし、ご自分の父である神のために祭司とし

てくださった方である。キリストに栄光と力とが、とこしえにあるように。アーメン。

(黙示 1・6)

さらに、パウロはイエス様のからだである教会の使命について、つぎのように書いています。

これは、今、天にある支配と權威とに対して、教会を通して、神の豊かな知恵が示されるためである。

(エペソ 3・10)

主は教会をからだとして、また器としてもちいたいと望んでおられます。そしてからだである教会をとおしてご自身の勝利、ご自身の支配をあきらかにしたいと願っておられます。私たちがイエス様と結びつき、イエス様の支配下におかれていることをとおして、イエス様の勝利があきらかにされなければなりません。そしてその勝利は、私たちがイエス様のみ名によって祈ることをとおして実現されるのです。

イエス様は私たちひとりひとりとおして、ご自分の勝利をあきらかにしたいと願っておられます。そしてそれは、私たちが日々あらたに自分の霊とたましいとからだとを主の支配下におくときにだけ、可能になるのです。權威のもとに立つ者は、權威を持っています。つまり、すべてのもののうえに立つかしらであるイエス様に服従する者には、イエス様の勝利を経験することがゆるされているのです。

4 すべての信者のために祈ること

イエス様のみ名によって祈るということは、また、「すべての信者のために祈ること」です。主のうちにとどまり、生き生きと主に結びついており、意識して自分を主の支配下におくとき、私たちはごく自然に、すべての信者のために祈るようになります。そのとき私たちは、すべての信者とひとつになっているのです。信者ひとりひとりがイエス様の支配に服従するとき、そこにはほんとうの一体感が生まれます。そしてそのように信者がひとつになっていることは、この世にたいする大きな証しです。

ドイツの、またスイスの集会のキリスト者たちは、私たち日本のキリスト集会のみなさんのために熱心に祈ってくれています。かれらは自分たちのためにも、日本のキリスト者たちが祈ってくれることを願っています。このように世界中のすべての信者がひとつになっておたがいに祈りあうことは、ほんとうにたいせつです。なぜならひとりでも一致していない信者がいれば、けっさよく信者ぜんたいがひとつになることができず、ばらばらになってしまうからです。すべての信者がひとつになり、心をひとつにして祈ることは、なによりも強い証しになります。「見よ。かれらはおたがいになんと愛しあっていることだろう」。初代教会を見た未信者たちは、こう言わずにはいられませんでした。

イエスのみ名によって祈ることは、つぎのことを意味しています。私たちはもはやひとりで支配したり、ひとりで治めたいとは思いません。私たちはかしらであるイエス様によって導いていただきたいのです。そのことをおして、私たちは、おなじようにかしらであるイエス様の支配

に服従している、からだのほかの部分とひとつになるのです。

私たちはみな、かしらであるイエス様とはなれていてはイエス様のみ名によって祈ることはできないことをよく知っています。しかしそれだけでは十分ではありません。私たちはつぎのこともおなじようにはつきりと知らなければなりません。つまり心のなかでほかの信者にたいして反対の気持ちを持っているときにも、私たちはイエス様のみ名によって祈ることができないのです。このことは、つぎの聖書の箇所を見るとよくわかります。

「また、もし、あなたの兄弟が罪を犯したなら、行つて、ふたりだけのところで責めなさい。もし聞き入れたら、あなたは兄弟を得たのです。もし聞き入れないなら、ほかにひとりかふたりをいっしょに連れて行きなさい。ふたりか三人の証人の口によって、すべての事実が確認されるためです。それでもなお、言うことを聞き入れようとしなければ、教会に告げなさい。教会の言うことさえも聞こうとしないなら、彼を異邦人が取税人のように扱いなさい。まことに、あなたがたに告げます。何でもあなたがたが地上でつなぐなら、それは天においてもつなげており、あなたがたが地上で解くなら、それは天においても解かれているのです。まことに、あなたがたにもう一度、告げます。もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。」

(マタイ 18・15～20)

これはほんとうにすばらしい主の約束です。

信者がひとつになつていくことは、ほんとうにたいせつなことです。信者がひとつになっているときにだけ、まわりのひとびとも罪から自由になつて解放されることができるようになります。あなたがほかの信者にたいして心のなかで反対の気持ちを持つていけるなら、それがたとえどんなに小さなことであっても、イエス様のみ名によつて祈ることができなくなつてしまいます。私たちはもつとも弱く、もつともきれいな信者とも、ひとつにならなければなりません。羊の群れのなかには、毛がもじゃもじゃしてきたない反抗的な羊もいれば、とことこかつてに好きなほうに走つていつて道に迷つてしまう羊もいます。おなじように信者のなかにも変わったひとがいます。けれどもまさにそのようなひとたちこそ、とくべつに配慮されなければなりません。

私たちはかしらであるイエス様により頼んでいるだけではなく、からだのほかの部分である信者にもより頼んでいるのです。ですからただかしらに服従するだけではなく、おたがいに仕えあうこともたいせつです。

パウロは当時の信者にあてた手紙のなかでつぎのように書きおくっています。

キリストを恐れ尊んで、互いに従いなさい。

(エペソ 5・21)

このみことばのなかの「互いに」ということばは、とてもたいせつです。

あなたがたは、このような人たちに、また、ともに働き、労しているすべての人たちに服従しなさい。

(Ⅰコリント 16・16)

妻たちよ。主にある者にふさわしく、夫に従いなさい。

(コロサイ 3・18)

同じように、若い人たちよ。長老たちに従いなさい。みな互いに謙遜を身に着けなさい。神は高ぶる者に敵対し、へりくだる者に恵みを与えられるからです。(1ペテロ 5・5)

「神は敵対する」と書かれています。「神は高ぶる者に敵対し、へりくだる者に恵みを与えられる」。まことにきびしいことばです。けれどもここにはすばらしい約束が含まれているのです。イエス様のみ名による祈りは、すべての信者のための祈りです。そして、自分が好きでないひとのために祈るひとこそ、主の奇蹟を経験するのです。

私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださいましたからです。神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。神を愛する者は、兄弟をも愛すべきです。私たちはこの命令をキリストから受けています。

(1ヨハネ 4・19-21)

5 十字架につけられること

イエス様のみ名による祈りはまた、「十字架につけられた」ひとびとによって祈られます。聖書のなかには何回も「古い人を脱ぐ」とか「新しい人を着る」という表現がでてきます。私たちは「古い人を脱いで」「新しい人を着る」ように要求されているのです。

互いに偽りを言つてはいけません。あなたがたは、古い人をその行ないといつしよに脱ぎ捨てて、新しい人を着たのです。新しい人は、造り主のかたちに似せられてますます新しくされ、真の知識に至るのです。そこには、ギリシヤ人とユダヤ人、割礼の有無、未開人、スクテヤ人、奴隸と自由人というような区別はありません。キリストがすべてであり、すべてのうちにおられるのです。

(コロサイ 3・9―11)

その教えとは、あなたがたの以前の生活について言うならば、人を欺く情欲によつて滅びて行く古い人を脱ぎ捨てるべきこと、またあなたがたが心の霊において新しくされ、真理に基づく義と聖をもつて神にかたどり造り出された、新しい人を身に着るべきことでした。

(エペソ 4・22―24)

イエス様のみ名によつて祈る者は、イエス様がなさったとおなじようなたいで祈るのです。イエス様は、ただたんに私たちの罪の負いめをぬぐいさるためにだけ十字架の死におもむかれたわけではありません。十字架のみわざは、「古い人」にたいする神の容赦ないさばきでもありました。私たちのなかからでてくるものはなんであれ、すべて役にたたないのです。すべてが死にわたされることこそ、正当なのです。

パウロはつぎのように書きしるしています。

キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架に

つけてしまったのです。

(ガラテヤ 5・24)

イエス様のみ名によって祈りたいと思う者は、もはや自分のことをたいせつにはしません。また自分の名誉や地位などを求めなくなり、聖書のなかにでてくる「肉」ということばは、「人間からでてくるすべてのもの」、「自分かつてなわがまま」や「自分自身の力からでてくるもの」などを意味しています。パウロはギリシヤ人への手紙のなかで、そのことをあきらかにしています。

神の御霊によって礼拝をし、キリスト・イエスを誇り、人間的なものを頼みにしない私たちのほうこそ、割礼の者なのです。

(ギリシヤ 3・3)

自分の国籍、自分の社会的地位、宗教的な背景、教養、自分の目的、自分の義。パウロはいぜんはこういったすべてのものをたいせつにしていました。こういうすべてのもの、つまり「肉」的なものにより頼み、それを誇りにしていたのです。けれどもイエス様と出会ってからは、かれは意識的に「肉」により頼むことをしなくなりました。「肉」にはなく主により頼みたいと願うようになったのです。いま読んだみことばのつづきを見るとそのことがよくわかります。

ただし、私は、人間的なものにおいても頼むところがあります。もし、ほかの人が人間的なものに頼むところがあると思うなら、私は、それ以上です。私は八日目の割礼を受け、イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者です。きつすいのヘブル人で、律法に

いてはパリサイ人、その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるところのない者です。しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。

(ピリピ 3・4―8)

主であつたあとは、パウロはこのように証しするようになったのです。

自分自身を否定することは、非常にたいせつです。

つぎのことはキリスト者にとって、もつともたいせつなところです。まえにもなにか見ましたけれども、もういちど見てみましょう。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。

(ガラテヤ 2・20)

「私ではなく、キリスト」。これこそ、主のみ名によって祈ることができるようになるための秘訣です。

主のみ名による祈りは、「主とともに十字架につけられた」ひとびとによって祈られます。私たちの弱さも強さも、私たちの知恵も愚かさも、すべてはイエス様とともに十字架につけられま

した。つまり、もはやそれらのことのすべては、ぜんぜんたいせつではなくなったのです。私たちのただひとつの誉れはイエス様です。そしてイエス様だけが私たちのただひとつの誉れであるなら、たとえ私たちが苦しみに満ちた状態のなかにあっても、自分の無力さと弱さがあきらかになるのではなく、イエス様のいのちが現われるのです。

6 聖霊に満たされること

イエスのみ名によって祈ることは、「聖霊に満たされて祈ること」です。

ヨハネの福音書の十四章から十六章のなかで、イエス様はのちに起こることについて、はっきりと語ってくださいました。そのなかでイエス様は聞きとどけられる祈りについて話されました。イエス様がおっしゃったのはつぎの三つのことです。

わたしはあなたがたとわかれて、父のみもとに行きます。

それからわたしはあなたがたのうえに、父の聖霊をそそぎます。

聖霊はあなたがたを、聞きとどけられる祈りの生活に導きます。

イエス様にとっては、「信者が聖霊によってもちいられるようになる」こと、また「聖霊のはたらきによってすべての信者のうちにイエス様のいのちが現われる」ことこそがたいせつでした。聖書によるとイエス様は、まずはじめに三年半のあいだ弟子たちとともにいてくださいました。そして五旬節らしい、弟子たちとともにいてくださるだけでなく、聖霊をとおしてかれらのうちに生きてくださるようになったのです。弟子たちはひとりひとりが聖霊をとおしてイエス様のか

らだである教会の一部となり、ぜんたいがひとつになってキリストを形成しました。

ですから、ちやうど、からだが一つでも、それに多くの部分があり、からだの部分はたとい多くあっても、その全部が一つのからだであるように、キリストもそれと同様です。

(Ⅰコリント 12・12)

このことをとおして、私たちは「イエスのみ名によって祈る」という権利を与えられているのです。つぎの聖句をもういちど見てみましょう。

「その日には、あなたがたはわたしの名によって求めるのです。わたしはあなたがたに代わって父に願ってあげようとは言いません。」

「あなたがたは今まで、何もわたしの名によって求めたことはありません。求めなさい。そうすれば受けるのです。それはあなたがたの喜びが満ち満ちたものとなるためです。」

(ヨハネ 16・26、24)

ただ聖霊だけが、私たちがみ心になった祈りをすることを可能にしてください。「私たちが主のみ名によって祈るために、聖霊が与えられた」と、聖書にはつきりと書きしるされていますとおります。

御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私

たちのためにとりなしてください。人間の心を探り窮める方は、御霊の思いが何かをよく知っておられます。なぜなら、御霊は、神のみところに従って、聖徒のためにとりなしをしてくださるからです。

(ローマ 8・26、27)

イエスのみ名によって祈ることは、聖霊に満たされて祈ることです。そして聖霊に満たされるということは、聖霊によって導かれることであり、聖霊によって支配されることです。それはつまり、主のみに支配権をおわたしすること、主のみに服従すること、自分の意志を砕いていただくことを意味しています。

7 絶えず祈ること

イエスのみ名によって祈ることはまた、「絶えず祈りつづけること」です。

イエスのみ名による祈りとは、ただたんに祈るというひとつの行為だけを意味しているわけではありません。それどころか、イエスのみ名によって祈るということは、「私たちの全生涯がイエスのみ名によって生かされる」ということにほかならないのです。

私たちはイエス様の代理人として、この地上で生活しなければなりません。すべてのことがイエス様のみ名によってなされなければなりません。

パウロはコロサイにいるクリスチャンたちにつきのように書きおくっています。

あなたがたのすることは、ことばによると行ないによるとを問わず、すべて主イエスの

名によってなし、主によって父なる神に感謝しなさい。

(コロサイ 3・17)

私たちはなにをするときでも、いつもつぎのことをしっかりと頭にいれて行なうべきです。

「私はイエス様のからだである教会の一部です。

私は自分かつてに行動することができません。

私は自分のしたいことをすることができず、

私が正しいと思うことをすることもできません。

私はただ、かしらであるイエス様の思いどおりに動きたいと思います」。

私たちが考えること、話すこと、行動することなどは、はたしてイエス様に結びついていることとの現われになっているでしょうか。

むすび

イエス様のみ名によって祈ることは、なにを意味しているのでしょうか。いままで見てきたことをここにまとめてみましょう。

すべてのことについて、私たちは主とひとつであるべきです。私たちはかしらである主のからだの一部分です。

すべてのことについて、主の支配があきらかになるべきです。

すべてのことについて、私たちは主によって支配すべきであり、勝利者となるべきです。

すべてのことについて、私たちはすべての信者のことを考えるべきです。

すべてのことについて、十字架が私たちのうちに働くべきであり、私たちは自我に死ぬべきです。すべてのことについて、聖霊のはたらきによって主のご栄光だけが現わされるべきです。

すべてのことについて、私たちは絶えず祈るべきです。

このようにまとめてならべてみると、「私にはとてもできない」と思うかたがあるかもしれませんが、せん。あきらめてしまいかたがあるかもしれませんが。けれども、「私たちがどのような者であり、私たちになにができるか」はたいせつではありません。「イエス様はどういうおかたであり、イエス様はなにがおできになるか」がたいせつなのです。もういちどつぎのみことばを思いだしてください。

「あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことがあなたがたにとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます。」
(ヨハネ 15・7)

これこそが祈りの秘訣なのです。「イエス様により頼むこと」、そして「イエス様に結びついていること」です。イエス様により頼む者にとっては、イエス様こそがすべてのすべてです。

あなたがたは、神によってキリスト・イエスのうちにあるのです。キリストは、私たちにとって、神の知恵となり、また、義と聖めと、贖いとになりました。

そしてあなたがたは、キリストにあつて、満ち満ちているのです。キリストはすべての支配と權威のかしらです。

(コロサイ 2・10)

キリストは聖なるものとされる人々を、一つのささげ物によって、永遠に全うされたのです。

(ヘブル 10・14)

イエス様は私たちのかしらであり、私たちに服従するための力を与えてくださいます。

イエス様は私たちの王であり、私たちに支配するための力を与えてくださいます。

イエス様は十字架につけられたおかたです。そしてイエス様は、イエス様とともに十字架につけられた私たちもまた、イエス様の復活の力を知るように望んでおられます。

イエス様は私たちを聖霊で満たしてください。だから私たちは満たされています。

イエス様は父を完全に満足させておられます。だから私たちも主に喜ばれる者となるのです。たいせつなのは主イエス様のうちにとどまることです。私たちが主イエス様と結びついているならば、聖霊が私たちを満たしてください。そうすれば、私たちは「イエスのみ名によって祈る」ことができるのです。

私たち人間には、自分の力で「イエスのみ名によって祈る」ことは決してできません。けれども私たちにはできないことを、聖霊が可能にしてください。ほんとうに私たちが主のみことばに従い、そして主との交わりを求めるとき、聖霊が働いてくださるのです。

祈りのかぎりない可能性



▲「脳出血で身体が不自由だが主を知って病気を忘れた」と証する沖縄の喜屋武昌信さんと信子さん。



▲夏のキャンプで救われ、洗礼を受けた飯森さん母子。



▲全国に広がる福音、祈りのかぎりない可能性。長野県上田の家庭集会。



日航とルフトハンザ航空の▶
チーフパーサーで祈りの友、
和田さんとギェンターさん。

「わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、あなたの知らない、理解を越えた大いなる事を、あなたに告げよう。」
(エレミヤ 33・3)

この聖句は「祈りのかぎりない可能性」を私たちに語っています。聖書を表面的に、その意味を深く考えないで読むひとでさえも、聖書のなかには、主に呼び求め、その祈りが聞きとどけられたひとびとの多くの実例があふれていることに気がつくことでしょう。ちよつと考えただけでも、アブラハム、モーセ、ハンナ、サムエル、ダビデ、エレミヤ、ダニエル、ヨナ、あるいはベテロ、パウロ、ヨハネと、その例にことかきません。かれらはみな、主がいかにかれらの祈りに答えてくださるかを経験しました。そして聖書は、「祈りのかぎりない可能性」を体験したひとびとのことが書いてあるだけではなく、私たちもまたおなじように祈り、おなじ体験をするようにとすすめています。イエス様が四つの福音書のなかでどれほど祈りの必要性をくりかえし指摘しておられるか、また書簡集のなかでどれほど信者の祈りの特権と責任がくりかえし強調されているか、そのことを考えれば、私たちも「祈りのかぎりない可能性」を体験するように強くすすめられていることがよくわかります。

聖書は「祈り」についての書物です。聖書をとおして、主が私たちに語られているのは、つぎのようなことです。

「だれが祈ることをゆるされ、いつ主のみ名が呼ばれ、私たちはどのように祈るべきか。そして私たちが主に近づくとき、なにが起きるか」。私たちがこれらのことをよく考えるなら、くりか

えし自分自身につきぎのように問いかけるようになるでしょう。「なぜ私はこんなにもすくなくしか祈らないのか」と。

主は私たちが祈りのひとになり、祈りの力を信じるひとになるだけでなく、「実際に祈るひと」になることを望んでおられます。なぜなら、主は私たちの祈りを聞き、それに答えたいと望んでおられるからです。私たちがあらゆる苦しみを持つて主のみもとに行きさえすれば、かならず答えてくださると主は約束しておられます。

「わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、あなたの知らない、理解を越えた大いなる事を、あなたに告げよう。」

(エレミヤ 33・3)

さて、祈りにはつねに「主の側面」と「人間的な側面」というふたつの側面があります。この聖句からもそのことがわかります。主はまず「わたしを呼べ」と言われます。これはまず私たち人間が願い求めるべきであることを示しています。そしてそのあとで主は「あなたに答える」と、はつきりと約束なさっておられます。私たちが「主を呼びたい」と思うだけで、主は確実に答えてくださるのです。このように、祈るときに問題になるのはつねにふたつの人格です。そのふたつの人格とは、「願いを持ちだす人間」と、「願いに答えてくださるおかた」です。

主なる神は考えられないほど偉大なおかたです。その偉大なおかたのもとに、私たちはあらゆる願いを持つていくことがゆるされているのです。そして主はただ祈りを聞いてくださるだけでなく、答えてくださると約束しておられます。ですから、「主が答えてくださる」ためには、ま

ず私たちが「祈りのなかで主のもとに行き、主のまえに私たちの心をそそぎださ」なければなりません。ヤコブはつぎのように書きしるしています。

あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです。（ヤコブ 4・2）

莫大な富が意のままになるにもかかわらず、目をとざし、耳をふさいで貧民のように生きていくのは悲劇でなくて难道でしょうか。主は私たちを豊かに祝福したいと思っておられます。そしてそのために、主は私たちが意識的に主により頼み、「祈る」ことを願っておられるのです。主は霊的な祝福でもって私たちを祝福されたいのです。それが私たちのためによいことであり、主の栄光を現わすためであるならば、たとえ一時的、物質的なことであっても、主はちゃんと祈りに答えて与えてくださいます。

「わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、あなたの知らない、理解を越えた大いなる事を、あなたに告げよう。」
（エレミヤ 33・3）

それではこれから「人間の願いとしての祈り」、「神の答えとしての祈り」という祈りのふたつの側面について、ごいっしょに考えていきましょう。

人間の願いとしての祈り

まず第一の点、「人間の願いとしての祈り」について考えてみましょう。

私たち人間は、祈るためになにをすべきでしょうか。

私たちは祈るために、なにかを暗記しなければならいのでしょうか？ 祈るのは、年数のたった信者たちだけでしょいか？ イエス様を信じてから、あるていど年月がたたなければ、イエス様が聞いてくださるような祈りができないのでしょうか？ 決してそんなことはありません。

「祈りは、人間の願いである」と、エレミヤ書の聖句ははっきり言っています。

人間がすべきことはただひとつ、主が「わたしを呼べ」とおっしゃっているとおり、主にむかって叫ぶことです。

祈ることは、主に叫ぶことです。祈ることは、主によって造られた私たち被造物が造り主である主のほうを向くことです。祈ることは、神の子どもとされた私たちが、願いを持って父である主のみもとに行くことです。

それではこれから「人間の願いとしての祈り」について、「祈りの源泉」「祈りの単純さ」そして「祈りにはなんの制限もない」という三つの点について考えてみましょう。

1 祈りの源泉

祈りの創始者は人間ではなく生きておられるまことの神です。したがって主なる神が私たちに働いてくださらなければ、私たちは決して祈ろうとはしないでしょう。私たちはみな無知な子どものようなものです。私たちはみな、なにをどのように祈ったらいいかを知りません。しかし聖書はつぎのように主のお約束をのべています。

御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます。

(ローマ 8・26)

「祈りの源泉」は、私たちを祈りにかりたて、私たちに祈るための力を与え、なにをどのように祈ったらいいか教えてくださる「聖霊」です。主はまず「わたしを呼べ」と命令なさいます。そして聖霊は「その命令のとおりに従いなさい。わたしはあなたを助けます」と約束してく下さるのです。

ほんとうに主のみもとに来るとき、そのひとは祈りのひとになります。祈りの源泉は、弱くてふたしかな人間などではなく、生けるまことの神ご自身なのです。

2 祈りの単純さ

つぎに祈りの単純さについて考えてみましょう。

ひとにとつて、叫ぶことよりも単純なことがあるでしょうか。子どもは不安になったりなにかほしくなったりすると叫んで母親に助けを求めます。これは本能的なことであり単純なことです。祈りとはなんでしょうか。それは主にむかって叫ぶことであり、主に助けを呼び求めることです。創世記四章二十六節は、聖書のなかではじめて祈りについて書きしるされているところですが、そこには「そのとき、人々は主の御名によって祈ることを始めた」とあります。

大きな声で祈るか小さな声で祈るかは、どうでもいいことです。祈りは主にたいする私たちの内面的な心のたいどです。あるばあいには私たちはせつばつまった状態にあり、とてもたくさんのかを祈れるようなよいなどないかもしれません。「主よ。助けてください。」（マタイ 14・30）とだけ叫んだペテロのような状態にあるかもしれません。

祈りとは、もつとも単純なものです。いつどのようなときにも、私たちは主に助けを呼び求めることができ、主はいつでも私たちの叫びを聞いてくださるのです。

「私は祈ることができない」と言うひとがいます。しかし主はつぎのように言っておられます。「それはうそです。あなたがしなければいけないことはただひとつ、助けを呼び求めることです。り、あなたの苦しみをこのわたしにうちあけることです」と。

3 祈りにはなんの制限もない

私たちが祈ることについて、なんらかの制限があるのでしょうか。その答えはつぎのようなものです。

だれでも祈ることができます。

どんなときにも祈ることができます。

どんな場所でも祈ることができます。

すべてのことについて祈ることがゆるされています。

つまり、祈りには制限などありません。もちろん祈るときには、私たちは主を信頼して自分の

悩みごとをすなおにうちあけられる状態でなければなりません。また主は、信者ばかりでなく未信者にも祈るようにすすめておられます。というのは、聖書のなかでつぎのように約束されているからです。

主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。

(ローマ 10・13)

いつでも、すべてのことのために、またいたるところで祈ることができます。祈ることはもつともかんたんで、単純なことなのです。

主の答えとしての祈り

私たちはここまで、「人間の願いとしての祈り」について、主なる神が祈りの創始者であること、また主は決してひとびとに多くの要求をしてはおられず、だれでも祈ることができることなどを見てきました。そこでつぎに、祈りの第二の側面である「神の答えとしての祈り」について考えてみたいと思います。

主は「人間が主に呼び求めれば、主はかならず答えてくださる」と、はっきりと約束しておられます。まさに聖書に「つぎのように書かれているとおりです。

「わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、あなたの知らない、理解を越えた大いなる事を、あなたに告げよう。」

(エレミヤ 33・3)

主は私たちの祈りにならず答えてくださいます。主に願い求めてなんの答えも得られないということは、決して決してありません。主のお約束はきわめて明快で、どんな小さな疑いもさしはさむよちがありません。主はお約束を守ってくださいます。私たちがしなければならぬことはただひとつ、主を呼び求め、主に叫ぶことだけです。私たちが主を呼び求めるなら、主はかならず答えてくださいます。

つぎに私たちは、「主は私たちの祈りにどんな答えをお与えになるのか」というたいへん大きくて重要な問題について、ごいっしょに考えてみましょう。

「主は私たちの祈りにいかなる答えをお与えになるのか」。この問いについては、五つの角度から学ぶことができます。

1 特定の答えを与えられる

「主はどのような答えをお与えになるのか」という問いにたいして、主は「特定の答えを私たちに与える」と約束しておられます。

「わたしは答えたい」と主は言われます。主はどうしてもお答えになりたいのです。したがってたとえ私たちが「祈って答えが与えられない」ということを経験したいと思っても、そんなことは不可能です。主は答えたいと願っておられますから、どんなことがあってもぜったいに答えてくださいます。

私たちはなんとしばしば、人間の考えや人間の言うことをたやすく信じてしまうことでしょう。

しかしもっともたいせつなことは、主なる神のお約束を信じ、主ご自身により頼むことではないでしょうか。

実例で考えてみましょう。あなたがお金を貸してくれというので、私が小切手を書くとして、私が金額を書き入れ署名し捺印した小切手をわたしたとたん、あなたはその小切手が確実に現金になることを信じて疑わないでしょう。私たちは人間の署名や捺印を見てさえそのように信じることができるのです。もしそれとおなじように、私たちが主なる神のみことばを信じて受けるなら、非常に大きなことを経験するのです。主がおっしゃることを信じることは、なによりたいせつです。「わたしを呼べ。そうすればわたしはあなたに答える」とおっしゃる主は、かならずご自身のお約束を実現してください。この世のなにもものをもつてしても、主がご自身のお約束を守ってくださいることをさまたげることはできません。

主は特定のお答えをくださることを約束しておられます。そしてつぎのような方法で、私たちにわかるように答えてくださいます。

主はすぐに、直接答えてくださいます。

主は私たちが期待したのとはちがったかたちで答えてくださいます。

主はすぐにはお答えにならず、あとになってはじめて答えが与えられます。

主は、私たちの願いが私たちのためによくないから、あるいはもっとよいものをくださるために、私たちの願いを拒絶することによって答えてくださいます。

これらの主が与えてくださるお答えのかたちについてもうすこしくわしく見てみましょう。

・すぐに直接答えてくださる。

主はしばしば瞬間的に答えてくださいます。私たちが主になにかを願うとき、つぎの瞬間それが私たちに与えられることがあります。それがあんまりはやく与えられるので、私たちは驚いてしまうでしょう。そこにはすこしの猶予ありません。私たちはしばしばそのように、祈りにたいするお答えを体験することがあります。私たちが小さなことのために祈ります。すると主が答えてくださいます。私たちがだれかひとりのひとの救いのために主にお願いと、あつというまにそのひとは主のもとに導かれるのです。

・私たちが期待したのとはちがったかたちで答えてくださる。

主はたしかに答えてくださるのですが、私たちが期待したのとはちがったかたちで答えてくださることもあります。聖書にはパウロがそのような経験をしたことが書かれています。

パウロには肉体のとげ、つまりかれを非常にこまった状態においこむ病気がありました。かれは主に三度、いやしてくださいるように願いました。しかしその結果、かれはこの病気から解放されなかつたのです。パウロは、自分がこの病気から解放されるなら主はもっと自分をもちいてくださることができると思いました。しかし主のお考えはちがいました。パウロは、「主は肉のとげをとりさるよりもっといいものをくださるにちがいない」ことを知ったのです。主がパウロにそのことをわからせてくださったのです。主は「わたしはいつもあなたとともにいる」とかれ

に約束してくださいました。そして主は、「わたしの恵み、わたしの臨在、わたしの力、わたしの平安は、あなたを支えるものとなります」と言われたのです。

このことについては、これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました。しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。

(Ⅱコリント 12・8-10)

このようにパウロは、願ったのとはべつのかたちで主が答えられるばあいもあるということを学びました。なぜかという、主はいつも私たちが願っているよりもっといいことをよくごぞんじであり、私たちの最善をいつも考えてくださっているからです。主はご自身のなさることをよくごぞんじです。だから主が私たちが期待しているのとはちがうかたちで答えてくださるときには、そのことをとおして、私たちが期待したよりもずっと大きなご栄光を現わしてください。それは私たちにとって最善のことです。そして私たちがばかりではなく、まわりのひとともそのことによっていつそう祝福されます。

このように、私たちが祈るとき、主はすぐに直接答えてくださり、また私たちが考えたり期待したりするのはちがったかたちで、私たちが考える以上によく答えてくださいます。

・すぐにはお答えにならず、あとになってはじめて答えが与えられる。

そしてまた、主がすぐに答えてくださらないこともあります。すぐにではなく、あとになってはじめて答えが与えられるのです。疑いもなく主はいつも私たちの叫びを聞いてくださいます。しかしあるばあいには、主はほんとうに私たちのためを考えてくださっているからこそ、あえてすぐには答えてくさいません。

私は主イエス様を知るとすぐに、宣教師になりたいと願いました。しかし実際に宣教師になるまでには八年かかりました。その八年のあいだも、主は私の祈りを聞いてくださっていました。しかしすぐには答えてくださらなかったのです。やがて主がそなえられたときがくると、主は道をたいらにしてください、私は私の願いにたいする最上の答えを体験することができました。このように、主はあるときには私たちの祈りにすぐに答えてくださらないこともあるのです。

・拒絶することによって答えてくださる。

主は私たちの祈りや願いを拒絶なさることもあります。これもまたひとつのお答えです。もちろん主が拒絶なさる以上、それには十分な根拠があります。子どもが刃物で遊びたいと言っても母親は許可しないでしょう。そしてなにかべつのものを与えるにちがいありません。

エリヤという預言者もちょうどそのような経験をしました。かれは「私のいのちを取ってください。私は死にたいのです」と主に祈りました。

自分は荒野へ一日の道のりをはいつて行った。彼は、えにしだの木の陰にすわり、自分

の死を願って言った。「主よ。もう十分です。私のいのちを取ってください。私は先祖たちにまさっていませんから。」

(Ⅰ列王 19・4)

エリヤがこのように願ったとき、主はおっしゃいました。「わたしはあなたの願いを拒絶することによってあなたに答えます。あなたはいま死んではいけません。あとになればあなたにもこのほうがはるかによかったとわかるでしょう」。主はこのように答え、エリヤの願いを拒絶していました。

私たちはみな、主が拒絶なさることがあるということを、なんども経験しています。主が拒絶なさるのは、そのほうが私たちにとってよりよいからです。私たちが願うよりも、よりよいものをお与えになりたいから、主はあえて拒絶なさるのです。

主は生きておられます。生きておられるまことの神は私たちの叫びにかならず答えてくださいます。主は瞬間的に答えてくださるかもしれませんが。私たちが期待しているのとはちがった方法で答えてくださるかもしれません。ずっとあとになってはじめて答えてくださるかもしれません。また主は私たちが願ったものよりもはるかによいものを与えるために、私たちの願いを拒絶なさるかもしれません。

いずれにしても、主はつねに「ひとつの特定の答え」をお与えになります。それはしばしば私たちの考えたとおりではありません。私たちが自分で選ぶのとはちがっています。しかし主はつねに答えてくださいます。なぜならば主ご自身が、「わたしを呼べ。わたしはあなたに答える」

と約束しておられるからです。主なる神はかならず、私たちのために特定の答えを約束してくださるのです。

2 個人的な答えを与えてくださる

「主はどのような答えを与えてくださるのか」という問いにたいする二番めの答えは、「主は個人的な答えを私たちに与えてくださる」ということです。「わたしはあなたに答える」と言われる主は、私たちに「まったく個人的に答えて」くださいます。

ここで、とてもたいせつなことをぜひ心にとめていただきたいと思います。祈りにたいする主の最上のお答えは、物質的、霊的な祝福をくださることはありません。もちろん私たちは、祈りの答えとして物質的、霊的な祝福をいただくことができます。たとえば新しい車を必要としているとき、私たちはその願いを主に申しあげることができます。そして主が願いを聞きとどけてくださるなら、それはすばらしい恵みの体験となることでしょう。また私たちは心の平安を必要としているときにも、その願いを持って主のみもとに行くことができます。そして主が祈りに答えて主の平和で私たちを満たしてください。それもまたおなじようにすばらしい体験です。しかし、これらのことよりもはるかにたいせつなことは、「主ご自身の啓示」です。「わたし自身があなたに答えます」と主は約束しておられます。だから私たちの祈りが聞きとどけられるということは、主がご自身を私たちに啓示してくださることにほかならないのです。

主がひとたびご自身を啓示してくださったなら、あなたはつぎのことを知ることができるでしょう。

う。「主はこの問題のすべてをみ手のうちにおさめてくださった。いま、すべてはととのえられている」。この確信こそが、私たちの祈りにたいする最大の答えです。

たとえ主の答えが私たちの思いとはちがっていても、たとえ主が長いあいだお答えをのばされているとしても、また、たとえ主が拒絶のお答えをなさるとしても、それがどうだというのでしょうか。主はご自身を私に啓示してくださいました。主は行動してくださいさるにちがいありません。主は、主のときに関与してくださいます。私はすべてをみ手にゆだねることができます。主は責任をとってくださいさるのです。

「わたしは、あなたがたに言います。求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれであっても、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。」（ルカ 11・9、10）

ここで主は、つぎのように言っておられるのです。「わたしを呼びなさい。そうすればわたしはあなたに答えます。わたしはあなたを思い、配慮し、まったく個人的にあなたに答え、わたしの愛と思いやりをあなたにそそぎます」。

3 目に見える答えを与えられる

「主はどのような答えを与えてくださるのか」という問いにたいする三番めの答えはつぎのようなものです。神は「目に見える答え」を約束しておられます。「わたしを呼べ。そうすれば、わ

たしは大いなることをあなたに告げよう」と約束しておられるのです。

「あなたは、祈るときには自分の奥まった部屋にはいりなさい。そして、戸をしめて、隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい。……」
(マタイ 6・6)

ここまでがこの聖句の前半の部分です。この部分までは、祈りは秘密に行なわれ、だれもそのことを知りません。しかしそれでおわりではありません。さらにつづきをみると、おなじ聖句の後半の部分では「そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます」と約束されています。このように、祈りは「目に見えない」隠されたことがらですが、主はその祈りへの答えを「目に見えるかたち」でくださいます。私たちはつぎのように言うことができます。「おお主よ。私はあなたに感謝します。そのために私は祈りました。そしてあなたはそれに答えてくださいました」と。

4 力強い答えを与えてくださる

主はどのような答えを私たちにお与えになるのでしょうか。いままで見てきたことをふりかえってみると、まず主は「特定の答え」を与えてくださいます。つぎに主は「個人的な答え」を与えてくださいます。さらに主は「目に見える答え」を与えてくださいます。

そして第四の答えはつぎのようなものです。主は「力強い答え」を与えてくださいます。まさに聖書に「わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、あなたの知らない、理解を越

えた大いなる事を、あなたに告げよう。」(エレミヤ33・3)とあるとおりです。この聖句のなかの「理解を越えた」ということばは、「ほんらい到達できない」ことを意味しています。つまり、私たちが祈るとき、全能の主は、ただ主ご自身だけにしかできないようなことをしてくださるのです。

主に不可能なことがあろうか。

(創世記 18・14)

主は人間的に見ればまったく不可能に見えることでも、私たちのためにそのことをしてあげたいと願っておられます。

たとえばダニエルは、祈りの答えとして、秘密をあきらかにする能力を与えられました。

しかし、天に秘密をあらわすひとりの神がおられ、この方が終わりの日に起こることをネブカデネザル王に示されたのです。あなたの夢と、寝床であなたの頭に浮かんだ幻はこれです。王さま。あなたは寢床で、この後、何が起こるのかと思ひ巡らされましたが、秘密をあらわされる方が、後に起こることをあなたにお示しになったのです。この秘密が私にあらわされたのは、ほかのどの人よりも私に知恵があるからではなく、その解き明かしが王に知らされることによって、あなたの心の思いをあなたが知りになるためです。

(ダニエル 2・28-30)

また預言者エリヤが祈ったとき、祈りの答えとして三年半ものあいだ雨がふりませんでした。

そしてかれがふたたび祈ったとき、祈りの答えとして、こんどは雨がふったのです。

エリヤは、私たちと同じような人でしたが、雨が降らないように祈ると、三年六か月の間、地に雨が降りませんでした。そして、再び祈ると、天は雨を降らせ、地はその実を实らせました。

(ヤコブ 5・17、18)

エリシャは、祈りの答えとして、死者がよみがえらされるという経験をしました。

エリシャが家に着くと、なんと、その子は死んで、寝台の上に横たわっていた。エリシャは中にはいり、戸をしめて、ふたりだけになって、主に祈った。それから、寝台の上に上がり、その子の上に身を伏せ、自分の口を子どもの口の上に、自分の目を子どもの目の上に、自分の両手を子どもの両手の上に重ねて、子どもの上に身をかかめると、子どものからだが暖かくなってきた。それから彼は降りて、部屋の中をあちら、こちらと歩き回り、また、寝台の上に上がり、子どもの上に身をかかめると、子どもは七回くしゃみをして目を開いた。彼はゲハジを呼んで、「あのシュネムの女を呼んで来なさい。」と言いつけた。ゲハジが彼女を呼んだので、彼女はエリシャのところに来た。そこで、エリシャは、「あなたの子どもを抱き上げなさい。」と言った。彼女ははいって来て、彼の足もとにひれ伏し、地に伏しておじぎをした。そして、子どもを抱き上げて出て行った。

(Ⅱ列王 4・32〜37)

ペテロは祈りの答えとして牢獄から導きだされました。

こうしてペテロは牢に閉じ込められていた。教会は彼のために、神に熱心に祈り続けていた。ところでヘロデが彼を引き出そうとしていた日の前夜、ペテロは二本の鎖につながれてふたりの兵士の間で寝ており、戸口には番兵たちが牢を監視していた。すると突然、主の御使いが現われ、光が牢を照らした。御使いはペテロのわき腹をたたいて彼を起こし、「急いで立ち上がりなさい。」と言った。すると、鎖が彼の手から落ちた。そして御使いが、「帯を締めて、くつをはきなさい。」と言うので、彼はそのとおりにした。すると、「上着を着て、私について来なさい。」と言った。

(使徒 12・5―8)

主は力強いお答えを約束しておられます。主は私たちにつぎのように呼びかけておられます。「あなたの悩みをわたしにうちあけなさい。あなたのまだ救われていない夫をわたしのところに連れてきなさい。あなたのわがままな子どもをわたしのところに連れてきなさい。あなたの最大の問題をわたしにうちあけなさい。どんなことでもわたしにとってむずかしすぎることはありません。わたしはそれを解決します。わたしは力強いこと、大いなること、考えられないようなことを行ないます。わたしは奇蹟を行なう主として、わたし自身を啓示します」。

私たちはこのお約束を信頼して主のみもとにいそぎ、エリヤのように真剣に祈るべきではないでしょうか。

5 圧倒的な答えを与えられる

主はどのような答えをお与えになるのでしょうか。最後にもうひとつ第五の答えについて考えてみましょう。主は圧倒的な答えを約束しておられます。「わたしはあなたの知らないことを告げよう」と主は言われます。主なる神は、私たちにはとても考えることができないようなことを、なしてくださいます。主はつぎのように約束しておられます。

「わたしはあなたのために、あなたがいまままで経験したよりも多くのことを行なう。わたしのところに来なさい。わたしが約束を守るか守らないか、わたしをためしてみなさい」。

「あなたの口を大きくあけよ。わたしが、それを満たそう。」

(詩篇 81・10)

主なる神は最大の与え主です。私たちがいくら多くのものを主に願っても、決して多すぎることはありません。かえってあまりにもすくなくしか願わない者、主にほんのすこししか期待しない者は、主のみ名をけがします。私たちは不可能なことを主に願い求め、期待するとき、そのことをとおして主をあがめているのです。

どうか、私たちのうちに働く力によって、私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて豊かに施すことのできる方に、教会により、またキリスト・イエスにより、栄光が、世々にわたって、とこしえまでありますように。アーメン。

(エペソ 3・20、21)

絶えず祈れ 上巻 終わり

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、
わたし(主イエス)のところに來なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」(マタイ11:28)

主イエスを知る喜びを一人でも多くの方に! 第3回“喜びへのコンサート” 1992年8月1日



▲メッセージと証し、そして音楽で綴られる“喜びへのコンサート”。



▲主に救われた感謝と喜びを、言葉で、声で、楽器で証しする人々。



▼神をはめたえよ。緒琴と笛として、神をはめたえよ。息のあるものはみな、主をはめたえよ。(詩篇150:4,6)





▲洗礼式の記念撮影。

▲洗礼式の祈り。

▲受洗者の一人、道川さん。

▲もうすでに水
与えられた



イエスは言われた。
「わたしは、よみがえります。
いのちです。
わたしを信じる者は、
死んでも生きるのです。」
(ヨハネ11・25)



◀納骨式や葬儀を通して
豊かに主に用いられる
福音センター。

浅間山の麓、雄大な自然の中で。
いのちにあつて、新しい歩みを……。

福音センターは全国から集いやすく、いろいろな主のご用をはたしています。



人々、つまりまことの洗礼を受けた人々が、
しるすための水のバプテスマ。



男はその父母を離れ、
妻と結び合い、
ふたりは一体となる。

(創世記2・24)

◀簡素ながらも豊かな主の祝福に
満ちあふれた結婚式。



▲アメリカからの友人と語るベックさん。



▲有志による朝の祈り会。▲



見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんというあわせ、なんという楽しさであろう。(詩篇133)

▼夏休みこそ西軽井沢の大自然の中で。



▲大規模な調理設備。キッチンでの婦人らがたのご奉仕。

▲みんな仲よく臨機応変に、力を合わせて。





前の祈り。



▲自由で楽しい語らいの園が次々にひろがって。



▼子供たちのバプテスマ・キャンプ。



▲ダイニングホール(食堂)。雄大な風景が窓外に。



日から日へと、御救いの良い知らせを告げよ。主の栄光を国々の中で語り告げよ。

(詩篇 96・2、3)



▲はるばる日本に來られたドイツの友人たち。はかりにもドイツにいる多くの方々が福音センターのために祈り続けてくださいました。

主を喜ぶことはあなたがたの力。

右下のセラミックタイル

(ネヘミヤ8・10)

▼ドイツの方々のセンターでの最後の晩。いまでも響いた賛美の交歓の歌声。



▼ドイツの友人からのプレゼントを持つ理香ちゃん。





▲ドイツからこられたエミリエさん(ミンヘンさんの妹)を囲んで。



▲司会の江藤さん(224 P 参照)。



▲センターの管理をなさる羽石真二、スーシー夫妻(229 P 参照)。



▲ベックさん



▲日本全国から仲よく集まって。



▲佐々木さん(証しは2248 P 参照)。



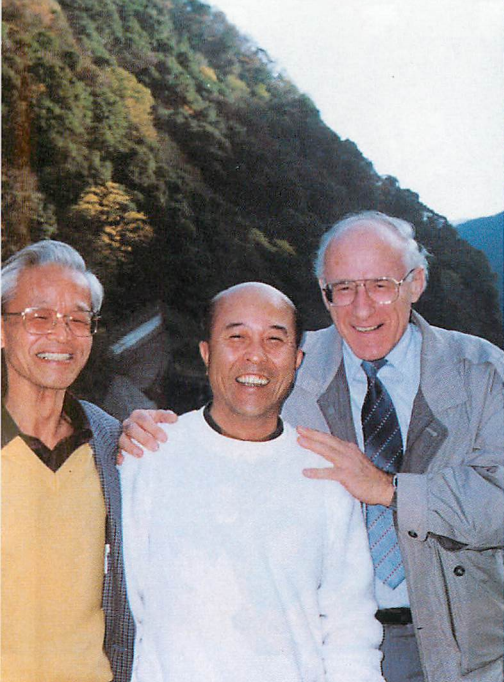
▲高橋さん(証しは2236 P 参照)。



▲日本全国から集められ

私たちにではなく、主よ、私たちにではなく、あなたの恵みとまことのために、栄光を、ただあなたの御名にのみ帰して





▲松山キリスト集会の佐藤さん(左)坂出キリスト集会の内田さん(中)と語るベックさん。



▼左手前はゲストハウス(西軽井沢福音の家)。離れて中央はメインホール(集会場)とその右ダイニングホール(食堂)。





▲辻さんの聖書朗読。



▲ホールにあふれる聖歌の歌声。



▲モーツァルト：アイネ・クライネ・ナハトムジークを演奏する弦楽四重奏団。



▼全国から集った方々が心を一つに歌いあげるハレルヤ・コーラス(ヘンデルのメサイアより)がメインホールに響きわたって……。





▲沖縄から来られた婚妻婦症の玉城さん(左)、友野さん(中)。



▲ハイドン：おもちゃの交響曲を演奏する子供たちと室内合奏団。



▲中西夫妻の賛美。



▲ハレルヤコーラスの出番を待って。



▲藤井さんの独唱。



さあ、主に向かって、喜び歌おう。われらの救いの岩に向かって、喜び叫ぼう。
感謝の歌をもって、御前に進み行き、賛美の歌をもって、主に喜び叫ぼう。(詩篇95・1,2)

—— 献堂式の賛美から ——





▲主に捧げる祈りと賛美。▲



おののお祝いの言葉。

▲ドイツから来られた皆さんの楽しいコーラス。

▲ドイツ各地の友人たちのご挨拶。この目的のために来てくださった48人の方々。

い。(詩篇115・1)



▼メインホールをうづめつした全員による聖歌は18番「神より生まれしもの」の賛美。

西軽井沢国際福音センターをくださった主を証するフォト・スケッチ

主に不可能なことがあるうか。(創世記18・14)

わたし(主イエス)は、あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましょう。父が子によって栄光をお受けになるためです。(ヨハネ14・13)



▲1992年5月、主が浅間山の南に建ててくださった西軽井沢国際福音センター。

▼1991年8月、後にダイニングホール(食堂)となる大屋根の下で。



▼心を一つにした祈りと奉仕によって少しずつ建ち上っていく福音センター。



完成した西軽井沢国際福音センターの

献堂式と第二回バイブル・キャンプのフォト・スケッチ

1992
5/2
—
5

一九九二年五月三日、完成した西軽井沢国際福音センターには、日本全国から千六百人以上の方々、またドイツ各地の集会から四十八人もの方が参加し、献堂式が行なわれました。献堂式には、メッセーじや日本各地、ドイツ各地のキリスト集会の方々からの祝い言葉、また主に捧げるコンサートなどが行なわれ、喜びと感謝と賛美がメインホールいっぱいになり、満ちあふれました。また献堂式前後の連休には、第一回のバイブル・キャンプや音楽会が行なわれました。その時の写真のごく一部をご紹介します。

これは主のなさったことだ。私たちの目には不思議なことである。これは、主が設けられた目である。この日を楽しみ喜ぼう。(詩篇118:23、24)



▲西軽井沢国際福音センターのメインホール(230坪)。



西軽井沢国際福音センターの献堂式にあたって

ゴットホルド・ベック

以下に掲載したメッセージは、一九九二年五月三日、西軽井沢国際福音センターの献堂式でベックさんがお話しになったものを収録したものです。

「自分に言いつけられたことをみな、してしまつたら、『私たちは役に立たないしもべです。なすべきことをしただけです。』と言いなさい。」
(ルカ 17・10)

主イエス様にだけ栄光あれ。これこそが私たちの心からの願いではないでしょうか。つづいてイザヤ書から三カ所、みてみましょう。

「あなたは、わたしが主であることを知る。わたしを待ち望む者は恥を見ることがない。」

(イザヤ 49・23)

「わたしはあなたの前に進んで、険しい地を平らにし、青銅のとびらを打ち砕き、鉄のかんぬきをへし折る。わたしは秘められている財宝と、ひそかな所の隠された宝をあなたに

与える。それは、わたしが主であり、あなたの名を呼ぶ者、イスラエルの神であることをあなたが知るためだ。」

(イザヤ 45・2、3)

最も小さい者も氏族となり、最も弱い者も強国となる。時が来れば、わたし、主が、すみやかにそれをする。

(イザヤ 60・22)

なんという素晴らしい主のお約束でしょうか。私たちは、この西軽井沢国際福音センターの建物とおして、主の偉大さを体験的に知るようになりました。この建物は、私たちの努力の結果というよりも、主によって与えられたものです。では、主はなんのためにこの建物を私たちにお与えになったのでしょうか。

1 主ご自身を啓示してくださるために

主がこの西軽井沢国際福音センターを私たちにお与えになったわけは、なによりもまず、主ご自身をこの場をもちいて啓示してくださるためです。私たちの主は、死んだおかたではありません。私たちの主はいまも生きておられるおかたです。私たちに主自身を啓示してくださるおかたです。私たちの主はつんぼではなく、われわれの祈りを聞いてくださったのです。私たちの主は、めくらではなく、私たちのあらゆる必要をすべてごぞんじです。この主は、私たちにきょうも呼びかけておられます。

「わたしがあなたがたのために、天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうかをためしてみよ。」
(マラキ 3・10)

偉大なる造り主であり、私たちの支配者であられる主ご自身が、私たち人間に頼まれるのです。「ためしてみなさい」と。

また、詩篇の作者であるダビデは、主なる神に出会ってからは、つぎのように告白せざるをえなくなつたのです。

まことに主は大いなる方、大いに賛美されるべき方。すべての神々にまさって恐れられる方だ。まことに、国々の民の神々はみな、むなしい。しかし主は天をお造りになつた。

国々の中で言え。「主は王である。まことに、世界は堅く建てられ、揺らぐことはない。主は公正をもつて国々の民をさばく。」
(詩篇 96・4、5、10)

われわれの主は、ご自身をあきらかにすることを心から願っておられます。けれどもそのためには、私たちの主にたいする信頼と、みことばにたいする従順が必要です。主なる神は聖書とおして、すなわちみことばをとおして、ご自身をあきらかにしてください。それゆえこの新しいセンターの中心もまた、みことばでなければなりません。主なる神の啓示がなければ、また主のみことばがなければ、私たちはほんとうにあわれむべき存在です。しかし主は、主に信頼する者が決して失望させられることがないと約束しておられます。旧約聖書の哀歌には、つぎのよ

うに書かれています。

私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。「あなたの真実が力強い。主こそ、私の受ける分です。」と私のたましいは言う。それゆえ、私は主を待ち望む。主はいつくしみ深い。主を待ち望む者、主を求めるたましいに。主の救いを黙って待つのは良い。

(哀歌 3・22-26)

私たちの人生において、イエス様の救いを体験的に知ることは、とてもたいせつです。ここでいう「体験的に知ること」とは、なにもイエス様についての知識を得ることを指すのではなく、「イエス様ご自身を知ること」です。そしてイエス様ご自身を知るとは、ただ上からの光によってのみ、また主ご自身の啓示によってのみ、私たちに与えられるのです。イエス様を体験的に知ることが、主なる神の啓示を前提としているのです。主によって与えられたパウロは、つぎのように告白しました。

私はそれを人間からは受けなかったし、また教えられもしませんでした。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。……(神は)御子を私のうちに啓示することをよしとされた……。

(ガラテヤ 1・12、16)

このように人間は、ただ上からの光によってのみ、自分のほんとうの状態、すなわち罪の状態を知ることができ、それによって、罪を赦すことがおできになるイエス様を体験的に知ることが

できるのです。イエス様を知ることとは、なにもキリスト教に入ることではないし、教会の会員になることでもないし、洗礼を受けたり、聖書を理解したり、いい人間になろうと努力したりすることでもありません。イエス様を知ることとは、「罪の赦しを得る」ことであり、心の平安、また永遠のいのちを自分のものにする事です。

主なる神は、この西軽井沢国際福音センターの建物を、どうして私たちにお与えになったのでしょうか。それは、主なる神がこの建物においてご自身を啓示したいと願っておられるからにほかなりません。つまり主なる神は、その恵みによって、この世界のなかで多くのひとびとがまことの救いにあずかることができるように、また信仰によって義と認められることができるようにと願っておられるのです。これこそが主の目的であり、またこの建物を私たちにくださった理由なのです。

この建物の名まえは、ご承知のように「西軽井沢国際福音センター」といいます。「国際」という文字がはいっている意味は、日本のひとびとだけが集まるのではなく、今回のバイブル・キャンプで四十八人というおおぜいのかたがドイツから来られたのをみてもわかるように、今後は外国のかたがたも多く集われるでしょうし、さらにはこの建物をとおして主の福音が宣べ伝えられ、そのことをとおして全世界に大きな影響がおよぼされなければならないからです。ここですさげられる祈りによって、主は全世界に働こうと望んでおられるのです。

さて、つぎのようなドイツ語の詩があります。私ははじめてこの詩を読んだとき、大きな感銘をうけました。ちよつとご紹介しましょう。

めぐみのときは終わりに近づいている。

広い世界に、いまや静かに、終わりの日が近づいている。

遠い砂漠の底から、不安な叫びが聞こえてくる。

私たちのまっくらな夜には、決して光がさしこまない。

私たちを照らす神の恵みがなければ、

私たちは苦しみと闇のなか、暗い道を行かなければならない。

永遠に、永遠に。

あなたがたは歌い、喜びに満ちて、

「自分は神の子である」と言う。

私たちは死のいけにえとなり、

恐怖に満ち、ひどい苦しみで満ちている。

あなたがたはなぜ、立ちどまっていて、

夜のはじまるいま、私たちを救おうとしないのか。

あなたがたはなぜ、主がそのひとり子をつかわして、

自分たちを愛してくださっていることを教えないのか。

あなたがたのおかげで、

私たちはそれを知らずに、希望もなく滅びていくのだ。

私たちは死ぬために生まれたのであり、

死は永遠から永遠にいたるわれわれの運命なのだろうか。

私たちには星が輝かない。

約束の光も照らされない。

遠くのほうにさばきの雷が聞こえる。

なぜ、なぜ、あなたがたは急がないのか。

神が「行って全世界に十字架の勝利者を宣べ伝えよ」と言っているのに。

あなたがたは私たちのあわれな心のための「喜ばしい知らせ」を持っている。

傷をいやす薬を、苦痛を永遠にいやす薬を持っている。

それなのに、なぜそんなに長く、沈黙しているのか。

どうか、あなたがたの信仰の岩にいたる道をしめすことばを、私たちにも聞かせてください。

神があなたがたに与えたなぐさめを、私たちにももたらしてください。

私たちの涙をぬぐってください。

私たちが死につくのも、あなたがたのせいです。

どうか私たちをも、祝福に導いてください。

私たちは罪に悩み、夜は近づいています。

私たちは自分のたましいを悪魔の力に与えなければならぬのです。

永遠に。永遠に。

遠くの国々から、いく百万人というひとびとが、
主を求めて叫んでいる。

私たち信じる者に、恵みを与えてください。

私たちの罪を赦してください。

あなたのためにのみ、私たちをおもちいになり、

私たちを使者としてお使いください。

待ちこがれているたましいのところへ、十字架のことはを運ぶ者としてください。

かれらが永遠に、永遠に、滅びないように。

この西軽井沢国際福音センターをとおして、福音は全国、全世界に宣べ伝えられるべきです。
ヨハネの福音書には、つぎのような箇所があります。

弟子のひとりシモン・ペテロの兄弟アンデレがイエスに言った。「ここに少年が大麦のパンを五つと小さい魚を二匹持っています。しかし、こんなに大ぜいの人々では、それが何になりますよう。」
(ヨハネ 6・8、9)

五つのパンと二匹の魚は、中学生か小学生くらいの少年のものでしたのです。この少年は、自分の持っているもののすべてをイエス様にささげたのでした。その結果、およそ五千人ものひとびとを満腹させることができました。われわれはこの少年のように、多くの救われていないひとびとのために自分の持っているものを、また自分自身をイエス様にささげようと思わないでしょうか。

2 まことの礼拝の場として

第二に、この西軽井沢国際福音センターは、まことの礼拝の場となるべきです。主なる神のことが中心にあり、主のみことばの力が体験されるところでは、おのずからまことの礼拝がおこります。だからこの西軽井沢国際福音センターは、生きておられるまことの神を礼拝する場とならなければなりません。まことの神は、まことの礼拝者を探し求めておられます。詩篇の作者は、つぎのことばで心から主を礼拝しました。

さあ、主に向かって、喜び歌おう。われらの救いの岩に向かって、喜び叫ぼう。感謝の歌をもって、御前に進み行き、賛美の歌をもって、主に喜び叫ぼう。主は大いなる神であ

り、すべての神々にまさって、大いなる王である。

来たれ。私たちは伏し拝み、ひれ伏そう。私たちを造られた方、主の御前に、ひざまずこう。主は、私たちの神。私たちは、その牧場の民、その御手の羊である。

(詩篇 95・1、3、6、7)

礼拝とはいったいなんだろうか。礼拝とは、内容のない儀式でも、形式的なものでもありません。礼拝とは、生きておられるまことの主を体験し、イエス様のすばらしさを味わい、知ったひとびとのみが感謝とともにささげることができると大きな特権です。まことの礼拝者とは、自分が罪の泥沼からひきあげられた者であり、自分の恥ずべき過去の罪がイエス様の血潮によってすっかり洗いきよめられているという確信をもっているひとびとのことを言います。まことの礼拝者とは、主がもはや自分を責めたり敵対したりするおかたではなく、自分の父であり、自分を愛しておられるということを知っている者です。まことの礼拝者とは、イエス様に栄光を帰することのみを願っている者です。まことの礼拝者とは、イエス様を喜ばせようという願いに満ちており、イエス様をほんとうに心から愛しているひとびとのことを言います。このセンターは、主なる神がご自身を啓示してくださる場所であればならないし、その結果として主なる神を礼拝する場所でないではありません。

レビ記のなかで、つぎのような箇所があります。

民はみな、これを見て、叫び、ひれ伏した。

(レビ 9・24)

民はみなこれを見て、喜びに満たされ、ひれ伏した、主を礼拝した、ということです。また、詩篇の作者は、つぎのように書いています。

私は心を尽くしてあなたに感謝します。天使たちの前であなたをほめ歌います。

(詩篇 138・1)

きょう、この日も、礼拝によって目に見えない世界のために強い影響をおよぼすべき日です。天使たちも、悪霊も、私たちをじっと見つめています。私たちが主を礼拝すると、悪霊は逃げださざるをえなくなるのです。

3 ほんとうの交わりの場として

ともに主のみことばを聞き、ともに礼拝をささげる者どうしには、ほんとうの交わりがあります。このセンターは、信じる者どうしの交わりの場でなければなりません。ほんとうの交わりの基礎、土台は、ひとりひとりが光のうちを歩むことです。

しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。

(Iヨハネ 1・7)

まことの交わりの秘訣は、主がわれわれをためしてくださるようにと心から願うことです。ダビデはつぎのように祈り、また願いました。

神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。私のうちに、傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。

(詩篇 139・23、24)

主よ。私を調べ、私を試みてください。私の思いと私の心をためしてください。

(詩篇 26・2)

ダビデは、このころがまえを持っていたからこそ、み心にかなうひとと呼ばれるようになったのです。哀歌にはつぎのように書かれています。

私たちの道を尋ね調べて、主のみもとに立ち返ろう。私たちの手をも心をも天におられる神に向けて上げよう。

(哀歌 3・40、41)

ドイツに、フリードリヒ・ボーデルシュヴィングというひとがいました。かれはイエス様を心から愛したひとで、孤児や貧しいひとびとのためにたくさんさんの家や街を建てたり、施しをしたりしたひとでした。ドイツでかれのことを知らないひとはおそらくひとりもないでしょう。かれは年をとると耳が聞こえなくなってしまうのですが、ひとの話が聞こえなくてもかならず日曜

日には集会にでたのだそうです。かれはときどき、まわりのひとから紙きれに書いて質問されました。「なにも聞こえないのに、どうしていつも来るのですか?」と。するとかれはいつも、「聖徒の交わりは、なにもものにもまさってすばらしいものだから」と答えたそうです。

近年、世界中のどこでも、ひとびとの関係はとも冷たいものになってしまっています。人間は不幸で、孤独で、満たされていないのです。どうしてでしょうか。結局みんな自分、自分、自分のことしか考えられなくなってしまったからです。

けれど信じる者の交わりは、別世界です。ひとりが苦しめば、ほかのひとびとも苦しみ、ひとりが悩めば、ほかのひとびともいっしょに悩み、おたがいのために祈りつづけます。私たちの大部分は、信じる者どうしの交わりのたいせつさ、そのすばらしさを知るようになっただけではなく、自発的にこの交わりを探し求めます。まことの交わりの土台は、ほかのひとのために自分自身を犠牲にする、というところがまえです。人間はだれでも交わりを必要とします。イエス様を信じる者どうしもまた、たがいに交わりが必要です。喜びをともし、悲しみをともにすることは、まことの交わりのしるしです。

以上でみてきたように、この西軽井沢国際福音センターは、主がご自身を啓示してくださる場であり、主ご自身が礼拝を受けられるまことの礼拝の場であり、そしてまた信じる者どうしのことの交わりがもたれる場所です。そしてそのために、主なる神はこの西軽井沢国際福音センターの建物を私たちに与えてくださったのです。

最後に、聖書からいくつかの箇所を見てみましょう。

ラッパを吹き鳴らす者、歌うたいたちが、まるでひとりでもあるかのように一致して歌声を響かせ、主を賛美し、ほめたたえた。そして、ラッパとシンバルとさまざまな楽器をかなでて声をあげ、「主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。」と主に向かつて賛美した。そのとき、その宮、すなわち主の宮は雲で満ちた。祭司たちは、その雲にさえぎられ、そこに立つて仕えることができなかった。主の栄光が神の宮に満ちたからである。

(Ⅱ歴代 5・13、14)

このような賛美と礼拝のあとで、祈りが、また願いが書かれています。

そして、この宮、すなわち、あなたが御名をそこに置くと仰せられたこの所に、昼も夜も御目を開いていてくださって、あなたのしもべがこの所に向かつてささげる祈りを聞いてください。

(Ⅱ歴代 6・20)

この祈りにたいする主のお答えはすばらしいお答えでした。

「今、わたしは、とこしえまでもそこにわたしの名を置くためにこの宮を選んで聖別した。わたしの目とわたしの心は、いつもそこにある。」

(Ⅱ歴代 7・16)

また、ヨシユア記と歴代史第二にはつぎのようにしるされています。

「あなたは年を重ね、老人になったが、まだ占領すべき地がたくさん残っている。」

(ヨシュア 13・1)

主はそれよりも多くのものをあなたに与えることがおできになります。

(Ⅱ歴代 25・9)

この全能の主を仰ぎ見ることが私たちにはゆるまれているのです。これこそ、考えられないほどのすばらしい特権であり、喜びです。

主は奇蹟をなしてくださった！

江藤善清

この証しは、西軽井沢国際福音センターの献堂式で、司会をなさった江藤さんが福音センターが建てられたいきさつをお話しになったものに、前後の事情を書き足していただき、収録したものです。江藤さんは東京大学を卒業、東芝に入社後、アメリカ、スペインに留学なさいました。その間、恵子さんと結婚、現在は経営コンサルタントをしております。

吉祥寺キリスト集会では、二十五年前から軽井沢のバイブルハウスをお借りして、毎年、一年間に五、六回、一回が二泊三日のバイブル・キャンプを開いてきました。バイブル・キャンプという、何かテントを張って……というイメージですが、実際は立派な建物の中の三食つきの「聖書の学び会」です。最初は参加人数も少なく、ほとんどが東京からの参加者でした。バイブル・キャンプがなければ、軽井沢などとまったく縁のなかった私たちは、霊的に満たされるという祝福と同時に、主が造られたすばらしい自然を満喫するという恵みも与えられ、二重に喜んでいました。

参加人数は、イエス様に祝福されて、年を追うごとに増えていきました。バイブルハウスを管理しておられるステッカーご夫妻は、吉祥寺キリスト集会のバイブル・キャンプのためにと、特

主は奇蹟をなしてください！

別に宿泊設備を増設してくださったほどでした。しかし参加者の数は、それをはるかに上回って増え続けました。四国から、関西から、沖縄から、九州から、北陸から、東北から、北海道から、そして地元の長野県から、と、参加なさる方々の地理的分布も段々と全国的になってきました。色々な問題で苦しんでいた方々が、友人、知人のクリスマスチャンのお誘いで遠路はるばるバイブル・キャンプに参加され、そこで主イエス様に出会って解放され、涙を流して喜ばれるようになる、という劇的なシーンが何回も繰り返されました。そのような方々が次のバイブル・キャンプにはご自分の友人や知人を誘って集われるといったことが続いて、やがて参加人数はバイブルハウスの収容力をはるかに越えるようになってしまいました。夜はざこ寝状態となり、自動車の中で一夜を明かす人々も出るようになりました。

食堂も、比較的大きなスペースの食堂でしたが、ぎっしり詰めても入りきれず、やがて食事が二回制になりましたが、それでもまだあぶれてしまい、ついには外で立食というようなことになりました。天気がいい時は快適でしたが雨の時は困りました。

台所はもっと大変でした。わりに狭い台所で、数百人の人々のために三食分を作るということは、並大抵のことではありません。それも三、四百人分まででしたら、キリスト集会のご婦人方の超人的な奉仕で何とか作れましたが、六百人を越えるような状態になりますと、物理的に不可能に近い状態となり、不測の事故が心配されるようになりました。

この時点で先のことを考えると、人数はもっとも増加することが予想されました。キリスト集会も沖縄から北海道まで、ほぼ全国的に広がり、お互いに会える機会が少なくなりました。

地方のキリスト集会の方々が吉祥寺キリスト集会に来られても、吉祥寺キリスト集会はいつもいっぱい。地方のキリスト集会の方々が集まれるのは唯一軽井沢、そのバイブルハウスが超満員のパンク状態。そこでいよいよ真剣な祈りが捧げられるようになりました。

軽井沢の西隣りに御代田町という町があり、ここに六、七年前、キリスト集会の方々の別荘が五、六軒ありました。ここは軽井沢と小諸のちょうど中間で、浅間山の南側のなだらかな麓に位置しています。後ろに浅間山、前は佐久の盆地が雄大に広がり、その向こうに八ヶ岳が連峰をつらねている風光明媚な土地です。ある大学の先生がこの地を訪問なさった時、「ここは東洋のイスです」と言われたそうですが、その命名に恥じないすばらしい地形になっています。

また、この地で見える夕焼けは、時として実に荘厳です。紅に輝いて濃淡のある雲の間から、太陽の光が虹のような色調でサッと下に走って、それが雲の動きで刻々と変化していく、そのさまを見ていると、それはまさに息を飲むような、圧倒的荘厳さです。神秘的でさえあり、創世記の中の、神が万物を造られたという箇所を彷彿させるものがあります。

この天地の壮大なドラマを見ていますと、自分というものは何とちっぽけな存在であろうかと改めて知らされる思いがします。

天地宇宙を創造なさった神の偉大さに打たれ、厳肅な思いにならざるをえなくなります。それらの天地万物を創造し支配しておられる唯一のまことの神様に私たちが愛されている、子供とされている、ということは、実にとてつもなく大きなことだ、と改めて思わされ、主への感謝の心を新たにさせられる思いがいたします。

主は奇蹟をなしてくださった！

ここは海拔千メートル近い高原ですので、レタスやセロリなどの高原野菜を栽培している畑が沢山あります。軽井沢と違って知名度が高くないので、土地の価格も高くありません。「ここに、まとまった広さの畑を買って、キリスト集会独自の大きな集会場が作れたら」と祈りのうちに導かれるようになりました。このようにして主イエス様は、今の西軽井沢の地に私たちを導いてくださったのです。地主さんの土地の権利関係が複雑な状況にありましたが、これも主イエス様が不思議な方法で解決してくださいました。

また、同じころ、センターの右前方に二百坪の土地も主が与えてくださいました。建設はまず、この二百坪の上にゲストハウス（西軽井沢福音の家）を建てる、という形でスタートしました。それからのことは、羽石さんが書いておられる通りです。

五年前、まだセンターもゲストハウスもなかったころから見ますと、今このようなすばらしい施設を与えられ、私たちはみな、「主は奇蹟をなしてくださった！」と心から実感しております。建設の途中には、実に色々な、予想もしなかったようなことがありました。一時はあまりにも複雑で難しい問題のために、建設は中途半端なまま、永久にストップするのではないか、と思わされた時期もありました。

しかし主はなしてくださいました！不可能と見える問題も次々と解決してくださいました！今、ふりかえって見ますと、そのような事態も「主がご自身の栄光を現わされるために、主が起こしておられたのだ」ということがよく分かります。私たち一人一人が改めて「主は生きて働いておられる」「主はすべてのことがおできになる」ということを知らされて、主の前にひざまず

くことを教えられるためでした。主に新たに賛美の歌を歌わざるをえないようにと、導かれるためでした。

そしてその背後に、日本全国各地のみなさん方のお祈り、遠くドイツの諸集会のみなさん方のお祈りがありました。このように立派なセンターが完成したということは、「主は祈りに答えてくださるお方である」ということの、何よりの証明です。

本プロジェクトを通して、主は私たち全員に、次のみことばを高らかに宣言しておられます。「見よ。わたしは、すべての肉なる者の神、主である。わたしにとってできないことが一つでもあろうか。」

(エレミヤ 32・27)

私の助けは、天地を造られた主から来る

羽石真二

この証しは西軽井沢国際福音センターの献堂式で羽石さんが話されたものを収録したものです。羽石さんは一橋大学法学部を卒業し、日本IBM、東京SIMに勤務の後、退職してセンター建設に専心、完成後は妻のスザンネ（スーシー）さんとともにセンターの管理のお仕事をしてくださっています。

一九八七年の九月に入ってからもなく、私は西軽井沢にあるベックさんのお宅を訪ね、「スーシーさんと結婚を前提としたおつきあいをさせてください」とお願いしました。幸いにも快いお返事をいただいたので、私は本当に嬉しく思いました。そのときベックさんといろいろなことをお話ししましたが、その中で一つ鮮明に覚えているのは、ベックさんが「この西軽井沢の地に新しい集会場を建てることを考えている」とおっしゃったことでした。生まれつき心配症の私は、そのとき、「集会場を建てるのは経済的にも大変だろうし、建てたあとの運営も大変だろうなあ」と漠然と考えていました。

翌八八年の二月、スーシーと私は結婚し、新しい生活を始めましたが、一方で集会場建設のプロジェクトは暗礁に乗りあげ、同年の夏頃には、私の常識では実現不可能に見えました。

「苦難の日にはわたしを呼び求めよ。わたしはあなたを助け出そう。あなたはわたしをあ

がめよう。」

(詩篇 50・15)

ベックさんご夫妻をはじめこの計画に携わったキリスト集会の方々は主のみ名を呼び求めました。その結果、絡まってほぐけなくなってしまうた糸が一本ずつほぐれるように様々な問題は解決され、翌八九年五月には寄宿舎であるゲストハウス(西軽井沢福音の家)の建設が始まりました。ベックさんのお宅は大工さんたちの飯場となりました。たくさんのキリスト集会の婦人たちが、大工さんの食事のために交替で奉仕してくださり、九月には完成の運びとなりました。このゲストハウスは、福音を伝える宿泊施設という本来の役割りに加えて、福音センターの建設に際しての宿泊所、連絡所、食堂、物置きとして大きな役割りを果たすことになります。

わたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましょう。
父が子によって栄光をお受けになるためです。あなたがたが、わたしの名によって何かをわたしに求めるなら、わたしはそれをしましょう。
(ヨハネ 14・13、14)

次いで、いよいよ福音センターの建設の段になりましたが、私たちの前には様々な困難がありました。地元の住民の方から同意をいただくこと、開発や建築に伴う行政上の許可の問題、資金的な問題など、乗り越えなければならぬことがたくさんありました。兼務ではなく、本腰を入れてこれらの問題に取り組む人がどうしても必要な状況となり、八九年十月、私は短いサラリーマン生活に終止符を打ち、キリスト集会の仕事に専念することにしました。

会社を辞めたものの、プロジェクトは遅々として進みませんでした。私は荒れ果てた建設予定地にたたずみ、「主よ。あなたにとって、不可能なことはないはずです。主よ。どうかあなたの栄光を見せてください」と、祈りました。

私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。信仰がためされると忍耐が生じるということを、あなたがたは知っているからです。その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります。

(ヤコブ 1・2-4)

主は目的を持って私たちを様々な状況に置かれます。私たちは困難な状態にあると「主は私たちを見捨ててしまわれたのではないか」と呟きたくありません。しかし、主は私たちを困難な状況に置くことで、私たちに祈ることを学ばせようとしているのです。

できるだけ安く、しかも良いものを建設したい。それがキリスト集会のみなさんの願いでした。工事見積りを三社にお願いし、専門家の助けを得て研究、検討した結果、アメリカの設計図に基づいて、アメリカの材料を使い、大工さんもアメリカから呼ぶことが最善の方法であることが分かりました。

一九〇年八月。地元住民の方の同意も得られ、行政上の許可もあり、資金的な目途もついた段階で、いよいよ西軽井沢国際福音センターの建設が始まりました。建設会社が現地に入り、造成工事、基礎工事がスタートし、十一月までに基礎工事と浄化槽の埋設を終えました。この間全国か

らキリスト集会のみなさんが集まり、基礎の鉄筋を針金で結んだり、コンクリートを型枠に流すときには木槌で型枠をたたいて中の空気を抜いたりしました。

こういうわけですから、もしキリストにあつて励ましがあり、愛の慰めがあり、御霊の交わりがあり、愛情とあわれみがあるなら、私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてください。

(ピリピ 2・1、2)

そしていよいよ本体の建築工事に入るかどうかという段階で、資金の問題から一時この段階でしばらく中断せざるを得ない状況にありましたが、主は奇しい方法をとってください、キリスト集会の数名の方々が大きな犠牲を払ってくださったことにより、建築に入ることができるようになったのです。九一年の四月には、アメリカから材料が届き、大工さんたちも到着して建物本体の工事が始まりました。ゲストハウスに寝泊まりしている大工さんたちのために、たくさんの方々が全国から食事や掃除の奉仕のために訪れました。この一年間に、最高で二十二人、延べ五十人のアメリカ人の大工さんがゲストハウスで過ごしました。また、この一年間にアメリカからコンテナが五十八台届きましたが、荷下ろしのためにもたくさんの方々のキリスト集会のみなさんが汗を流されました。聖書カバーやベールなどを製作販売し、収益を献金してくださいました。ご婦人方もいらつしやいます。ご自分の資産を処分して代金をささげてくださいましたご夫婦もいらつしやいます。こうした数えきれない犠牲があつて初めて、このプロジェクトは実現可能とな

りました。これらの建設に要した費用、つまりゲストハウスの土地代と建設費の約六千二百万円、福音センターの土地代と建設費の約七億四千万円の合計約八億円は、すべてキリスト集会の方々の犠牲と献金でまかなわれたのです。

工事中、大きな事故もなく人が人もでなかったことは、主の守りの結果であると言わざるをえません。それはまた、たくさんの方々の祈りの結果であったことも忘れてはなりません。

私自身、このプロジェクトに携わる中で、毎日大小様々な問題に直面し、どう解決してよいのか分からないことが数多くありました。建設現場の北側にそびえ立つ浅間山を見ながら、何度詩篇の百二十一篇を思い起こしたか分かりません。

私は山に向かって目を上げる。私の助けは、どこから来るのだろうか。私の助けは、天地を造られた主から来る。主はあなたの足をよろけさせず、あなたを守る方は、まどろむこともない。見よ。イスラエルを守る方は、まどろむこともなく、眠ることもない。

(詩篇 121・1～4)

「それは人にはできないことです。しかし、神にはどんなことでもできます。」

(マタイ 19・26)

一九九二年五月二日から五日まで、ほぼ完成した西軽井沢国際福音センターで、献堂式を兼ねた初めてのバイブル・キャンプが行なわれました。全国各地から約千六百人のキリスト集会のみ

なさんが集まって、主のみわざのすばらしさをともに賛美しました。さらに、二十数年の間、ベックさんご夫妻の日本での働きのために祈り続けてくださったドイツの集会のかたがた四十八人も駆けつけてくださり、ともに主をほめたたえることができました。五月三日には献堂式に先だって早朝に洗礼式が行なわれ、このバイブル・キャンプの期間中に九十人もの方々が洗礼を受けられ、主イエスに従っていくことを証しされました。

西軽井沢国際福音センターの建設工事が一段落した今、この場所を、主に最大限に用いていた
だくためにはどうしたらよいのか、私たちはその答えを祈り求める必要があります。集われる方々の宿泊場所の問題、駐車場の問題、子供の遊び場の問題など、解決されなければならない問題もまだたくさんあります。さらに、現在土地が取得されている福音センター北部の通称シオンの山の活用についても、この地に主のみ心になるように、祈り続けていく必要があります。私たち信じる者のひとりひとりが、集会の問題を自分自身の問題としてとらえ、心を合わせて主に祈り続けるならば、主は必ず私たちの祈りに耳を傾け、ご自身の栄光を現わしてくださいと確信します。

それにしても、神はたして人間とともに地の上に住まわれるでしょうか。実に、天も、天の天も、あなたをお入れすることはできません。まして、私の建てたこの宮など、なおさらのことです。けれども、あなたのしもべの祈りと願いに御顔を向けてください。私の神、主よ。あなたのしもべが御前にささげる叫びと祈りを聞いてください。そして、この宮、すなわち、あなたが御名をそこに置くと仰せられたこの所に、昼も夜も御目を開いて

いてくださって、あなたのしもべがこの所に向かってささげる祈りを聞いてください。

(Ⅱ歴代 6・18～20)

「今や、わたしはこの所でささげられる祈りに目を留め、耳を傾けよう。今、わたしは、とこしえまでもそこにわたしの名を置くためにこの宮を選んで聖別した。わたしの目とわたしの心は、いつもそこにある。」

(Ⅱ歴代 7・15、16)

主はあなたを見放さず、あなたを見捨てない（申命記 31・6）

高橋艶子

この証しは、西軽井沢国際福音センターの献堂式で高橋さんがお話になったものに前後の事情を書き足していただき、編集したものです。高橋さんは静岡県立沼津高女専攻科を卒業後、正一さんと結婚され、アートフラワーとフランス料理を飯田深雪氏に師事、アートフラワーをご自分でも教えておられたほか、吉田茂元総理の元コック志度藤雄、増井錠治の各氏からフランス料理を、また陳建民氏から中国料理を学びました。吉祥寺キリスト集会の初期の頃から葬儀のお世話や、集会やバイブル・キャンプで食事の準備のご奉仕を多くの集会のご婦人方とともにしてこられたかたです。

神は、いつさいのものをキリストの足の下に従わせ、いつさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えになりました。教会はキリストのからだであり、いつさいのものをいつさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。

（エペソ 1・22、23）

永い間待ち望んでおりましたこの西軽井沢国際福音センターがやっと完成しました。全国各地のキリスト集会の皆様、そればかりでなく四十八人もドイツの主にある集会の皆様が初めて一つところに集うことができ、イエス様のご栄光そのもの、主イエス様ご自身そのものを目のあたりにし、主への賛美と、言葉では言いあらわせない感謝でいっぱいでございます。

三年前、この西軽井沢国際福音センターが建てられるという計画をお聞きしてすぐ、私たちは「主よ。どうか私たちが何をすればよいのか、み心をお示しください」と真剣に祈りはじめました。そして次のようなみことばを主に示され、私たちはみな、大きな緊張をおぼえました。

それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。

(エペソ 4・12、13)

奉仕する人があれば、神が豊かに備えてくださる力によって、それにふさわしく奉仕しなさい。それは、すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して神があがめられるためです。栄光と支配が世々限りなくキリストにありますように。アーメン。

(Ⅰペテロ 4・11)

祈りへのお答えとして、私たちキリスト集会の婦人たちには、まず大工さん方の食事のお世話

が主から与えられました。初めはゲストハウスの建築のためにベックさんのお宅に泊まりこんでいた二人の日本人大工さんのお食事のお世話でした。そのうちにアメリカ人の大工さんたちが来られ、人数もだんだんと増えて十人以上になりました。ゲストハウスができて次に福音センターの建設にとりかかってからは、お食事の支度もベックさんのお宅のお台所から真新しいゲストハウスのお台所へと変わりましたが、その間、絶えることなくいつも五、六人から七、八人のキリスト集会のご婦人たちが交替でご奉仕を続けられました。

十人から多いときは家族も含めて三十人近い大工さん方の食事作りは、量の多いことや近くに買い物をするお店がないこと、またお味ひとつにしても戸惑うことが多く、どうしてよいのか分からないことばかりでした。

それはそれは大変でしたが、しかしそういった問題を通して多くの方々が仲よく語りあう場になり、また仕事の合間にはご一緒に主を賛美したり、共に聖書を読んでお祈りをしたり、私たち集会の婦人たちの訓練と、主にある幸せなお交わりのお恵みをたっぷりいただく、こよなき祝福の場ともなりました。皆様は口々に、「帰りたくないわねえ」とか、「早く行きたいけれど、いいでしょう」と喜んで、心を一つにしてご奉仕をなさったのでございます。

手が足りないとき、お忙しい中を大きな犠牲をはらって駆けつけてこられた方々。また遠くにお住まいのため「ご奉仕には行かないけれど」と、いろいろな食料品を送り続けられた方々。また、奥様にご奉仕にすることを許してくださり、お仕事の関係で便宜をはかってくださったり、いろいろな食品を送ってくださったという、ご主人様やご家族の方々のご協力もありました。

本当に多くの多くの方々が、このことを通して主と一つに結ばれることができました。私たちは、このご奉仕を通して、主から数えきれないほどのお恵みをいただくことができました。そして、困ったことがあるたびに、いつもイエス様が私たちとともにいてくださり、生きて働いておられるということを体験することができました。ここにその実例のいくつかを、皆様に代わって、ご紹介したいと存じます。

肉も野菜もたっぷりあるはず、と思つて冷蔵庫を開けてみると、中は空っぽ、ということが何度でもございました。大工さん方の食事の量は、五、六キロほどもある肉の塊りがあつというまになくなるほどですし、材料の管理や仕入れの係が決まっているわけではございません。ご婦人方はほんの二、三日であわただしく交替していきますし、毎日毎日三度のお食事作りと後片付け、さらに午前、午後の二度のおやつの支度に追いまくられていますから、引き継ぎなどする暇はございません。お買い物をするといつても車で何キロも行かなければならない場所ですし、そんなときに限つて車もありません。ですから冷蔵庫を開けてみて中に何もないと分かつた瞬間、力が抜けて座り込んでしまうということは、よくあることでした。

そんなとき、私たちはどうしても主におすがりするしかありません。ほかに手だては何もありません。「お夕食の時間はせまっているし、車もなくて買物にも行かれないし、主よ。どうしたらいいのでしょうか」と祈っていると、「宅急便です」と大きな荷物が届くのです。開けてみると、何と、中は肉の塊り、ハム、ベーコン、じゃが芋、お野菜で一杯です。私たちは子供のよう

に歓声をあげ、ただただ主に感謝いたしました。主はこんなことまでも氣にかけてくださり、お

約束通りすべてをご支配なさっておられるお方であることが体験できました。その夜のメニューは、ホテルのレストラン並みでございました。そして、こういうことは一回や二回きりでなく、それこそ何度も何度もございました。

彼（イエス様）に信頼する者は、失望させられることがない。

（ローマ 9・33）

その後、福音センターの建設も進み、厨房の設備を整えなければならなくなりました。厨房といっても、いままでの家庭の台所を少し大規模にした程度の設備とは違って、一度に千五百人からの食事を作る本格的な業務用の設備が必要です。私たちはどうすればいいのか、ふたたび主に祈り求めました。そのころ山形の病院で召されたある方のご葬儀のとき、私はその方の妹さんのご主人様が厨房設備にお詳しいとお聞きして、ふと、福音センターの厨房設備のことを相談してみようという気になりました。そうしたらすぐその場で電話で連絡をとってくださって、日本でも最高級のフジマツクの厨房設備を、考えられないようなお値段で提供してくださることになったのです。もし、ご葬儀でその方にお目にかからなければ、この厨房設備のことはもっともっと難航したことでしょう。このことの背後にも、主が福音センター建設をよしとして働いてくださっておられることをまざまざと目のあたりに見る思いがいたしました。

またそれまでは、東京や御代田、軽井沢などでそのつど買っていた食料品、調味料などが、集会の方々のご努力によって専門の業者から安くまとめて、しかも配達つきで買えるように整えられていきました。また、食器の一部や調理器具が用意されていないことが分かったのは、キャン

プまで二週間しかない頃のことでしたが、集会の方がお知りあいの業者を紹介してください、注文した調理器具が一週間で届けられました。

そのうちにも日一日と、西軽井沢国際福音センターでの最初のバイブル・キャンプという大事な日が迫ってきましたが、いつになっても台所の工事が終わりません。今度の厨房は、お鍋一つをとっても、直径一メートルはあろうかという鉄の回転鍋です。掻き回す杓子は一メートル半あります。食洗器や高性能のフードカッターなど、私たちがそれまで使ってきた家庭用とは規模も使用法もまったく桁ちがいですから、ぶっつけ本番ではとても使いこなせそうありません。キャンプが始まる前に予行演習をしておかなければ、などと話し合っておりましたが、予行演習どころかこの様子では、はたして当日食事をお出しすることができるとも分かりません。私たちは、くる日もくる日も、ひたすら主に祈りました。

その頃、私は体の調子が悪くなり、病院で検査を受けました。そしてバイブル・キャンプも後数日に迫った頃、皆様に支えられてセンターの近くの集会のある方の別荘にたどりつきました。体が弱っているためお側にいながらご奉仕もできず、これから先のお話は、その前後にいろいろな方々からお聞きしたことを皆様に代わってお伝えするものでございます。

キャンプが始まる前前日の四月三十日になっても、まだ上下水道も使えない状態で、とうとう工事終了を待たずに備品の収納と片付けをはじめてはみたものの、もうとても予行演習どころではなくなってしまうました。前日の五月一日、やっと上下水道とガスが何とか使えるようになりました。しかし私たちは、主のご計画は必ずなるものだと思っておりましたから、あまり心配は

いたしませんでした。

いよいよ当日がやってきました。バイブル・キャンプの初日で、センターに来られたのは六百余人余りでした。この日、どのようにして夕食の準備ができたのか、それはただ主の奇蹟としかいようなのないものでした。数日來の疲労を押して懸命に働かれるご婦人方に加えて、主は、その道のプロの方々を何人も助け手として遣わしてくださいました。西軽井沢国際福音センターの最初の食事、そのお献立は、トンカツ、野菜サラダ、それに味噌汁でした。出来上がったお料理を前にしての食前の祈りは、それはそれは素晴らしいものだったそうです。ごさいます。

するとイエスは、五つのパンと二匹の魚を取り、天を見上げて祝福を求め、パンを裂き、人々に配るように弟子たちに与えられた。また、二匹の魚もみなに分けられた。人々はみな、食べて満腹した。

(マルコ 6・41、42)

また私自身の身にも、まったく計画にないできごとが起こりました。しばらく前から体に少し異状を感じておりましたので、四月半ば頃検査してもらったところ、がんということでした。

「このことは自分の計画にはなかったけれど、これはまさに主のご計画なのだ」。私はためらういとまもなくそう思わされました。「この病氣は主がゆるされたものののだ。この病氣のことは主がすべてをご存じでいらつしやる。主をご存じであつたら必ず主が責任を持ってくださる」。このような確信が与えられ、祈りました。「主よ。私はあなたに身を避けます。弱い私をお助けください」。そのとき不思議なほど静かな深い平安で包まれました。そして一つのみことばが頭

をよぎりました。

愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現われるときにも、喜びおどる者となるためです。

(Ⅰペテロ 4・12、13)

キリストの苦しみにあずかれる。キリストの栄光が現われるときに喜びおどる者とならせていただける。確かなお約束に涙があふれました。「イエス様に愛されている。サタンに勝利したイエス様のみ手の中に守られている」という感謝で胸がいっぱいになりました。

その夜、私は厳肅に、衿を正して主の前にひれ伏しました。

あなたがたの神、主は、あなたがたが心を尽くし、精神を尽くして、ほんとうに、あなたがたの神、主を愛するかどうかを知るために、あなたがたを試みておられるからである。あなたがたの神、主に従って歩み、主を恐れなければならない。主の命令を守り、御声に聞き従い、主に仕え、主にすがらなければならない。

(申命記 13・3、4)

「主よ。どうぞ私の心を探ってください」。主への恐れ。ご真実な主のご愛に對して、私はどれだけ主を愛しているでしょうか。祈りの怠慢、キリスト集会の皆様への愛が足りなかったこと、また主人へのわがままな態度、子供たちや家族のためにどうであつたか。悔い改めの思いがいつ

ばいになりました。翌朝、毎日主人と共に読む日めくりのみことは、たった一行、「あなたの罪は赦された」でした。

イエス様の血潮はいつも私に必要です。イエス様に救われていて本当によかったと感謝でいっぱいでした。がんと宣告され、もしイエス様を知らなかったら、今頃はどんなに不安と恐怖にさいなまれていたことでしょう。

私は二十五年前にイエス様を救い主として信じて受け入れました。聖書のメッセージを通して、二千年前に私の罪のために十字架にかかって身代わりに死んでくださり、罪を赦してくださいました。イエス様のことを聞き、ただただ感謝して素直に従いたいと思いました。これはあとで分かりましたが、まったく一方的な主のあわれみでした。永遠のいのちをいただき、国籍を天に持つている幸いを深く感謝いたしました。

たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわざいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。

(詩篇 23・4)

強くあれ。雄々しくあれ。彼らを恐れてはならない。おののいてはならない。あなたの神、主ご自身が、あなたとともに進まれるからだ。主はあなたを見放さず、あなたを見捨てない。

(申命記 31・6)

死に勝利し、サタンに勝利したイエス様の巖の上に守られている私は本当に幸せです。

主はあなたを見放さず、あなたを見捨てない

いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

(ガラテヤ 2・20)

私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。(ピリピ 1・21)

「私のいのちはイエス様のみ手の中にあります。主よ。どうぞみむねのままになさってくださいますように。ただあなた様のご栄光をさまたげることのないようにお守りください」と、今は祈っております。

この福音センターが完成した大きな喜びのほかに、もう一つ私に大きな喜びが与えられました。私をはじめて導かれた頃、吉祥寺キリスト集会はまだ二、三十人くらいの小さな家庭的な群れでした。当時ベックさんご夫妻から、ドイツにある集会の皆様が、吉祥寺キリスト集会のためにいつも祈ってくださいているということをお聞きしておりました。ある時ドイツに行く機会が与えられ、四カ月ほど、ベックさんご夫妻と共にドイツの各地の集会を訪ね、主にある皆様とお交わりをさせていただきました。そのときドイツの集会の皆様が、どんなに真剣に吉祥寺キリスト集会のことを祈ってくださいっておられるか、またベックさんご夫妻の伝道を支えてくださっているか、また祈るかを目のあたりにしました。私たちの知らないところで多くの祈りが捧げられていることを知り、信仰をもって間もない私には、大きな驚きでした。

今日のこの大きな主のご栄光と祝福のかげには、今日に至るまで祈り続けてくださった多くの

方々がいらつしゃるのです。その方々がはるばるドイツからいらつしゃるということは、本当に涙がでるほど嬉しいことでした。中にはそのとき以来親しくお付き合いをいただいている懐かしい方も数人いらつしゃいます。私はどうしてもこの方々を心からお迎えしたいと願い、主に祈りました。「どうかそれまで体力を与えてください」。主はその祈りに答えてくださり、私はこの地に来てドイツの集会の方々をお迎えすることができました。ようこそ日本へ。そしてようこそ西軽井沢国際福音センターへおいでくださいました。

このドイツからいらつしゃった主にある皆様方も、同じ主のからだである教会の一部です。言葉が通じないので細かいことは話しあうことができませんが、主にあつて一つからだである方々とのあいだではあまり言葉は要らないことが分かりました。主にある者の交わりのすばらしさを感謝いたしました。

こうして私共が祈り願ったこの福音センターが今日ここに建てられ、これから、全国から様々な問題をもって苦しんでおられる方々、また生きる希望を失って迷っている方々が、そして各地のキリスト集会の方々のご家族や知人の皆様が次々に導かれることと思います。また祝福のかげにはサタンも大活躍することと思います。

みことばは次のようにいっております。

終わりに言います。主にあつて、その大能の力によって強められなさい。悪魔の策略に対して立ち向かうことができるために、神のすべての武具を身に着けなさい。私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天に

いるもろもろの悪霊に対するものです。ですから、邪悪な日に際して対抗できるように、また、いっさいを成し遂げて、堅く立つことができるように、神のすべての武具をとりなさい。では、しっかりと立ちなさい。腰には真理の帯を締め、胸には正義の胸当てを着け、足には平和の福音の備えをはきなさい。これらすべてのものの上に、信仰の大盾を取りなさい。それによって、悪い者が放つ火矢を、みな消すことができます。救いのかぶとをかぶり、また御霊の与える剣である、神のことばを受け取りなさい。すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのためには絶えず目をさましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。(エペソ 6・10-18)

私たちは目を覚まし、神の完全な武具をつけてサタンの攻撃に屈することのないように、そしてこの主によって建てられた西軽井沢国際福音センターが大いに祝福されますように真剣に祈っていかねばならないと、今新たに強く思わされております。

聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。神であられる主、万物の支配者、昔いまし、常にいまし、後にこられる方。
(黙示 4・8)

主よ。われらの神よ。あなたは、栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方です。あなたは万物を創造し、あなたのみこころゆえに、万物は存在し、また創造されたのですから。

必要を満たしてくださいさる主

佐々木サチ子

この証しは、西軽井沢国際福音センター建設の費用の一助にと洋裁、手芸で作った作品を集会で販売した代金を献金し、ご奉仕なさった大勢のドルカスの会の皆様に代わって、献堂式当日サチ子さんが話されたものに、さらに詳しい事情をうかがって編集したものです。サチ子さんは高知でドレメ系の専門学校を卒業し洋装店で修行の後洋裁教室を開き、現在は注文服の仕立てをしておられます。

神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要をすべて満たしてくださいさる。

(ピリピ 4・19)

二年前のこと、洗礼式の時に、皆さんが洗礼を受けた方に贈られる花束の数の多いのに気がつき、ふと、「これだけの花束なんだから、その代わりにプレゼントになるようなもの、たとえばボールや聖書カバーを作って皆さんに買っていただいてその代金を献金したら、西軽井沢国際福音センター建設に少しでも役立たないものだろうか」と思いつき、四、五人の婦人方といっしょに作品を作り、ベックさんのご了解をいただいて吉祥寺キリスト集会の棚に置いてみたのがはじ

まりでした。そのうち参加する方々も増え、誰言うことなく、「沢山の下着や上着を作ったという使徒の働き第九章にでてくるドルカスのようね」と語り合うようになり、ある時、作品に添える連絡先を書いた小さなメモにどなたかが「ドルカスの会」と書かれたことから、自然にドルカスの会と呼ばれるようになりました。

ほんのささやかなものを主に捧げたいと始めたご奉仕でしたが、私たちはこのご奉仕を通して、心一つにして主に頼り、祈ることの素晴らしさと、共に働くことの喜びを深く深く教えられました。そして主はこの二年間、私たちの祈りに答えて数々の素晴らしきみわざを示してくださいました。その恵みの数々を一人でも多くの方々に知っていただき、つたない作品を喜んで買い求めてくださいました多くの皆様と喜びを分かちあいたいと願って、その内の幾つかを、皆様に代わりましてご紹介させていただきたいと思います。

ご婦人方は初めの頃は、沢山の作品を作ろう、素晴らしい傑作を作ろう、と自分の力で頑張ろうとする気持ちになることもありましたが、工夫を凝らしてとても良い作品が出来上がったと思っていると、そういう作品に限っていつまでも売れないのです。かえって、なかなか上手にできなかったりした時、こんなものでも主のお役に立つかしら、買ってください方があるかしら、と、気にかかって祈っていると作品はパツとなくなります。このようなことを通して、私たちはいつしか私が、私という心を碎かれて、少しずつ誰も「頑張らなく」なっていました。主がすべてを配慮してくださるのだから、ただお任せして、たとえできないことがあってもただ素直に「主よ。これしかできませんでした」と言えばよいのでした。

また、ご奉仕をすることより何より、まず祈りが中心になっていきました。私たちは一度も、「何を作ろうか」と計画したことはありません。素材のほとんどは献品ですから、何が来るのか、それで何ができるのか、私たちには分かりません。必要なものが足りなくて困っている時、祈っていると献品があったり、またいただいた材料がどの様にして生かされるのか分からない時、祈っていると、使い道が自然に与えられます。例えば、厚手の黒い生地をたくさんいただいて、何を作ったらよいでしょうかと祈っていると、献堂式のハレルヤ・コーラスのスカートという使い道が与えられるのです。ある洗礼式の時には、どうしてもグレーのベールが欲しい方があって、生地を祈り求めましたが与えられません。染めようということになって、黒、グレー、茶、紺と染めたら、なんと数日後に九州から染めた数にびったりの注文がきたのでした。皆が驚きました。

地方にお住まいの方々や、ご奉仕の場に出いらっしゃれない方々も、いろいろと作ったものを送ってこられました。ある山奥に住む八十歳近いご婦人は、若い時縫製工場で働いたことがあり、その時以来ためておいた布きれで子供服やカバーを作り、まとまると送ってこられます。

また病身のある方は、「主のために何かできることを与えてください」と祈られ、主に導かれて聖句の色紙をたくさん書いて、ご自分の名を伏せてそっと託してこられます。どちらの方も、「ドルカスの皆さんとお会いすることこそできないけれど、このような形でささやかなご奉仕ができる」と喜んでおられます。

また、最近救われた十歳と七歳のお嬢さんたちは、「お母さんのように私もイエス様に捧げたい」という一心で懸命に布地を縫って小さな人形と野菜を作られました。それはそれはかわいい

作品で、福音センターで並べるとあつという間に売れてしまいました。

このように主は九十歳から七歳までのいろいろな方々の心に不思議な喜びを与えられ、必要を満たされ、主のあふれるばかりのご愛を小さな奉仕の上に輝かせてくださったのでした。

車いっぱい、一度では運べないほど布地を献品してくださったある方の会社。昔打ちこんでいた仕事を主に導かれてやめ、その時使っていた高価な楽器を手ばなされるたびに、代金を喜んで捧げておられた方。ご主人が病で召され、残されたお金でつましく子供と暮らすある方は、多額のものを度々主に捧げておられました。

このように全国から寄せられた、あまりにも多くの捧げ物と、それを一つ一つ心を込めて作られた多くの方々のご奉仕を、いつも主がいっぱいに祝福してくださり、それを通して私たちはいつも主からいただく喜びに満たされ、心を一つにすることができました。

この二年間、あちこちでバイブル・キャンプがあるたびに、かかさず日本の各地に作品が運ばれていきました。沢山の作品を運ぶためにも前もって計画したことはありませんが、祈っていると主がいとも喜んで運んでくださる方々に出会わせてくださいます。また作品が少なくて悩んでいると、品物を託す何時間か前に宅急便が届き、ある時は仙台の方から、またある時は九州の方から、思いがけない作品が届いたこともしばしばありました。

皆さんの作品はまた、日本国内だけでなく、昨年末には十枚のペールがドイツへ送られ、また今年五月には七十枚の聖句画入り色紙がアメリカへと、海を越えて運ばれていきました。

集会で結婚した六十四歳の花嫁のウェディングドレスも、その結婚が決まる直前にこのことを

何も知らないある方からびつたりの布地が献品されてきました。

ここにご報告させていただきましたのは、主がなさってくださいだった恵みのほんの一部です。主の備えとお導きによって、このように豊かに満たしていただき、心から感謝いたしております。昨年末のこと、ベックさんが「福音センターの台所の設備の費用約八百五十万円はドルカスだよ」と婦人方におっしゃいました。その時はその金額に三百万円ほど足りないことを知っていたので、「あと三カ月でそんなにたくさん作品がどうやって作られるのだろう」と思いました。なぜならその金額は、一年目の年間売り上げ献金の額より多かったですから。しかしこのこともいつさいを主に委ねて心配することをすべてやめました。そして三月の末になって、売り上げ献金額を全部合計してみましたら、八百六十八万円になっていました。わずか三カ月の間にまるで湧き水があふれるように作品が集まり、そして売れたのでした。

以上、ご奉仕なさった多くの方々、喜んで買ってくださいだった方々に代わって、これらのものがどのように使われたかを正しく知っていただき、主の備えてくださった恵みを多くの方々と共に一つになって喜びを分かちあいたいと存じ、ここに僭越ですがご報告申しあげました。

この西軽井沢国際福音センターが多くの主を求める方々の救いの場、憩いの場となって用いられますように。婦人方の小さな奉仕にそいでくださいました神様のご愛と御恵みに、心から感謝申しあげます。

○献堂式やバイブル・キャンプの期間中には、もちろんこれ以外の多くの方々の証しやメッセージがありました。ページ数の都合で、残念ながら割愛せざるをえませんでした。ご了承ください。

基礎的なみことば

救いに至らせる信仰は、人間の理性や感情に基づくのではなく、ただ神のみことばに基づくです。理解したいという意欲や、何かを感じたいという意欲ではなく、ただ幼な子のように神のみことばを信頼することだけが誘惑の危険からあなたを守ってくれます。

その助けとなるように、いくつかのみことばを次にご紹介いたします。聖書を開いて、そのみことばを考えながら読んでください。そして与えられたみことばの内容のために、イエス様に感謝してください。そうすれば主はあなたを祝福してくださいさるでしょう。

一 みことばの大切さ

ヨハネ 17・17 エレミヤ 15・16 Iヨハネ 5・13 Iペテロ 1・23 詩篇 119・105、160、162

二 悔い改めと信仰

Iヨハネ 1・9 箴言 28・13 詩篇 32・1、5 イザヤ 55・6、7 ヨハネ 6・37

三 私たちの身代わりとなられたイエス

イザヤ 53・4、6 Iペテロ 2・24 IIコリント 5・21

四 血潮の価値

イザヤ 1・18 ローマ 3・24、25 Iヨハネ 1・7 エペソ 1・7 Iペテロ 1・18、19

黙示 12・11

五 確信の根拠

イザヤ 43・1、25 イザヤ 44・22 ルカ 7・48 ヘブル 8・12 ヘブル 10・17

詩篇 103・12 ヘブル 13・5、6

六 思いわずらうな

マタイ 13・22 マタイ 6・25、32 ピリピ 4・6、7 Iペテロ 5・7、9 詩篇 55・22

七 試練の時

ヤコブ 1・12 ヤコブ 4・7、8 Iコリント 10・13 Iペテロ 5・8、10

Iペテロ 1・5、7 IIコリント 12・9、10 ローマ 5・3、5 ローマ 8・28

イザヤ 40・29、31

実を結ぶ命がんにうち勝ったドイツ少女リンデのおすすめ

二十歳そこそこのドイツの少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇跡であり、神の实在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」

(エレミヤ 31・3)

リンデの、主に従い通す態度は、吉祥寺キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起し、多くの人々が自分の支配権をイエスさまに明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。

なおこの本は韓国語版、ドイツ語版が出版されました。さらに病床にあつて本の読めない方々のために、PBAのアナウンサー渡辺康子さんが朗読したテープ(8本1組)があります。



ゴットホルド・ベック 編著

実を結ぶ命

がんにうち勝ったドイツ少女リンデ
価三三〇円

お申込みはハガキに本の名前(第何集、上下巻の別)、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上〒180武蔵野市吉祥寺本町4-9-11吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。

光よあれ「私たちは主のもの」証しシリーズのすすめ

光よあれ

「私たちは主のもの」

第1集

25人の証し

価三三〇円

山本孝子さんの「み翼のかげで」、野口広教授の「*klein aber mein* から *klein aber Dein*」、野田繁さんの「虚しさからの脱出」、染野待子さんの「主が語られたことは必ず実現する」、池田傳一さんの「光の中に移されて」など、またベックさんのメッセージ「神は愛です」を収録。

第2集

25人の証し

価三五〇円

松見敬三さんの「曙からお昼過ぎまで」、古田稔・康子夫妻の「すべてを主の御手に」、アルコール依存症から脱出した染野茂夫さんの「駆けのほりし主の道」、重田定義教授の「主の御名はほむべきかな」など、巻末にはベックさんの「無限の宇宙にある神」が掲載されています。

第3集

42人の証し

価三三〇円

江藤善清・恵子夫妻の「天国を望み見て」「主に導かれて」、蘇畑卓郎さんの「とこしえの磐」、納富信子さんの「主のご真実に支えられて」、武井達郎・生子夫妻の「主のよくしてくださったことを何一つ忘れるな」など。ベックさんの「みこころが地でも行なわれますように」を巻末に収録。

光よあれ

「私たちは主のもの」

第4集

66人の証し

価三五〇円

第5集

67人の証し

価三八〇円

第6集

70人の証し

価三八〇円

ニュースキャスター山川千秋さんの夫人穆子さんの「ここに、主がおられる」、故笹川郁夫・公子夫妻の「もはや私ではなく、キリストが私の中で」「走るべき行程を走り終えた夫」、竹本誠一さんの「主に導かれて七十年」、大塚二郎助教授の「高慢を砕かれて」などが掲載されています。

吉屋和子さんの「その栄光は地に満ちわたれ」、村上誠弁護士と夫人の「主とともに歩む」「キリストにはかえられません」、田中順治・節子夫妻の「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした」「数えてみよ、主の恵み」、大城紀美子さんの「今日まで灯し続けた信仰の灯」など。

玉城新正さんの「恐怖から解き放たれて」、新井稔さんの「妻の安らぎとともに救われて」、岡本広海・基子夫妻の「キリストにある愛、喜び、平安」「今あるは神の恵みです」、森島左武郎・久仁子夫妻の「あなたは豊かなところへ…」
「栄光と支配がキリストにありますように」ほか。

お申し込みはハガキに本の名前（第何集、上下巻の別）、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上、〒一八〇武蔵野市吉祥寺本町四一九―一吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込を。なお一部品切れの節はご容赦ください。



なにもかも私たちが神の愛から引き離すことはできない（上・下巻） ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びの内、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第一章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。

私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。

この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。

なにもかも私たちが

神の愛から引き離すことはできない（上・下巻）

ゴットホルド・ベック著

各巻とも価三〇〇円

お申込みはハガキに本の名前（第何集、上下巻の別、冊数、氏名、住所、電話番号）記入の上〒180武蔵野市吉祥寺本町4-9-11吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。

主イエスは言われた。

見よ。わたしは、世の終わりまで、
いつも、あなたがたとともにいます。 マタイ28:20

牧師制度がありません

私たちのキリスト集会には牧師制度がありません。会社員、公務員、教師、医者、経営者、芸術家、弁護士、技術者などさまざまな職業を持つ人々が集まって、自発的に責任を分かちあい、一切強制されることなく、純粹に聖書のみことばによりたのみ、主にある交わりを保つものの集いです。

会員制度がありません

もちろん名簿もありません。ですから「会員」になりたくてもなれないのです。いわゆる宗教団体的な制度は一切排除して、主ご自身のみが頭となって働かれ、導かれ、主ご自身が満ち満ちておられることのみを祈り求めている集会です。

組織・会則がありません

私たちの集会には、役員会も、総会も、定例会議も、会則も存在しません。みんなが助けあって重荷を分かちあい、全てが自発的に、喜びをもってなされています。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度がなく、献金は自発的に行なわれ、無記名ですから主のみがご存じです。

日曜礼拝と家庭集会

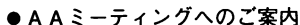
日曜日には、主の十字架の血潮をしのんでの礼拝があり、その後の福音集会では兄弟たちが交代でメッセージを伝えます。全国には70箇所以上に家庭集会があり、礼拝を行なう所も増えています。

キリスト集会

吉祥寺キリスト集会のご案内

吉祥寺キリスト集会

日曜礼拝	10:30	および14:00
日曜メッセージ	12:00	および15:00
子供日曜学校	9:00	
中高生日曜クラス	9:00	
青年日曜クラス	14:30	
火曜学び会	11:00	
水曜学び会	19:30	
木曜祈り会	19:30	
春・夏・秋	西條井沢バイブルキャンプ	



260

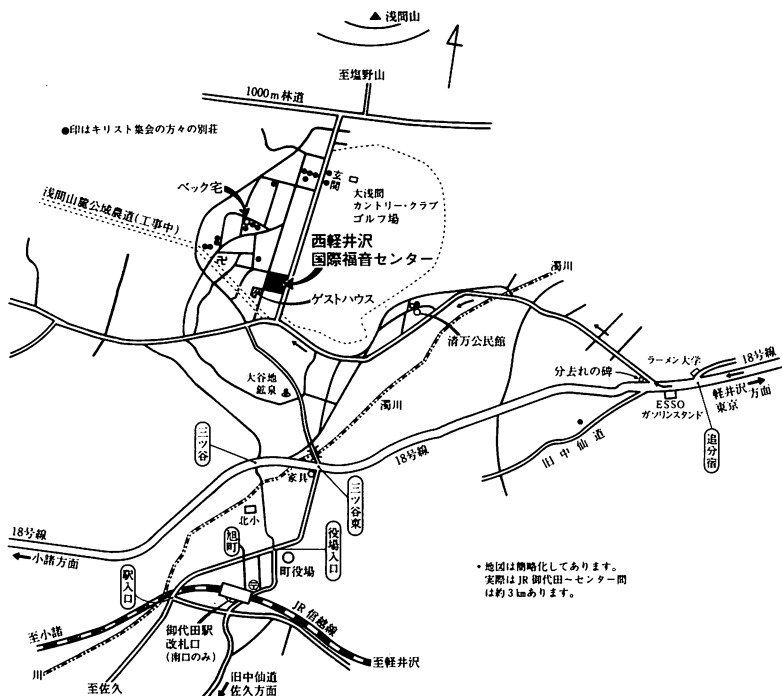
西軽井沢国際福音センターのご案内

西軽井沢国際福音センター

0267-32-6400(代) 長野県北佐久郡御代田町塩野450-15 〒389-02

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス

0267-32-6444 長野県北佐久郡御代田町塩野450-33 〒389-02



- ・ J R 信越線で御代田駅下車。タクシーで約5分＝800円程度。徒歩約45分＝3 km。
御代田へは東京上野駅から信越線特急「あさま」で軽井沢乗りかえ、普通で3つ目の御代田駅下車。
- ・ 国道18号線で軽井沢から追分信号を越えて1.5km先、2つ目の追分宿の信号を越えて10km先、左に ESSO のガソリンスタンド、右に「分かれの碑」を右折して約3 km。
- ・ 道路は禁駐車周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。

絶えず祈れ

(上巻)

1992年12月1日初版

著 者 ゴットホルド・ベック

装 幀 飯守恪太郎・上野文子

編 集 酒井千尋

校訂・整文・入力 上野鮎子

絶えず祈れテープ聞き書き草稿

藤本淳之助

編集連絡 飯守節子

印 刷 新生運動

表紙写真 フォトライブラリー讃美

発行所 キリスト集会

〒180 東京都武蔵野市吉祥寺本町4-9-11

電話 0422-22-2016(ベック宅)

振替 東京 0-56116

定価400円

(本体388円)

撮影・松浦忠孝（麦畑の幻影—美瑛町）



400円
(本体価格388円)